
真・恋姫†無双～紫雷の龍～

紫龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十無双～紫雷の龍～

【Zコード】

Z0210P

【作者名】

紫龍

【あらすじ】

現代とは似て非なる世界で、敵の大将との激闘の末、討ち果たすも、自身も命を落としてしまう主人公 雷魔紫電。しかし、その世界の神に気に入られ、「真・恋姫十無双」の世界に転生される。彼は、この世界で何を成し、どのように生きるのか?今、新たなる外史の扉が開かれる!オリ主モノで、『都合主義』です。オリキャラも多数登場します。また、主人公は完璧超人です。シリアルは一応あります、最初の方ぐらいです……多分。更新は、不定期です。感想やアドバイス等も待ってます。でも、中傷的なことや、作品批

判はい遠慮願います。結構、傷つくので……。

序章一（前書き）

自分の処女作です。初めてなので、変なところもあると思うのですが、温かい目で見守っていただけたら幸いです。

更新は、不定期になると思います。

これらのこと踏まえて、それでも良いと感じの方は、お付き合いください。

序章一

「とある城の玉座の間」

「ここに対峙する一人の男がいた。一方の男 冷王は、いくつか傷があるものの、魔剣を肩に担ぎ、余裕の表情で、もう一方の男を見ている。 もう一方の男 雷魔紫電は、腰にさしていった刀と銃剣を 後ろに飛ばされ、自身も満身創痍であった。

「どうした、雷魔紫電？ もう終わりか？」

冷王は魔剣を肩にトントンと当しながら紫電に話しかける。

「はー、誰も終わりだなんて言つてない！」

そう言い、紫電は右手 手のひらに「封」と書かれている を前に出す。

「これが俺の本当のメイン武器、大鎌『天竜』だ！」

紫電がそう言つた瞬間、何も無かつた空間から大鎌が出現する。

「やつとその武器を出しあつたか。だが、お前は満身創痍。我は、まだまだ余裕。この勝負見えたな」

冷王がフツと笑いながらそういつづく。

「いいや。まだわからないぞ……ハアアー！」

紫電が気合を入れた瞬間、彼からものすごい霸氣と殺氣、それに闘気が発せられる。同時に、彼の体の回りに紫色の電撃が走り始める。

「フフフ……ハツハハハハハ！それでこそ、『紫雷の龍』と恐れられた男！良いだろう。我も本気で迎え撃つまでだ！！」

冷王がそういふと同時に、彼からも凄まじい闘気が溢れ出る。

「いぐぞー！覚悟、冷王！…」

「笑止！覚悟するのは貴様だあーー！」

ガギィイイイインー！

勢い良く魔剣と大鎌がぶつかり合ひ。さらに、二人は何合も斬り合ひ。一人の身にまた多くの傷が付き出す。

「ハアアアアアアアアアアーーー！」

「オオオオオオオオアアアアアーーー！」

雄叫びを上げ、さらに斬り合ひ。幾度も幾度も。自身の誇りをかけ る。

しかし、いつまでも続くかと思われた斬り合ひは、鎧迫り合ひになつた後、お互いが離れたことで途切れる。

双方とも肩で息をしながら、相手を見据える。

「クククク……どうやら、お互い次の一撃が最後らしいな

冷王が笑いながら、紫電に話しかける。そして、紫電もその整った顔に笑みを浮かべている。

「ああ……どうやらやがてだな……ハハハ」

そうしばらくの間お互いに笑い合ひつ。

「では、決着といこうか」

「ああ。いいぜ！」

そういうや頃や、両者とも今出せる最高の一撃のために構えを取る。

卷之三

そして同時に切りかかる

「ハアアアアー！ 龍霸雷光閃！ーー！」

ドガアアアアアアン！！！

両者の奥義がぶつかり合い、あたりが強烈な光と振動に包まれ、煙が舞い上がる。

そして、煙が晴れて、一人の姿が現れる。

「フ……フフフ……」流石……『紫雷の龍』雷魔紫電……此も……

戦いで……あつたわ…………グハアー！」

ドシャアア…………

冷王が倒れ、紫電が近づく。

「あんたもつぐづく化けモンだったよ…………グッ！」

ドサ！

紫電が倒れる。

「チツ……流石に、限界か…………王…………あんたの敵は…………とった
ぜ…………流石に…………疲れた…………もう…………寝ても…………良いよな…………？
ハハ…………ありが…………とう…………よ」

そう言い残し、紫電はゆづくつと瞼を閉じ、冷王と共に深い眠りについた。

その後、玉座の間に入ってきた紫電の仲間は、壮絶な戦いの後と、その中央に倒れている紫電と冷王の姿を見、冷王が亡くなっている事に歓喜の声を上げかけるが、同時に、紫電も亡くなっている事に気づき、泣いたり、悔しがつたりした。

その後、紫電はその功績を称えられ、手厚く葬られた。

そして、『雷の龍』といひかた、後世にまで語り継がれることになる。

序章一（後書き）

初めての投稿で緊張しましたが、これからも頑張つて更新していく
たいので、応援してください。感想やアドバイス等も待っています。

序章一（前書き）

序章二つ目です。

今回も、異空間での神との会話です。

「光の空間」

「う……うう……」

そこには、一人の青年 雷魔紫電らいましでんと、

「…………」

一人の初老の男が存在していた。

「う……あ……？」

しばらくして、紫電が目を覚ました。

周りを見渡すと、見たこともない白い光の空間にいることに気が付
き。慌てて起き上がる。

「ふむ。気が付いたよひじやな」

そういう声がし、紫電は声のしたほうに振り向いた。

「…………あなたは？」

「ワシか？ そうだのう。まあ、お主の居た世界の神といったところ
かのう」

「…………は？」

男の突拍子も無い発言に、少々間抜けな声を上げる紫電。

「も、もつ一度言つてくれるか？」

少々、焦りながら聞くが、

「じゃから、神じやと言つておひづが」

「はあああああー？」

再度の男の神発言に、驚きの声を上げてしまつ。

「え？ なんでその神がこんなとこ……？ ……え？」

男 神の発言で少々パニクつてしまつ紫電。

「とりあえず、落ち着け。ほれ、深呼吸」

「あ、ああ。スー……ハー……スー……ハー」

神の言葉で深呼吸をし、とりあえずは、落ち書きを取り戻し、話をすることになつた。

「…………で、その神様が俺に何か用か？ それから、「」はどうなんだ？」

「ふむ。やうじやの……まあま、」とからり話をするかの」

そう言つて、神がこの光の空間についての説明を始めた。

「 ジジはの、有体に言えば次元の狭間みたいなところじゃ」

「 次元の狭間？」

「 ジジじゃ。ジジは、色々な世界に繋がつておる」

「 ふ～ん。とりあえず、ジジのところはなんとなくわかつたから、俺がここにいる訳を教えてくれ」

周りを見ながら神の話を聞いていた紫電は、次に自身がここにいる理由を聞いた。

「 それはの、ワシがお主を氣に入つたからじゃ」

笑顔でそういう神。

「 ……は？」

再度呆ける紫電。だが、さつきのこともあり、今回は早めに復活した。

「 ええと、それで氣に入つてここに連れて来て何させよ? ってか、今思い出したけど、俺って死んでるはずだよな?」

そう言つて、紫電は自分が目覚める前のことを思い出し、神に質問する。

「 ジジの、お主は確かに「あの」世界では死んでゐる。じゃが、

その魂を、ワシがここに連れて来たといつわば。さじ。」

「なるほど。……………でへ。それともかたばくら、俺に何をするつもりなんだ？」

神の理由を聞き、若干警戒する紫電。

「ほひほひほ。ハラ警戒するだな。ついあえず、お主に提案があることじ。」

「提案？」

「ナハ。雷魔紫電よ。ワシの力で、そなたを別の世界へ転生させたいと想つたじやが、どうある？」

そう神が提案し、紫電は驚いた後、少し考え、

「…………ふむ。むつこの身は、あの世界では死んでゐることだし、新しい人生を楽しむのも悪くないかもな」

そう笑顔で言つ紫電。

「まう。では……」

「ああ。その提案受けるぜ」

そう紫電が言つて、神は笑顔になつた。

「ナハか。では、お主をワシが推薦した世界に送るといつわ」

「わかった…………あ、でも、その世界つてどんな世界なんだ?」「

「ふむ……やうじやの。」この世界のことを少しだけ説明しておくれか

そして、神によりその世界についての説明が行われた。

簡単に言うと、その世界は、「外史」とって、誰かの手により作り上げられた、言わば、空想世界みたいなものらしい。

そして、これから送られる「外史」は、三国志を模した世界だが、有名な武将達がほぼ全員女性になつていて世界らしい。

「ふ～ん。三国志の武将達が女性になつている世界……ね

あまり実感がわかないのか、少し考え込む紫電。そして、じょりく考えて顔を上げた。

「まだ、色々わかんねえ」とがあるが、その世界に行けば色々わかってくるんだね?」

「まあ、やうだの」

「わかつた。とつあえず、向こうに送つてくれ

「了解した。では、氣をつけてな。ああ、それと向こうに付いたら、赤ん坊になつとるからな」

「ああ。わかつた

神が右手を掲げたと同時に、その手から光があふれ、紫電を包んでいき、そして、紫電を完全に包み込んだ瞬間、彼の視界が暗転した。

序章一（後書き）

「んばんわ。前回に続き序章でした。
どうだったでしょうか？どんな評価されるのか、ドキドキです。
感想やアドバイスは、書いていただけると嬉しいです。
では、次回もお楽しみに。

第一話（前書き）

やっと書けました。

課題が溜まつてしまつて少し時間がかかりました。

今回は、転生してから五年経っています。すみません。手抜きで、でも一応少しばまれたときの様子も書いていますので安心を。では、楽しんでやってください。

第一話

そんなこと（前回の序章一）を参照（）もあり、無事転生をし、漢王朝のとある村の雷家に生まれた紫電。名前は、姓は雷、名は魔、字は霸龍はりゆうで、まな真名は紫電しじん、となつた。

両親が真名に「紫電」と名付けた理由は、生まれたその日じ、紫色の雷が落ちたからだとう。

そして、彼が生まれたのは、黄巾の乱よりも約一十年も前だつた。

それがわかつたときはびっくりしたが、それでも精神はそのまま受け継がれていたので、あまり動搖はなかつた。

また、この件で、記憶も受け継がれていることが分かつた。

しかし、再び赤ん坊として生まれた時は、色々不自由で、流石に困惑つたが、それでも、優しい両親により、すくすくと育つた。

そして、現在、紫電が生まれてから五年の月日が経つていた。

～とある村の雷家の家～

「じでん！」飯よ～！

「はーーー！」

現在、紫電は五歳、今は家で学問の勉強をしていた。
学問の勉強をしたいと両親に言ったとき、

「紫電。まだお前は五歳だ。なのに、なぜ学問を学びたいのだ？」

と、父親から聞かれ、紫電は、

「現在、漢はまだ安定していて、賊も少ないです。でも、いつ朝廷が落ちるかもわからないのが、今の時代の撲理です。なので、いつでもどこでも仕官できるようになつておきたいのです。」

そう答えた。

この言葉には、流石の両親も驚きを隠せなかつたようだが、それでも、紫電が学問を学ぶことを承知した。

そして、それからとくもの。紫電は、一応近所の子供達とは遊んではいるが、その後は、部屋にこもつて、学問の勉強をしている。幸い、この雷家は、村でもそれなりの富豪で、学問の本に関してはあまり困らなかつた。

(前に両親に言つた通り、現在の朝廷はまだ落ちていない。しかし、あと十数年したら、黄巾の乱が起きるほどに落ち込む。そうなる前に、どこかに仕官して、態勢を整えるようにしないといけない。だからこそ、今からでも勉強はしどかなといとな)

そう考へ、今夜も勉強に勤しむ紫電であった。

しかし、この村での、紫電の評価はあまり良いものではなかった。

原因是、真名の由来となつた、紫色の雷であった。

雷の色が紫であつたことなど今までなかつたためである。

それに加え、実は、右の手の平に「封」いう文字が刻まれて生まれてきたので、そのことも踏まえて、呪われているのではと考える村人も少なからずいた。

また、良く見ると、紫電の瞳孔は龍の目のように縦に割れており、そのことも、そう思われる原因でもあった。

そのことを知っている両親は、そんなときに変なことが起これば、紫電は村人から大変な迫害を受けるのでは?と思い、その時には自分たちが紫電を守ろうと決心した。

そして、紫電が先のことを考えてから一週間後。両親の心配は、現実のものとなる。

第一話（後書き）

どうだったでしょ？
うか？
変な間違いをしてないか心配です。

さて、次回から少しシリアスが続きます。
それでも、頑張って書くので、応援よろしくおねがいします。

第一話（前書き）

第一話の続きです。

恋姫の世界での初めての戦闘です。
ちゃんと書けてるか不安ですが、どうお付き合ってください。
では、どうぞ。

第一話

それは、ある曇りの日だった。

紫電は、いつものように家で学問の勉強をしていた。そして、そろそろ休憩しようかと思い、机から腰を上げたときに、それが来た。

ワ――――――――!

突然外から色んな人の叫び声が聞こえた。どうしたんだと思い、外に出た瞬間。

紫電は言葉を失った。

それは、地獄絵図だった。

賊が、村に襲いかかってきており、村人たちを次々と殺している。そんな光景が紫電の目に入ってきた。

なんとか対抗する村人もいるが、そこは賊と村人、流石に力量の差が出たのか、次々と殺されていく。

「…………くつ！」

そして、紫電は、そんな光景に我慢できなくなつたのか飛び出やつとした。

「紫電ー何やつてゐんだー家の中に逃げていなさいーーー。」

だが、紫電は飛び出せなかつた。紫電の父が彼の肩をつかみ、家に引き入れようとしたからだ。

「でも、父さんーみんながやられてるのに助けないつていつのは僕には出来ないーーー。」

紫電は、さう父に言つたが、

「駄目だーーー」は私が行くからお前は家に逃げていなさいーーー。」

そう言つて、父 雷鳳は、賊の群れへと走つていった。

紫電は、しばらくの間、雷鳳の背を見送つていたが、後ろにいた母雷麗に振り返つた。

「母さん…………「めんーーー。」

そう言つて、雷鳳が走つていった方向へ勢い良く走り出した。

雷鳳は、突然のこととで呆けていたが、ハツとした時にまもつ遅く、紫電の背中は見えなくなつており、彼女は紫電を止められなかつたことと、悔しそうに唇をかみ締めた。

場所は変わつて、村でも一番広い場所で、村の自警団、それから紫電の父の雷鳳が賊と戦っていた。しかし、戦況は著しくなかつた。

「くそつ……！賊の数が多くすぎる……。」

そう言葉をこぼしながらも、近くの賊を討ち取る雷鳳。

しかし、だんだんと疲れがたまつてきており、注意力が散漫になつてしまつ。

その隙を突いて、一人の賊が彼を背中から斬りかかつた。

ザシュー！

「ぐわっ！」

賊の剣が彼の背中を斬つたが、彼は賊が背中から斬りかかつてくるのが、気配でなんとかわかり、咄嗟に前に跳んだものの、それでも、浅くない傷を作つた。

と、そこには、

「父さん……！」

彼にとつて、この場では聞いてはいけない声が聞こえ、その声の主

が、倒れそうになつてゐる彼の体を支えた。

「なー? 紫電ー? なぜここに来たー?」

「だから、わつきも言つたじやないかーみんなが戦つてゐるのに、自分で逃げていられないって!」

「馬鹿者!—子供のお前が来ても何も変わらないだろ? がー!—」

紫電が来たことに少し苛立つてゐるのか、雷鳳の言葉遣いは、いつもより荒くなつていた。

その後、逃げながらも色々言ひ合つていたが、隠れるところに路地裏に身を隠し、とりあえず、息を整えるためにお互に黙つていた。

「ハア……ハア……まつたく、心意気はいいが、わつきも言つたが子供のお前が来ても、何も並んだり?」「

「やつ…………だけど…………」

そつとつて頃垂れる息子を見て、少し苦笑いが出たが、息子の頭を優しくなでた。

その瞬間、彼らの上から影が落ちた。

「ーー危ないーー!」

紫電にその言葉が聞こえたと同時に、父が覆いかぶさつてきた。それと同時に、肉を斬る音も聞こえた。

「…………父さん？」

自分に覆いかぶさつたまま動かない父を不思議に思い、声をかけたが、

ドサ！

次の瞬間には、雷鳳が倒れこんだ。

「父さん！？」

流石に驚いた紫電は、雷鳳に近づいた。すると、彼の背中に新たな傷が出来ていて気付く。

そして、背後から人の気配がし、振り向くと、賊が一人いた。

「こんなところにまだ人がいたぜ」

「ああ。結構運いいな俺ら」

と、下卑な笑みを湛えながら、紫電たちを見て、話をしていた。

紫電は彼らの持つている剣を見て、新しい血が滴つてることに気が付いた。

「…………俺の父さんを斬ったのは、お前たちか？」

いやに冷たい声音だったが、賊たちは昂っているのか、そんなことも気付かない。

「ああ？なんだって？」

笑いながら、賊が聞いてくる。

「…………お前たちが斬つたのかと聞いている」

そして、その言葉に賊たちは、

「ああ。そうだよ。僕ちゃん。俺たちがそこに倒れている男を斬つたのや。へつへつへ」

再び笑いながら言つてくる賊に、紫電の中の何かが切れた。

「やうか……」

そう言つて、再度雷鳳に近づき、彼の安否を確かめた。彼の状態は、傷は深いが、息をしており、ただ気を失っているだけだとわかった。

「心配しなくとも、僕ちゃんもその父親の後をすぐに負わせて上げるよ」

そう下卑な笑みを湛えたまま近づいてくる賊。

そして、その手に持つていた剣を振りかぶり、振り下ろした。

ギン！ ザシュー！

しかし、賊の剣は紫電を斬ることはなく、逆に剣をはじかれ、さらには首を一閃の下に斬り飛ばされた。

「…………へ？」

それを見ていた、もう一人の賊は目の前のことが理解できなかつた。

確かに、さつきまでは目の前の小僧の手に武器なんてなかつた。
しかし、今、その小僧の手には、大人の身の丈をも越える大鎌が握
られていた。

「次は…………お前だ」

そう言わせやつと、現実に戻つた賊が見た小僧 紫電に恐怖を覚え、
言葉にならない叫びを上げて、その場から、逃げよつとした。

しかし、

ザン！

賊の胴が紫電の大鎌により、真つ二つになつた。

紫電は、しばらくの間、真つ二つになつた賊を見ていたが、すぐに
雷鳳の方へ駆け寄り、彼の状態を確かめた。

「…………」の傷なら、今のところは大丈夫か…………でも、すぐに
手当でしないと…………

そう言つて、周りを見渡すと、

「あ、あそこに薬屋がある」

彼らがいる路地裏の田の前に薬屋があった。

「どうあれ、また見つかる前に移動しないとな」

そう言ひて、彼は父の体を背負い。薬屋に向け走り出した。

しばらくして、一応の応急処置を施して、雷鳳の息が落ち着いてきたといふで、安心して、ため息を吐いた。

「せんと、まだみんな戦つてるみたいだし、行かないよ」

そつと、薬屋から出ようとしたが、いつたん立ち止まり、眠つてこむ父のほうを見て、

「こつときます」

と声をかけ、賊と自警団が戦つている広場へ走つていった。

その頃、広場では、賊と自警団が戦つていたが、何分數が違ひ自警団が押されていた。

このままでは、生き残っている村人まで被害に遭うと思い必死になつて戦っていた。

しかし、彼らの背後からものすごい圧力を感じ、賊もその圧力を感じ取ったのか、両者とも一時手を止め、その方向を見た。すると、その方向には、見たこともない大鎌を持つ紫電がこちらにゆっくりと歩いてきていた。

そして、紫電はそのまま賊と自警団の方へ歩いていき、賊たちの前に来るところの歩みを止めた。

「なんだ?」のガキ

そう言って、紫電に近づき、その顔を見ようと覗き込もうとしたが、逆に彼の顔が上がってきたので、それに合わせ、田を見た瞬間、

ゾワー!

尋常じやない寒気が賊の背中に走り、その場から飛び退いた。

紫電の田は……瞳孔が龍の様に縦に割れており、それを見た賊は、まさに龍に睨まれたように感じたのだ。

「俺は……お前たちを許さない

「は、ははは!俺たちを許さないってか。具体的にどうすんだよ?」

紫電から飛び退いた賊が、彼の言葉を聞き、下卑な笑みを浮かべ、紫電に聞いた。

「戦つや。戦つて、お前たちを……殺す！」

「……！」

紫電が「殺す」といつた瞬間、彼からとてつもない圧力が放たれた。

「で、できるもんなら、や、やってみろやー！」のガキが……！」

賊の頭^{かしら}らしき男がそう叫んだ瞬間、何人かの賊が紫電に斬りかかつた。

「ハアアアアアア……！」

ザシユ！ズバ！ザン……！」

「ぐわ……！」

「あやあ……！」

「へふ……！」

ドサドサドサ……！」

紫電が叫び、その手に持っている大鎌を一振りした瞬間、飛び掛つた賊は、全員真っ二つになり、その場で絶命した。

その光景に、周りがしんとなつた。

「…………はつ！何してやがるてめえらー次、かかれ！」

先に、呆けた状態から復帰した頭がまわりに叫ぶ。

しかし、紫電はその男を見定め、そして、その男に突撃して言った。

「ひつー……くつー嘗めんじゃねえ、この小僧ーー！」

頭は、剣振り上げ、紫電を迎撃しようとしたが、

ザンーー！

気付いたときには、紫電は駆け抜け、そして、頭の首を斬り飛ばしていた。

そして、再び周りが沈黙し、紫電はしばらく切り飛ばした頭の首の方を見ていたが、すぐに賊のほうに振り向いた。

「う、うわあああああああーー！」

それを見ていた賊の一人が、恐怖に駆られ、逃げ出した。すると、他の賊も次々に逃げ出し始めた。

しかし、紫電は、頭に血が上っているのか、逃げ惑う賊たちに次々と切りかかり、賊全員を切り倒し、全滅させた。その光景は、まさに地獄絵図であった。

そして、賊を全滅させ、紫電はしばらく突つ立てたが、その体が

徐々に傾き、その場に倒れこんだ。

その瞬間、それを見ていた全てのものが、紫電の持っていた大鎌が彼の右手の平に消えていくのが、見えた。

その後、それを見ていた、母の雷麗が、心配になつて近づき、気絶しているだけだとわかると、安堵し、他の村人の方へ顔を向け、彼女は愕然となつた。

なぜなら、村人たちの顔には歓喜ではなく、恐怖の色が出ていたためである。

第一話（後書き）

以上です。

次回は、賊襲撃後の話です。

どうなるのか？お楽しみに！

第三話（前書き）

やつと出来上がったので投稿します。

賊襲撃から三日後くらいの話です。

この話は、前回の出来事の後始末と、今後の紫電の境遇が決まります。

紫電の母である靈麗の話の内容がちよつと変な感じしますが、それでもいいといつ方はぜひお読みください。

どのような話になつてゐるのか？
では、お楽しみください。

賊襲来から三日が経っていた。

紫電は、その後、一日間眠り、その後田を覚ました。

そして、父の雷鳳は、翌日には田を覚まし、元気になつてはいたが、傷が深かつたため、しばらく静養する事になった。

そして、母の雷麗は、村長の家で行われる村の会議に顔を出していった。

「さて、皆を呼んだのは他でもない」

そう言って、雷麗の方を向く村長。

他の参加者からも視線を受けるが、毅然としている雷麗。

「…………わかつてはいるとは思つが、紫電についてじや」

村長がそういう瞬間、他の者の目付きが変わった。

「さて、それでは、皆の意見を聞いてこいつかの」

それからといつもの、色々な意見がその会議で、飛び交つた。一番多かったのは、やはり「追い出す」という意見であった。しかし、その中でも「紫電を残したほうがいいのでは?」という意見もあった。

それは、彼の武が途轍もない為と云う気持ちもあれば、純粹に彼が好きな者達の気持ちもあるということでもあった。

それから、しばらく会議が続いたが、それまで黙つて見ていた雷麗が、話し始めた。

「村長、そして、皆さん。色々な意見が出てきましたが、私たちは、この村から出る人間を昨日夫の雷鳳と話し合って、そして、決断しました」

その言葉を聞き、村長は口を開じ、他の者は息を呑むものもいるが、皆黙つて彼女の話を聞いていた。

「私たちは、常々、紫電に向けられる視線や感情を確認していました。そして、気付いたことがあります。紫電は、この村の多くの人に警戒されていると」

その言葉で、ほとんどの者が息を呑んだ。

「なので、もしこの村に何かあれば、紫電は生まれた時等のことを踏まえ、迫害されるのではと思いました。そして、そんな時は、私たちがあの子を守らうと決心しました」

そこで、雷麗は一息入れ、そして、すぐにまた話し始めた。

「なので、私たちは、あの子を守るためにこの村を出ようと思います」

そのままでしゃべって、雷麗の話は終わった。

それを確認して、村長が雷麗に話しかける。

「雷麗。それは雷鳳も納得しておるんじやな？」

その村長の問いかけに、雷麗は口クリと頷いた。

「……せつか。……では、紫電 雷魔に対する決定を言つ渡す」

そして、息を吸い、

「雷魔、そして、その両親の雷鳳、雷麗。この二名をこの村から追放処分とする」

その言葉で、会議は終了した。

その後、雷麗は家に戻り、事の次第を雷鳳に報告した。

「せつか……。まあ、その方が紫電のためになるだらう」

「わい……ね。そうなのよね」

雷麗は、内心では納得してなかつたのか、歯切れの悪い言葉を口にする。

その時、彼らがいる部屋の扉が開いた。

振り向くと、紫電がそこには立っていた。

「どうしたの、紫電？」

雷麗がそう聞くと、

「会議…………どうなったの？」

その言葉に、雷麗は黙り込んだ。

すると、

「私たち雷家は…………追放処分となつた」

雷鳳がそう教えた。

「あなた…………！」

それを聞いて、雷麗が激昂しそうになつたが、次に聞こえた紫電の言葉に驚きを隠せなかつた。

「やつ…………やつぱりやつとなつたんだ」

「…………」

驚いて紫電のまつを見ると、その顔はいつまでも変わらぬようないい顔つきであった。

「紫電……あなた、わかつていたの…？」

「うん。村の人ほとんどが警戒だつたから」

「そうか。だつたら、今から出て行く準備をしておけ」

「はい」

紫電が出て行くのを見届けて、雷麗は雷鳳のほうに向き直つた。

「あなた。あの子、ホントにわかつたいたんでしょうか？」

「わからんが、本人がそういうのだから、間違いないんだろう。しかし、前から思つていたが、五歳なのに、あれだけの能力と精神力を持っているとは……」

「ええ。流石に驚いたわ」

そう言つて、二人は紫電が出て行つた扉をずっと見ていた。

それから、数日後。

雷鳳の傷も癒え、旅立ちの準備も整い、いよいよ追放の日がやつてきた。

その様子は、追放と言つよりも、旅に出る者を送り出す送別会のようであった。

「村長。今までおつがといひじゃこました」

やつまつて、村長に頭を下げる雷鳳。

「こや、雷鳳よ。頭を下げんぐれ。」いかにこま悪こじとをしだと思つてゐる」

「せんな。村長は別」……」

「ここや、ワシがそいつのじや。實際、村長の癖に紫電一人を守ることが出来んのだからな」

村長の言葉に雷鳳は、言ひ返そつとしたが、続く村長の言葉に、口をつぐんだ。

「それで、これからどうするんじや？」

村長の問いかけに、雷鳳は少し考へ、

「ソレから近い場所だと、長安なので、そちらに行つて見ます」

「せうか。頑張つて生き残るんじや？」

「村長たち」

そして、紫電とその両親は、村長が用意した馬車で長安へ向け、旅立つた。

その追放の画は、追放とは思えな^のような感じであったといつ。

しかし、この後^{のち}、紫電たち三人に更なる悲劇が待っているとは、そこにはいた誰にもわからなかつた……。

第三話（後書き）

どうだったでしょうか？

流石に、ちょっと理由に無理があつたかなと思つています。
でも、投稿した限りは、自信を持とうと思います。

さて、次回。紫電たちは長安へ向かつてゐる途中に、悲劇に遭います。
また、その時に、この作品の中心人物の一人が登場します。

それは誰か……？

次回をお楽しみに。

第四話（前書き）

出来上がったので投稿します。

今回は、前回言つたとおり、紫電たちに悲劇が降りかかります。
それどういったものか？

そして、中心人物の一人が出てきます。
それは誰か？

その答えは、物語の中に……。
では、お楽しみください。

第四話

紫電たちが村を出て、数日後。

その日は、雨が降っていた。

紫電たちは、とうあえず、雨宿りできる場所を探しながら、森の中を進んでいた。

「しかし、急に雨が降ってくるなんてな」

「ええ。こんなに降ると流石に、嫌になるわね」

そう雷夫婦が話をしていた。

紫電は、疲れているのかまだ眠っている。

馬車の馬の綱は、雷鳳が持つており、雷麗と紫電は、馬車の中で休んでいた。

? ? ? Side

現在私たちは、この付近で出没し、民たちに被害をもたらしている身の丈二丈（約六メートル）はある巨大な熊を討伐しに、森の中に入っていた。

この近くにある村で、待ち伏せていると、急に現れ、私たちと戦つ

た。

戦況的に、私たちが有利であったのか、熊は「」の森へと逃げ込んだ。
そして、現在至るわけである。

「ふむ。じんなに深いと手分けして探したほうが良さそうね」

私の言葉に、周りの兵たちが頷く。

「では、隊を五つに分ける。発見した部隊は、戦おつとせず、報告を優先しろ。
そして、移動したら気付かれずに後をつけろ。ある程度の部隊が合流し次第、攻撃を開始する」

「「「「「」はー」「」「」「」」

そう言って、部隊を五つに分け、皆を散らし、最後に私の部隊が搜索を再開した。

しかし、発見したときにあんな光景を目にするとは、思いもしなかつた。

? ? ? Side Out

紫電たちは、まだ森の中を進んでいた。

紫電 Side

「そろそろ雨宿りでできやうな場所が見えてきてもいいと思つが……

…」

雷鳳はそう呟いた。

雷麗は、紫電と同じく馬車の中でも眠っていた。

すると、田の前に洞窟らしきものが見えてきた。

「おーやつとあつた。おこ一人とも、起きる。洞窟を見つけたぞ」

雷鳳がそつ声をかけると、一人は田を覚ました。

「ホントに? これでこの雨がしのげるわね」

そつ言つて、背伸びをする雷麗。

紫電も田こすりながら背伸びをしていた。

その様子は、まさに親子で、雷鳳は、微笑んで見ていた。

そして、三人は洞窟へと入り、現在降つている雨をやり過ごすことになった。

しばらくすると、雨が止んだので、出発しようつと外に出で、準備をしていたときである。

バキバキバキ!

突然、近くにあつた木が倒れてきた。

紫電が何かな?と思い、近づいた矢先には、身の丈が一丈ある巨
大な熊がいた。

「うわあー」

流石の紫電のこれには驚いたのか叫び声をあげた。

「どうしたー? 紫電ー…………! ?」

雷鳳が紫電の叫びを聞き、飛んで来た。そして、そこにいる巨熊に
驚き、足を止めた。

すると、巨熊は、紫電の叫び声に驚いたのか、襲い掛かってきた。

ガアアアアアー!

「ー紫電ー危ないー!」

紫電がぼつりとしている事に気が付き、彼に襲い掛かろうとしている
巨熊から、助けるために、紫電に飛び掛った。

ドンー・バンー!

紫電は、自身にかかる衝撃と、そのすぐ後に聞こえてきた、音にハ
ツと我に返り、音のしたほうに巨熊を向けると、巨熊の一撃をもらい
ぐつたりして、この父の姿を発見した。

「うわあああー父さんー父さんー!」

父に駆け寄り、その安否を確かめたが、彼はピクリとも動かなかつ

た。

「父さん！ なあ、父さん！ 曜日を開けろよーーー！」

紫電がそう叫ぶも雷鳳は何の反応も示さない。

そうしている内に、巨熊が紫電に近づいてきた。その気配に、気付
き振り向くが、巨熊は、もうすでに攻撃の態勢を取っていた。紫電
は、それを見ても動けずについた。

紫電は、思った。ああ、ここで終わりなんだと。
そして……巨熊の爪が……彼に振り下ろされた。

ザシユ
!!

紫電は襲つて来る衝撃に、目を瞑つて待つていたが、どれだけ立つても痛みがないので、気になつて目を開けると、そこには、自分をかばうようにして、覆いかぶさつている母の姿があつた。

「な!? 母さん! ?」

そして、彼女に声をかける紫電。

「へんじでんだいじよひ?」

雷麗は優しく、紫電に声をかける。

「お、俺は大丈夫だけど！母さんが…………！」

そして、雷麗は優しく微笑んで、

「 わい よか た 」

ドサー！

倒れこんだ。

「 か、母さん？…… 母さん…？ 母さん…？」

紫電は倒れこんだ雷麗に必死に呼びかけるが、彼女は何の反応も示さなかつた。

「 …… くつ…母さん …… 父さん …… 」

そう言って、涙を流しながら、両親の間から出た紫電。そして、一人のほうを向き、その後、顔をつつむけながら巨熊の方を向いた。

グルルルルル！

巨熊は、再度攻撃するため、態勢を立て直していた。

紫電は、うつむけていた顔を上げた。

その瞬間、

ゴウー！

熊に対して、強烈な突風が吹いた。と、熊は感じているが、これは紫電の氣の圧力による風である。

そのものすごい圧力を受け、熊は一瞬、後退さる。

「あああ……」

そう言つて紫電は、右手から大鎌を取り出し、攻撃態勢と整えた。それと同時に、紫電の周りに紫色の雷が走り始める。

「貴様は、俺が殺す！！」

ダン！！

そう言つた瞬間、紫電は熊めがけて突っ込んだ。

紫電 Side Out

? ? ? Side

私たちは、現在、部下の報告により、熊が進んだと思われる獣道を進んでいる。そして、しばらく進んだときだった。

グガアアアアアアアア！！

「！！」

熊の叫び声が、聞こえ、その方向に部下たちと共に向かった。

そして、向かい始めてから、数分後。

私たちは、開けた場所に出た。そして、出た瞬間。

ズズウウウウン！！

熊が目の前に倒れてきた。すぐに身構えたが、良く見ると頭が割られており、部下に確認させると、死んでいるとのことなので、熊に近づいた。

そして、近づいたとき、熊とは聞逆のところにある木の根元で、少年が呆然と何かを見ていることに気付いた。

良く見ると、それは人間の姿だった。

確認するために近づいたが、徐々に近くなつてくると、その人間の状態がわかり、思わず息を呑んだ。

それは、二人の男女の死体だった。「もしかすると」と思い、少年に近づいた。

「そこ」の君

そう声をかけると、少年の肩がびくりと反応した。そして、その少年が振り向いたとき、私は言葉を失った。

その少年は、泣いていた。そして、それを見た瞬間、私は「やはり」と思った。

「その二人は、君の両親か？」

私がそう質問すると、少年はコクリと頷いた。

「そう……か」

そして、少年の隣に行き、しゃがみ込み、その二人の死体を近くで確認した。

「ねえ、君。よかつたら、何があつたか話して欲し……」

「ボス……」

「んだけど」と続けようとしたが、私の右の腕に何かが乗ってきたので、見てみると、

「スウ…………スウ…………」

緊張が解けたのか、眠っている少年の顔があつた。

「フウ…………仕方がない。事情も聞かないといけないし…………。皆、熊の状態がわかり次第、村に戻る！」

そう隊のみんなに声をかけると、少年を他の兵に預け、自身は熊の状態を確かめる。

「しかし、こんな大きな熊の頭を割っているか。これを行つたのは、やはりあの子の両親か？」

熊の頭の傷を確かめつつ、少年の両親の死体の方に目を向ける。しかし、熊の頭の傷に会いそうな武器がなかつたため、考え直すことになった。

? ? ? Side Out

第四話（後書き）

はい、以上です。

ちょっと無理やり感があるかもしませんが、以上が紫電たちを襲つた悲劇です。

これから、紫電はどうなつていいくのか？

そして、登場はしたものの、名前が出てこなかつたこの人物とは？

次回もお楽しみに！

第五話（前書き）

出来上がったので投稿します。

さて、今回は、悲劇後の話です。

前回登場した人物の正体が分かります。

また、今後の紫電の立場やこの物語の大筋のルートが決まります。

どのようなことになつているのか？

どうぞお楽しみください。

第五話

(…………暗い。でも、なんだか暖かい)

紫電は、そんなことを考えていた。

(何で暗いんだらうつ? あ、そつか田を開じてるからだ)

(でも何か忘れていいような? 何だっけ?)

やがて、紫電はひきまで何があつたか思い出した。

(やがて! 熊に襲われて。それから、父さんと母さんが……)

そのままで思に出して、思出すのをやめた。

(どうあれ、田開けないと)

そして、紫電は田を開けた。

「…………知らない天井だ」

そんなベタな発言をしつつ、起き上ると、

「おー田が覚めた?」

その声が聞こえた。

声のほうに振り向くと、濃い桃色髪のとても綺麗な女性が立っていた。

「ええと、どなたですか？」

紫電がそう聞いていた間に、女性は、部屋の中に入つて来て、紫電が寝ているベッドのそばに来て、椅子に座っていた。

「私の名前？私は、劉宏。^{りゅうこう}みろしくね」

「…………は？」

紫電は、彼女の名前を聞いたとたん、呆けてしまつた。

「えつと、もう一度お願ひします」

「だから、姓が劉、名が宏よ。ちやんと聞いてた？」

紫電が確認のため、もう一度聞くと、やはりありえない名前が聞こえた。

そして、劉宏と名乗った女性は、紫電が聞いてなかつたのかと思い、再度自己紹介をした後、膨れつ面になつていた。

「ええええええー？」

流石に、ありえない名前を聞き、紫電の驚きは途轍もなかつた。

「こちなり呼ばないでよ。うあ…………耳がキーンとしてるわ」

(「こちなりいやーなんで、次期皇帝の劉宏が」となとここのの
のめごとくひじけいの
!?)

紫電に叫ばれて耳鳴りがしてこの劉宏に対し、紫電は心の中で思いつきりツッコンだ。

「まあ、私の名前はいいとして。今度は、君の自己紹介をしてくれるかな？」

「（ここのかよー？）え、ええっと、姓は雷らい、名は魔ま、字は霸龍はりゆうです」

戸惑いつつもちゃんと血口紹介をする紫電。

「雷魔君か。良い名前ね」

そういうと、それまで笑顔だった劉宏は、急に真面目な顔になり、紫電に質問してきた。

「それで、雷魔君。本題に入るけど、あの森で、何があつたか聞かせてくれるかな？」

その質問に、紫電は少し暗くなつた。

「話したくないだろ？ 一応、あそこまで起つたことも把握して、上に報告しないといけないの。教えてくれないかな」

その劉宏の言葉の後、紫電は、しばし考へるよつとして、黙つていたが、決心したのか顔を上げ、

「……わかりました。お話しします」

そう言って、これまでの経緯を劉宏に話し始めた。

それから、じばりくして紫電が話しそうになると、劉宏はじばりく口を閉じ、考え方をしてくるようであった。

そして、劉宏は口を開け、口を開いた。

「わっか……そんなことがったんだね」

紫電は、それらを思い出し、感傷に浸つてゐるのか、顔を俯かせていれる。

「どうあえず……前に謝らないとね。……『めんなさい』

紫電は、劉宏がいきなり頭を下げる意味がわからず、少し焦る。

「え? なんで、劉宏さんが頭を下げるんですか?」

「それはね……その巨熊は、私たちが討伐するはずだった熊なの……」

「…

紫電はそれを聞いて、口をつぐんだ。

そして、今度は劉宏が、これまでの自分の経緯について、話し始めた。

それから、またしばらくした時、何かを考えながら劉宏の話を聞いていた紫電は、彼女に質問を投げかけた。

「劉宏さんは……今回のことで、どのようにお思いですか？」

その質問に、劉宏は一瞬怯んだが、それでも毅然とした、それでいて申し訳なさそうに自分の気持ちを話し始めた。

「今回のことには、謝つても謝りきれないし、何より君が許すはずがないと思つ。だって、自分たちが逃した討伐すべき猛獸が、偶々とは言え、そこにいた民間人に被害をこうつむつた。だから、私は君が謝つてほしいというなら何度でも謝るし、責任を取れというなら、何だつて受けけるつもり」

劉宏のその言葉を聞き、またしばらく考えるより、田を閉じ、俯く紫電。

そして、次に彼が顔を上げたとき、そこには、怒りはなかった。

「わかりました。では、今度は、僕の気持ちをお話します

」
そうついつて、姿勢を正し、しっかりと劉宏の田を見る紫電。
そんな紫電の様子に、劉宏も何故か背筋が伸びる。

「まず、最初はあなたの話を聞いた時は、怒りが沸々と沸いてきました

」
その言葉で、劉宏は若干暗い顔をする。

「でも、あなたの素直な気持ちを聞いて、怒りは消えうせました」

続いた言葉に、劉宏の顔は少し明るくなる。

「でも、それでも、許すところのは、難しいです」

その言葉に、また顔を暗くする劉宏。

「なので、責任を取れとは言こませんが…………」

そう言ってから、紫電は劉宏の顔を見る。

「何？なんでも言つて」

「わかりました。できればいいです。僕には、今後行く所がありません。なので、あなたについて行つても良いですか？」

紫電がそう言つて、劉宏は、一瞬驚いた顔をするが、すぐに優しい笑顔になり、

「いいよ。実際、私も君を連れて行こうと思つていたし」

そう言つた。

紫電は、その言葉聞いて、少し笑顔になり、

「ありがとうございます」

そう言つて、深々と頭を下げる。

「ここは、ここは」

そう言いながら、劉宏は笑顔で紫電の頭をなでる。

紫電は、くすぐったかつたのか、恥ずかしかつたのか、体を少し竦めるも、素直に受け入れた。

「といひで、雷魔君を連れて行く理由なんだけど」

「はい？」

理由など気にしていなかつたのか、紫電は少し呆けながら聞き返した。

次にあんな発言来るとは思つても見なかつたのだろう。

「歳も近そうだからや、義姉弟にならないかなつて」

「え？ えええええええ！」

劉宏の爆弾発言を聞き、再度驚く紫電。

「ああーいやなら別に良いんだよ。ただ、私としては、弟が欲しいつて理由だから」

「え？ いや、あの……」

まだテンパッている紫電。

しかし、しばらぐして落ち付いてきたのか、少し考え、

「えっと、よろしく……お願いします

と言つた。

それを聞いた劉宏は、満開の笑顔になり、

「へんべい・ひがし・へん」

そう言って、上機嫌で紫電の手を握り、握手をした。

「さて、晴れて姉弟になつたことだし、真名を預けなきやね」

劉宏がそう言って、紫電もそのことに気付いたのか、ハツとして、

「あ、そうですね。では、僕の姓は雷、名は魔、字は霸龍、真名は紫電です」

「紫電か。真名も良い名前だね。あ、私は、姓は劉、名は宏、真名
は薺華そうかだよ。これから、よろしくね。紫電

「はい。よろしくお願いします」

こゝにて次期皇帝劉宏こと蒼華とこれから色々な運命を背負つ」とこ
なる紫電の永遠なる契りが出来た。

この出会いが、紫電と蒼華の運命を大きく変えることになるのだが、それはまた別の話で……。

おまけ

義兄弟の契りが完了して、数刻立った時。

「あ、そうだ。あの時の熊のことなんだけど」

「なんですか？」

「あの熊をさ、殺つたのって、誰なの？」

「ああ。それは……僕が殺りました」

「…………は？」

紫電の発言に一瞬呆ける蒼華。

「え？でも、君武器持つてないよね？」

「え？ああ、僕の武器ですか？あの時、熊を殺つた武器は……」

そう言ひて、紫電は周りを確認した後、右手を前に出し掲げた。

「？」

劉宏はなんで手を？と思ったが、次の瞬間、

「ハア！」

「バシュウウウウ！」

「！？」

いきなり、紫電の右手に大鎌が現れ、思わず身構えてしまつた。

「僕の武器の大鎌『天龍』です。これで熊を倒しました」

「ぐ、ぐ。そ、うなんだ」

劉宏は、こきなじのことばでビックリして、動搖を隠せないでいた。

「………… やはつこんな力は、異常ですよね」

「えー?」

急に暗い顔になつた紫電に焦る蒼華。

「だつて、蒼華さんの顔、相当動搖しますよ」

「え?ああ…………」正直驚いた。でも、それも踏まえて紫電は
紫電でしょ?」

「!?

蒼華から意外な答えが返ってきたのか、紫電が驚いて顔を上げて、
蒼華の顔を見る。

その時の蒼華の顔は笑顔だつた。

「だから、そんなことで紫電のこと……嫌いにならなによ」

そう言つて、紫電を抱き、優しく頭をなでる。

「ありがとうございます……」

そして、二人は兵が見に来るまでしばらくの間抱き合っていた。

第五話（後書き）

以上です。

なんと前回の人物の正体は、靈帝こと劉宏でした！
完璧に、ご都合主義発動です（笑）

驚いてくれていただけたら、作者としての自分はとても気分がいい
です（笑）

さて、今回のことでのルートが決まりました。
お気付きの通り。漢ルートです。
完璧に、オリジナルルートです。

冒険に走りますが、頑張つて書きますので、どうぞ今後とも応援よ
ろしくおねがいします。

ご意見、ご感想も待つております。

では、次回をお楽しみに！

第六話（前書き）

完成したので、投稿いたします。

今回は、ある意味幕間のようなものです。

話は、一気に飛んで、18年後の話になります。
すみません手抜きで……（汗）

でも、最初にそれまでの出来事などを書いているので大丈夫です。
では、どうぞお楽しみにください。

時は流れて、雷魔こと紫電と、劉宏こと蒼華の義姉弟の契りから十数年の月日が経っていた。

これまで色々な出来事が起こった。

まず、前帝の桓帝が亡くなり、蒼華が桓帝の皇后や当時の大将軍、そして、太尉により、擁立された。その後、町の肉屋の息子で、美形で有名な何氏を向かえ、その後、劉弁を生んだ。また、以前から皇后であつた王美人との間にも劉協を生んだ。

そして、次に紫電が十三歳で、軍入りをした。これには、蒼華が推薦しようかと話を持ち掛けたが、紫電は、「自分の力で、軍の上を目指したい」といったので、それに感銘を受けた蒼華は推薦せず、紫電が上がつてくる事に期待したといつ。

それから、一年の月日が流れ紫電が十五歳になつたとき、それまでの功績や皇帝の蒼華との仲もあり、蒼華自ら、彼を自身の守護将に任命した。そして、その後、彼に配下が増え、自分の隊を持つことになつた時、また蒼華自身がその隊の名を『天龍』と名付けた。

こうして、紫電は禁軍特殊警護部隊『天龍』の隊長として、日々活躍し、また、彼の武もその当時の後漢王朝の中でも、最強と称され、そして、彼の主な色が紫だつたためと、彼が本気を出した時に見せた雷を纏つた氣などの影響から、周りから『紫雷の龍』と呼ばれ、賊などからは恐れられ、民からは、絶大な人気を誇つていた。

しかし、それからさらに一年後。紫電が十七歳になったときに事件が起きた。

その年に十常侍となつた張讓らに謀られ、謀反の疑いをかけられた。そして、これまでの功績や蒼華の計らいにより、死刑は免れたものの、洛陽から追放された。

『天龍』も解散させられ、『天龍』の仲間たちもバラバラに散らばってしまった。

その後、紫電は洛陽から遠くの山に山篭りをして、自身の能力の更なる向上を目指した。

そして、それから六年後の話から、この物語は再度紡がれていく……。

洛陽の事件から六年後。

「とある荒野」

「ハア……良い天氣だねえ。なあ、『白龍』そう思わねえか?」

ブルルル

腰に一本の剣を佩いた紫髪の青年　名を雷魔、字を霸龍、真名を
紫電しじんが馬上で綺麗に広がつた青空を見上げながら、彼が乗つてゐる
白く美しい毛並みを持つ彼の愛馬　白竜にそう問いかけると、白竜
は人の言葉がわかるのか相槌を打つよつに一つ嘶いた。

蒼華と義姉弟の契りを交わしてから、十八年のときが流れております。
彼も二十三歳になり、立派な大人である。しかも、結構イケメンだ
つたりする。

「さうか。お前もさう思つかあ」

そつと田線を白竜に落とす。

「しかし、あの事件から早六年か。それまで色々あつたなあ」

昔を思い出しているのか、もう一度視線を上に向ける。
そして、感慨ふけるのはこれで終わり、と言つよつて視線を戻し、
懐から精巧な漢の地図を取り出す。

「さて、現在はどの辺かなつと……」

地図を広げながらそつと咳き、現在の位置を確認し始める。

「確かに、前に寄つた町が西涼の武威ぶいだったから…………こつから近い
のは…………天水あまみずか」

地図を見ながらこれまで通つてきた町と、ここまで来た時間を合わ
せて計算し、近くの町を確認した。

ちなみに、路銀は、軍に所属していたときに相当な額を貰つており、

洛陽を追放されたときに、それを持ってきたので、節約すれば、一年は大丈夫らしい。

まあ、それでも、途中で立ち寄った村などでは、賊や獸退治をしているが。

「天水と言やあ。最近は、董卓じゅうたくが治めてるって話だったな」

そつ言いながら、これまでに集めてた情報を確認する。

「結構、良い感じに治めてるらしいから、「あの」董卓とは別物かな？ そういえば、西涼の馬騰ばとうも女だつたし。董卓もやっぱ女なのかな？」

そつ言つて、思考の海に沈む。ちなみに、彼の言つ「あの」董卓とは、皆様もご存知の史実上の董卓のことである。

（あの時の神の言つとおり。三国志で有名になつたほとんどの人物が女性化しているな。『天龍』の「あの四人」も女だつたし。となると、董卓も女の可能性がある……か）

しばらくして、思考の海から戻つてきたのか顔を上げ、白竜に話しかけた。

「白竜。次は天水に向かうぞ。董卓つて奴がどんなやつなのか見ておきたいしな」

ブルルルル

紫電の言葉に「わかつた」と言つているのか、また一つ嘶いた。

「よし。んじや、駆けり、白龍一風の如く。」

ヒューンー

そう言つて、紫電は白龍と共に天水に向け地平線のかなたに消えて
いった。

これから、どのようなことが彼を待ち受けているのか？それは、誰
にもわからない。

第六話（後書き）

いかがだつたでしょうか？

おかしなところがあれば、すぐに言つてください。

紫電は、これから色んなところを放浪します。
そして、手始め……って訳ではないんですが、まずは、天水に寄ります。

そこで何が待ち受けているのか？

お楽しみに。

P・S・Iの後に主人公とその愛馬の紹介を投稿しますので、そちらもよろしくお願いします。

主人公とその愛馬紹介（前書き）

紫電とその愛馬「白龍」^{はくりゅう}の紹介です。

能力値は、「真・恋姫+無双パークエクトビジュアル」を参考にしています。

主人公とその愛馬紹介

前の世界の名：雷魔紫電
姓：雷
名：魔
字：霸龍
真名：紫電

性別：男

年齢：23歳

身長：192cm

体重：98kg（通常時）、78kg（大鎌出現時）

武器：黄龍（日本刀に酷似した刀剣）

飛竜（鍔無しの直刀）

天竜（大鎌）

愛馬：白竜

好きなもの：昼寝、警邏（という名の散歩）、白竜と遠乗り
嫌いなもの：悪人、蜂

能力値：武力5以上、統率力5、知力5、政治5、魅力5

現代とは似て非なる世界で、生きていた青年。その世界のある国で、將軍として活躍していた。そして、敵国との決戦で、敵の大将（王）と一緒に打ちし、勝利はしたが、相打ちとなつた。しかし、その世界の神に気に入られ、その神の勧めにより、第二の人生として、恋姫の世界に転生される。

転生後、恋姫の世界のとある村で暮らしていたが、賊が襲つてきたときに起きた出来事が原因で、村を追われる。

その後、旅の途中、巨熊に家族共々襲われ、両親を巨熊に殺され

る。その時、熊退治に出ていた後の靈帝・劉宏に拾われる。

十三歳の時に軍に所属し始め、十五歳の時に禁軍特殊警護部隊『天龍』の隊長になった。また、漢王朝最強の武と言われ、その圧倒的な武や彼が通ったあとは必ず紫色の雷が残ることから『紫雷の龍』と呼ばれ、賊などから恐れられていた。

しかし、六年前の十七歳の時に、張讓の手により謀反の疑いをかけられ、洛陽から追放されてしまう。それがきっかけで『天龍』を解散させられた。

その後、六年間山に身を隠し、現在は、各地を放浪している。

性格

基本自由奔放だが、政務などはちゃんとこなす。その速さは、相当なもので、昼ごろにはほとんど終わっている。また、優しく人当たりも良く、面倒見も良いので民達や武文官に慕われていた。ついでに、『天龍』に所属しているときに劉弁、劉協姉妹にも懐かれていた。しかし、悪人や人を殺すことに何も感じていない賊などには容赦はしない。

容姿

長身で、筋肉質だが細く、顔も目つきが少しキツイが、端正な顔立ちをしている。髪の色は紫。目も濃い目の紫色をしている。また、瞳孔が龍の目のように縦に割れている。このことから、『紫雷の龍』と呼ばれているとも言われている。

ちなみに、作者的には、顔と髪型は「ナルト」の「サスケ」のような感じをイメージしている。

服装・装備

下に黒のアンダーアーマーみたいな服とそのうえから紫色の上着を着（首に近いところ以外は閉めている）、下は上着と同色の長ズボンをはいている。

戦闘時には、普段の服の上から首に口が隠れるほどの大マフラーのような物を巻き、全体的に紫が主体の軽装の鎧と手甲と足甲を装備している。

実は、武器のひとつの大鎧『天竜』は、体内に封印されており、右の手のひらに「封」という文字が刻まれている。そこから大鎧を体内から取り出したときが彼の本気という証である（この時、大鎧分体重が減る）。そのため、仲の良い者達以外からは避けられていることが多い（妖術の類と思われているため）。

その他の能力

武は通常時でも呂奉先並みで、本気を出すと呂布より上。気配を消すことに長け、氣が使え、知略も『臥龍』諸葛孔明に、軍略も『鳳雛』鳳士元、『美周郎』周公謹の二人に勝るとも劣らないというレベルであり（強いて言つなら、現代で東大を余裕で、首席で卒業できるほど）、ある意味完璧超人である。

しかも、彼の扱う氣には、雷系の属性が付属している（前の世界で雷属性の技が使えたためという作者都合です）。また、指に挟んで投げられる程度の大きさであれば、それをクナイのように用いることもできる。さらに、情報収集能力も各国の隠密顔負けの実力がある。先にも言つたように、まさに完璧超人である。

・陣形

偃月陣、方円陣、魚鱗陣、鶴翼陣、峰矢陣

・奥義

LEVEL1・『天龍』突撃令

突撃、味方士気+、敵士気-

『天龍』の突撃はどんな者にも止められない。

LEVEL2・龍霸雷光閃

突撃、迎撃、味方士気+、味方攻撃+

紫雷の龍の渾身の一撃。この一撃は、どんな万夫不当でさえ、たちまち膝を地に付ける。

LEVEL 3・紫雷の龍

突撃、迎撃、味方攻撃+、味方士気+、敵攻撃-、敵士氣-

雷の如くの速さで駆け抜け、龍の如く敵を屠る。その姿、まさに天下無双なり。

・白竜

普通の馬より一回り大きい白馬。紫電の愛馬。田と鬱^{たてがみ}、そして尻尾は蒼く、体毛は白よりも白銀に近い美しい馬。紫電が『天龍』を率いる事になつた時に劉宏こと蒼華から送られた。史実の赤兎馬並みの能力を有している。

紫電が洛陽から追放されたとき、張譲が自分の馬にしようとしたが、大いに暴れ、紫電が向かつた方向に走り去つていつたと言つ。その後、紫電に追いつき、彼の旅の供となつている。

紫電が旅をしている間の道中は一緒にいるが、町に入るときはその周辺の森などに身を潜ませている。

主人公とその愛馬紹介（後書き）

こんな感じでムツチャ 完璧超人です。

まあ、自分の妄想の産物なんですが……（苦笑）

第七話（前書き）

完成したので投稿します。

今回は、天水での話です。

では、どうぞ。

紫電が白竜と共に天水に向かってから数日後。

彼らは、天水に着いていた。

白竜は、町の中を連れて歩くには目立ちすぎるため（主人公と愛馬紹介参照）、城門のすぐ傍の森の中に身を潜ませた。白竜は馬だが、そこらの獣や賊に遅れを取るような馬でもないので（赤兎馬並み）、町に入る時は、良く近くの森や林に潜ませている。

そして、紫電は、町の中を見てまわっていた。

「このが天水か……結構賑わってるな。それに皆笑顔だ。董卓の政
が良い証拠だな」

そう言って、すれ違う人々や店で客を呼び寄せてる店の者、その店の者に呼び込まれて物色している人などの顔を見て、董卓の政治が間違つていないと確認する。

「最近は、洛陽を中心に、悪政管が増えてきているからな。こういった良識な政治が少なくなってきたいやがる。やはり、あの時、十常侍を抑えておきや良かったか？」

昔のことと思い出しているのか、思考の海に沈む紫電。
考え方しながらもすれ違う人々を避けながら歩くのは、流石といったところか。

しばらくして、思考の海から帰ってきた紫電が、ふと前のほうに視

線を向けた。
と、その時、

「キヤアアーー！」

「ん？」

突然、人ごみの中から叫び声が聞こえた。

「なんだ？」

叫び声が聞こえた方へ向かい、取り囲んでいる人の外からその様子を伺つてみると、二人の少女に刃物を突きつけて、銀髪の女性に対して何かを要求している男の姿が目に入った。

良く見ると、その男の刃物を握っている手とは反対の手に、金品や宝石が入った袋が握られていた。

ということは、この男は、強盗をして逃げている途中で、偶々通りかかった少女たちを人質に取り、追いついてきた銀髪の女性に逃走用の馬などを要求しているのだろう。

「ハア……やつぱこんなに治安が良くても、いつこいつとする奴はいるんだねえ」

そうため息を吐いて、少し呆れる紫電。

そうして『いる間にも、男は今にも逃げ出しそうである。

「……やばいな。……仕方ない、助けるか……つと、旅をするのに立ちはだからないからな。少し変装でもするか」

そう言つて、路地裏のほうに入り、民家の屋根の上へ飛び乗つた。そして、荷物の中から、所謂、忍者の覆面の様な物を取り出し、それを見つた。

「よし。それじゃ……行きますか！」

そして、そのまま騒ぎの中心へ跳躍した。

「おらー・早くしねえか！でないと、この一人を殺つちまうぞー。」

そう言つて、二人の少女のうち深緑色の髪の少女の首に刃物を含わせる。

「ちい、すみません、董卓様。それに賈駄かく……」

「へう……」

「へう……」

銀髪の女性は、そう一人に謝つて、近くにいた兵に馬を持つてくるよう指示しようとした。

その時、

「金品を強奪し、女の子一人を人質にと取るとは、男の……いや、人間の風上にも置けねえな」

そう言つて、両者の間に紫電が降り立つ。

「…? な、なんだてめえは…?」

そう言われ、紫電は男に向かつてこう答えた。

「俺は、通りすがりの『覆面戦士』だ」

そう言つて、紫電は男に近づいてこうする。すると、

「と、止まれ！ それ以上近づくと、この一人を殺すぞ！」

そう言われ、紫電の足が止まる。

そして、しばらく男の方を睨んでいたが、明らかに呆れたようにため息を吐いた。

「な、なんだよ…?」

そう言つて、男は紫電がため息を吐いたのを、見て怒りをあらわにする。

「いや、救えねえなと思つて……」

「な、なんだと…?」

「相手の力量もわからねえ奴が……」

その言葉と共に、紫電が消え、男は焦つて周りを見る。

「さう意氣がるんじやねえよ……」

男の背後からその声が聞こえた瞬間、男は首に強い衝撃を感じ、そのまま意識を失った。

紫電は、あの一瞬で男の背後に回り、男の首に手刀をくらわしたのだ。

男が意識を失つたことで、一人の少女が解放され銀髪の女性が一人に元にやつて来た。

「董卓様！賈駆ー！」無事ですかー？」

「え、ええ。なんとかね」

「へうう……怖かつたですぅ」

董卓と賈駆の状態を確認して、助けてくれた者にお礼をしようと、さつきまでその者がいた方に目線を向ける。

「そ」の者、董卓様を助けてもらひなー?」

しかし、そこには、誰もおらず、周りの者達もそのことに気付き、皆周りを見渡すが、その者　紫電を見つけることはなかつた。

「…どうしたんですか？華雄さん」

「？」

董卓と賈駆は、そのことに気付いていないのか、銀髪の女性
雄に疑問の眼差しを向ける。

「……董卓様たちを助けた者がどこにも居りません」

「「えー?」」

華雄の発言に一人は驚き、辺りを見渡すが、華雄の言つ通り、どこにもいないうじよづやく気付いた。

「くう……本当にどこのもいなうですね」

「ホントね……でも、あいつはいつたい何者だったのかしら?」

「わからん。しかし、もしかしたら、あの者、私よりも強いかもしれません」

その華雄の言葉に再度驚き、華雄の方に振り返る一人。

「それは本当ですか? 華雄さん」

「はい。先程、あの者が強盗犯に手刀をくらわせたときの動き……正直、見えませんでした」

その言葉に、やうに驚く一人。しかし、その言葉だけでも、あの者が相当強いと言つことがわかつた。

なぜなら、華雄は、現在董卓に仕える者の中で、最も強い武将でもあるからだ。

「そうですか?……でも、ちゃんとお礼をしたかったです」

「まあ、今度会った時でもいいんじゃない、用?」^{ゆえ}

「…………そうだね…………^{えい}詠ちゃん」

そう言つて、二人は華雄の護衛の下、城へと帰つていった。

その紫電はと言つと…………。

「へえ。あれが董卓。そして、賈駄に華雄か…………」

町の中でも高めの建物上から三人の様子を伺い、その三人の会話を読唇術で読み取っていた。

「なんか史実とは違つて、虫も殺さないような子だな、董卓は。賈駄は、気の強そうな子で、華雄は、まさに武人つて感じだな」

そう言つて、三人の特徴を分析する。

「さて…………欲しい情報も手に入つたし、早めにこの町から出たいんだが…………」

そう言いながら、空を見上げる。そこには、茜色になつつある空があつた。

「結構、太陽が傾いてるな。これは、この町を出ても、夜までに次の町や邑に着けそうにないな」

そう言つて、屋根の上から路地へ飛び降りる。

「仕方ない。今日はもう宿をとつて休むか

そして、宿のまゝに歩みを向けるのであった。

翌朝、紫電は城門が開いたと同時に町を出て、白竜を率び、次の町を田舎すのであった。

第七話（後書き）

以上です。

次回、紫電と白竜はどうぞ訪れるのか？

いろんなことを予想しながらお待ちください。

では、お楽しみに～

第八話（前書き）

や、やつと出来上がりました……。

遅くなつた言い訳は、あとがきでいたします。

今回は、ある三人組との出会いです。

どのようになつてゐるのか？

ではじめ。

第八話

天水を出発してから一日前。紫電は、漢中に着いていた。

「 こゝが漢中か。こゝも賑わってはいるな

そつ言いながら、漢中の町並みを見てまわる紫電。

白竜は、前にも言ったとおり、近くの森に身を潜ませている。

「 さてと…… そろそろ腹も減ってきたし、店にでも入って腹を満たすか」

そつ言いつつ、近くにあった酒屋に入つていった。

? ? ? Side

私たちは現在、漢中の街中にある一軒の酒家で、今後のことについて話し合ひをしていた。

「 ……それで、これからどうする?」

私は姓を趙、名を雲、字を子龍、真名を星と言つて目の前にいる一人の旅の友に話を切り出す。

「 そうですね。こゝら辺は、もう粗方見終わりましたからね

その一人の内、眼鏡をかけた女性 姓を郭かく、名を嘉か、字を奉孝ほうじょう、
真名を稟りんが私の質問に答えた。

「そうだな……」一人が良ければ、私は？州にある陳留といふところに行つてみたいのだが……どうだらうか？」

そう言つて、私は二人に次の目的地を提案した。

「陳留ですか。確か、曹操という方が刺史をしているといつところですね~、星ちゃん？」

頭に人形を乗せた少女 姓を程てい、名を立りつ、字を仲德なかよし、真名を風ふうが
間延びした声でそう尋ねてきたので、私は酒を飲みながら頷いた。
「そうだ。風かぜの噂で聞いてな、どのような人物か興味が湧いてきた
のだ」

そう言つと、目の前の二人 風と稟は、少し考へ、

「風はいいと思います。稟ちゃんはどうですか？あそこには、まだ
行つてないですし」

「そうですね。私も、曹操という人物には興味がありますから
そう言つて、二人とも私の提案に賛成してくれた。

その後は、他愛のない会話で、盛り上がり、なごやかな雰囲気になつたが、それを打ち壊す怒声が店の中に響いた。

「酒だ！酒をもってこい……」

声の聞こえた方に目を向けると、酒に酔つた大柄な男が辺りに怒鳴り散らしていた。

周りにいた他の客は、迷惑な顔しつつも、その男と関わり合いたくないのか、その男から距離をとる。

そうしてこの内に、この店の店主がその男を諫め始めた。

「あの～……他のお客様の～迷惑なりますので、少し静かにしていただけませんか？」

しかし、その行動がかえつて男を怒らせた様だ。

「ああ！？なんだてめえー客の俺に意見しようってのか！？」

男はそう怒鳴ると、店主の襟首を持ち上げた。店主の足が宙に浮き、苦しそうなうめき声を漏らし始める。

私は、それを見て、近くに立てかけてある私の檜『龍牙』^{りゅうが}を手に取り、立ち上がった。

「行くのですか？」

それを見ていた裏が私に尋ねた。

「つむ。……ああいう無粋な輩を見ていると、無性に腹が立つのでな。少々成敗していく」

「その必要はなさないですよ~」

そつ言つ風の声が聞こえたので、私と稟は、風の方を見た。

「じりこり」とだ、風?」

「あれを見てください」

風にそつ言われ、私と稟は、風が指差した方へ目を向ける。

するとその先には、一人の青年がいた。

その青年は、男に近づくとその男に声をかけた。

「おい、おっさん。そこまでにしてあげるよ。いい大人なんだから
そ。ほら放してあげるよ」

そつ言つて、青年は男の手首をつかんだ。

「つだー?」

そつすると、男は痛みの声を上げて、手を放した。

「店主。ijiは俺に任せといてくれ」

青年が床に落ちた店主に声をかけると、店主は慌てて一人から離れた。

「てめえ!何しやがるー?」

そう言つて、男は目の前の青年に向かつて殴りかかった。良く見ると、振り上げた腕とは逆の腕の手首に痣が出来ていた。

だが、青年はその男の拳を体を横にそらして避けた。

男は、避けられたことにより、懲勢を崩し、そのまま盛大に床に転がつた。

「あらら。大丈夫か？ 隨分と酔つてるみたいだな。気をつけたほうが良いぞ」

青年がそういうけしゃあしゃあと倒れた男に声をかけると、周りからは失笑が漏れた。

だが、私は見た。青年が、男の拳を避けたと同時にその男の足を自分の足で引っ掛けたことを。

「て、てめえ……ぶつ殺してやる！」

笑い者にされた男は、酔いとは違う理由で顔を赤くし、立ち上がり腰に下げていた剣に手をかけた。

その瞬間、

「いい加減にしろよ… おっさん」

ゾクッ！

青年のその言葉と共に青年から殺氣が放たれ、辺りの温度が下がったような気がした。

私でさえ、『龍牙』を握っている手が思わず強くなるほどだ。それを真正面からしかも至近距離で受けている男は、口をパクパクするものの、言葉が出ないようだ。

「それを抜くつてことは、冗談じやすまくななつまうんだぞ？ 分かつてんのか？」

わざわざまでは、打つて変わつて冷たい声音で男に話しかける。

「分かつたんなら、わざわざとこいから立ち去れ…………それでも、分からねえんな」

そう言つと青年は、スッと目を細めた。

「……俺が相手してやるよ」

青年がわざわざした瞬間、たちに強い殺気が放たれ、私は冷や汗をかいた。

それを真正面から受けていた件の男は、すぐに身を翻し、店から出て行つた。

「…………ふう」

そう青年が息を漏らすと、静寂に包まれていた酒屋の中で歓声が沸いた。

周りの人たちが口々に青年を賞賛しながら取り囲んでいく。

青年が少し気恥ずかしくしていると、今度は店主が近づいていった。
そして、何度も青年に頭を下げていた。

それから、青年と店主がいくつか言葉を交わすと、店主は笑顔で頷いて店の奥、厨房の方へ姿を消した。

それを皮切りに、囲んでいた客も青年から離れて行き、青年も座っていた卓へ戻つていった。

「な、中々面白いものが見れましたね～」

「や、やりますね」

一人はそう言つてはいるが、先程の殺氣のせいで動搖しているのが分かる。

だが、私は酒と自分の料理を持つて席を立ち、先程の青年の座つている卓へ向かおつとした。

「……って、星?ビン?へこくのですか?」

そう稟が聞いてくる。

「なに、少し挨拶でもしておひつかと思つてな

そう言つて、私は青年の卓に向かつた。

「まつたく、星つたら……」

「まあ、いじじゃありませんか。風もあるお兄さんに興味あります

し

そつ言ひて、風も自分の料理を持つて、私の後ろを着いて來た。

「えー? 風もー? ちよ、ちよと待つて!」

そつ言ひて、稟も焦りつつ自分の料理を持ち、一緒に着いて來た。

趙雲 Side Out

紫電 Side

客や店長から解放された紫電は、自分の卓に戻り少し困っていた。

「やつちまつたなあ。あまり目立ちたくないなかつたんだが……」

そつ言ひて、酒を煽つた。

「少し、よろしいか?」

突然、声をかけられ、そちらに顔を向けるとそこには酒と料理を持つた、蝶の羽の模様を浮かべた袖に白い服着た女性がいた。

「……なんか用か?」

「うむ。突然だが、相席をしてもらいたいのだ。よろしいか?」

「それは構わないが……」

「座るところは他にもあるみたいだが？」

紫電の言つとおり、密の出入りこそは多いものの、座る場所に困るほどではなかつた。

「確かに、座る場所なら、そこかしこにあるが、貴殿と話ができるのはこの卓しかなかろう」

紫電は、この女性は自分が目的でこの卓に来たことに気が付いた。その理由は、先程の騒ぎを見て話したくなつた、ということだらう。

「ふむ。わつこつ」となら別に構はないぞ」

「では、遠慮なく座らせてもらおう」

そつ言つて、女性が紫電の対面に座ると、今度は頭に人形のよつな物を乗せた少女と、眼鏡をかけた女性がやつて來た。

「風と稟ちゃんも」一緒に良いですか？』

「あんたたちは？」

紫電がそつ聞くと、

「私の連れだ」

先に座つていた女性が教えてくれた。

「 もうか。なら、どうぞ」

そう言って、紫電は一人にも座ることを勧めた。

「 「 ありがとうございます」 」

そう言って、頭に人形? を乗せた少女は紫電の隣に、眼鏡の女性はその少女の対面に座った。

紫電は一人が座ったのを確認し、三人に話しかけた。

「 ……これで全員か? 」

「 うむ。……まあ、まずは自己紹介でもしどうか」

そう言って、白い服の女性、頭に人形? を乗せた少女、眼鏡の女性の順に名乗りだした。

「 我が名は趙雲といふ」

「 風の名は程立ていりつです~」

「 私は戯志才ぎじさいと名乗つております」

その三人の名を聞き、紫電は内心驚いたが、顔には出さず、次は自分の名を名乗つた。

「 俺の名は、雷霸らいばと言つ」

紫電は、この旅の途中、どこで洛陽を追い出された自分の名を知つ

ている者がいるかわからぬため、あえて偽名を名乗っていた。

そして、さう名乗つづつも、頭の中では、三人のことを分析していった。

(へえ。この水色の髪の女が趙雲か。確かに、良い目をしてやがる。武も相当な物だな。そして、他の一人は、程立に戯志才か。……程立は、いかにも軍師のような感じだな。戯志才は、こちらも軍師だが、さつき「名乗つている」と言つたな。つてことは、偽名か。本名が気になるが、俺も偽名を使つてる分、あまり深入りしないほうが良いな)

これを名乗つてゐる一瞬の間に考えた。

「ところで、先程この店の店長と何か話していたようだが」

そう趙雲が聞いてきた。

「ああ。それはな

」「

「へいー!お待たせしやしたー!」

紫電がその内容を話そうとしたとき、横合いから威勢の良い声と共に大皿に盛り付けられた美味しそうな料理が運ばれてきた。

「雷覇殿。先程の話の内容はこれですか?」

「そうさ。あの時、どうしてもお礼がしたいって言つから、ここでの料理で一番うまい物を食わしてくれって言つたんだ」

そう言つて、紫電は趙雲が聞いてきた内容の答えを教えた。

「やつですか。…………それにしても多いですねえ」

程立の言つとおり、その大皿に盛られた料理はすく多くつた。なにせその頂点が紫電の皿線とほほ同じだつたからだ。

「やけに時間がかかるなと思つたら…………残すのは…………勿体無いしなあ…………」

食べ物にありつゝにも苦労するこの時世だ。残すなんてこいつのは駄目だらう。

恐らくこの店長が好意でやってくれたのだろうが、流石の紫電でもこれ全部を吃るのは苦労しそうだつた。

そつ紫電が悩んでいると、趙雲たちが声をかけた。

「雷霸殿。よろしければ我々もそれをいただいても構わぬか?」

「ホントか? それは助かる。んじゃ、三人とも遠慮せずに食べてくれ

「ありがとうです~」

「あつがとうござります。では、雷霸殿も我々の料理をお食べください」

戯志才がそう言つたの聞いて、紫電は他の一人に「いいのか?」と いう視線を送ると、他の一人は頷いた。

「わかつた。では、いただきます」

「「「いたします」「」」

そうして、四人は紫電の掛け声で食事に取り掛かった。

あれ程の料理も四人が食べれば何とか全部食べきることが出来た。

食べ終わり。今は食休みといったところだ。

「へえ。じゃあ、三人も旅をしてるのか」

「つむ。私たちは見聞を広げるために諸国を渡り歩いている。雷霸王も旅をしておられるのか?」

「ああ。俺も三人と似たようなもんだ」

「そうですか。ちなみに、どこから来たのですか?」

「俺は、最近長安から出発してな。その後は、涼州の武威、天水を通つて、この漢中に着いた」

「ほう。長安から。それに武威と天水ですか」

「ああ。どこも結構な賑わいで、その領主が良い政治をしていた」

やつ言いひて、紫電は今まで回つてきた町の様子を三人に語り始めた。

しばらくして、紫電の話が終わると、趙雲はこの車に来た目的の話を切り出した。

「といひで、雷霸殿。先程の件は見事でしたな」

「先程？ああ。あのおっさんやつか。俺としては、単にムカついたからつてだけで、それほど大したことじゃねえよ」

「」謙遜を。あの時、貴殿が助けなければ、この店の主人はどうなつていたことか

「そん時は、あんたが助けていただろう？」

紫電がやつ言いひと、趙雲はまるで試すように聞いてきた。

「何故なにゆえ」そう思おもわれた？」

「あんたが義に厚あつそうなのと、田たがとても澄すみんでるからだよ」

「…………は？」

趙雲は後半に予想外のことと言われ、少しポカンとなつた。

「人の目を見るとたいていの事がわかるんだ。そいつがどんな人生を送ってきたか、がな。善行を積んでいる心優しい奴はホントに目が澄んでいる。反対に悪行ばかりしてきた奴の目は、暗く濁っている。ホントに人間か？ってくらいにな。実際、俺はそう言つ奴を何人も見てきた」

そこで、一皿切り口に水を含み、再び話しかけた。

「だからこそ分かる。趙雲。あなたの目は、とても真っ直ぐで綺麗な目をしている。だから、あの時、俺が出て行つてなくとも、あんたが助けていただろうと思つたのさ」

その言葉を聞いて、趙雲はしばらく呆然としていたが、不意に吹き出し、そして、笑い出した。

「ふつ、ははははー…そつか！私の目が綺麗だからかーなるほど…
…くくくくくく

そうして、ひとしきり笑つと、趙雲は田元の涙をぬぐい、居住まいを正した。

「いや、すまないな雷霸殿。貴殿が余りに嬉しい事を言つてくれるものだから、な」

「いや、喜んでくれたならそれでいいよ」

(まあ、以前にもこれを聞いて大笑いした奴がいたからな)

趙雲の言葉を聞きつつ、昔を思い出した紫電。

「お礼に貴殿には我が真名を授けよ。我が真名は星^{せい}だ。次からもう呼んでくれて構わない」

「……は？」

いきなりのことで頭が付いて言つてない様子の紫電。

「…………」

「おおー星ちゃんが真名を許すとは、お兄さん中々やりますねえ。
ちなみに、風の真名は風^{ふう}ですの、よろしくお願ひしますねえ」

「いや……あの……」

「二人が真名を許したとなれば、私も許さない訳にはさせんね。
正直、先程の言葉には感銘を受けましたし。私の本当の名は郭嘉^{かくか}、
真名は稟^{りん}です。偽名を使っていたことには深くお詫び申し上げます」

そこまで来て、紫電は諦めたのか溜息を吐き、

「はあ……もう勝手にしてくれ……それなら、俺も教えねえとな。
俺の真名は紫電だ。よろしくな、星、風、稟」

そう言つて、自分の真名も名乗つた。

「…………（お願いします）」、紫電殿（お兄さん）「」

いつって、奇妙な三人組に気に入られた紫電であった。

それから、しばらくの間、この大陸の行く末や情勢、そして、現在の有力諸侯はどこかなど会議みたいなものをしていた。

しかし、気が付いたら、どうやら、随分と長居してしまったようで、酒屋を出ると、もう辺りはいつも通り暗くなっている。

「それで、紫電殿。貴殿はこれからどうするつもりだ？」

突然、星がそう聞いてきた。

「ん？ どうするって…… そうだな。今日はもう宿に戻って寝て。明日には、巴蜀の方へ行つてみるかな。星達のおかげで、この町で得たかった情報も聞けたし」

そう言つて、紫電は星に聞かれたことに対する答えを言つた。

「さうか。では、我らとは逆の方向になるわけだな」

「ああ。だから、ここでお別れだな」

「そうですか。まあ、仕方ないですわ」

「そうですね。でも、もう少しお話をしたかったです。紫電殿の話はとても興味があったので」

そう言つて、稟の顔に少し寂しさが浮き上がる。

「……………ぐう」

いきなりの風の寝息で、ズッコケたりになる紫電。

「はあ……風、起きなさい」

そつ言ひて、風を起しす裏。

「おおー。裏ちやんがあまりにも意外な感情を出したので黙ってしまった」

「悪かつたわね！意外な感情で！」

風の発言にほんのり頬を染めながら、言ひ返す。

「なあ、星。あれって風の癖なのか？」

紫電はそつ星に聞く。

「ああ。こつでもじーでも寝てしまつ癖が風にはあるりじこ」

星のそれを聞き、何だその癖、と紫電は心の中でシッコンだ。

「さて、それそろ寝に戻らないと、真っ暗になつてしまつな

その星の言葉に、言ひ合ひをしていた二人もひかり振り向いた。

「せうだな。んじや

」

「どうしました～？」

急に言葉を切った紫電に風が声をかけるが、紫電は通りの脇を睨む
よつこ見つめていた。

「星」

「ああ、わかつている」

紫電が、星の名を呼ぶと、星は頷いて『龍牙』を手に取った。

紫電も腰に下げていた二つの剣の内、左に下げていた方を右手で抜いた。その剣は、現代で言う日本刀の形に似ていた。

それだけで、他の二人はただ事ではないことに気付いた。

「隠れても無駄だ。出て來い」

そう言つて、先程よりも打つて変わつて冷たい声で、通りに向かつて、短くそう言つた。

しばらくすると、その通りから一人の男が現れた。

「ふーん。あの時のおっさんか……いつたい何の用だ?」

現れたのは、酒家で紫電に追い払われた大柄の男だった。手には剣が握られており、剣呑な雰囲気を漂わせていた。

「てめえ……あん時はよくも俺に恥をかかせてくれたな。ただじやすまさねえから覚悟しやがれ!」

「それで？貴様一人では敵わないから、仲間を連れてきたのか？」

そう星が言つと、男は驚いて星の方を見た。紫電と星は物陰に隠れている不穏な気配を感じ取っていた。

「これで隠した積もりか？全然なつてないな」

紫電がそう嘲笑いながら言つた。

「へむせえーお前ら、出て来いー！」

紫電の言葉と嘲笑いに喚き散らすと、男は辺りに呼びかけた。

すると脇の道からぞろぞろと男の仲間たちが出てきた。手にはボロボロの剣を持っている者もいれば、鍬や鎌を持っている者もいた。一田で農民崩れだと分かった。

それらがざつと、一、三十人ぐらい出てきたのを見て、紫電は呟いた。

「物陰からワラワラと……まるで油虫 所謂「コキブリ だな」

紫電がそう言つたとたん、女性陣の嫌な顔をした。

「……ああ、アレですか」

「確かに、言いえて妙ですね～。一匹見かけたら一十五以上はいるところなんかは特に」

「いや、いやつらと一緒にしたら油虫に悪いだらう。油虫は害虫だ

が、それでも人を襲つたりはしない」

(おお。星も結構ひどい」と呟つた。まあ、同意するがな)

そんな油虫以下と言われた、男たちは、全員怒りに震えており、今にも襲い掛かってきそうだ。

「へえ……やつちもえー。」

その大柄の男の言葉を合図に、全員が一斉に襲い掛かつて来た。

「風、稟は後ろに下がつてろ。星、暴れて良いが、出来るだけ殺さないようにな」

「心得ている！」

そう言って、星は男たちに向かって駆け出した。そして、瞬く間に両方の距離は詰まり、ぶつかる。

「はあああああああ！」

星は、気合と共に一閃、槍を大きく横に振るつた。

ブオン！！

「「「「「ぐせぬねねーーー」」」

その槍が薙いだ瞬間、星に押し寄せていた男たちが吹き飛んだ。

せつやつて、星は男たちの勢いを止めるに、神速の突きを繰り出した。

ヒコンヒコンヒコンヒコンヒコンヒコンヒコン

「ぐわーー。」

「わわわーー。」

「ぐはーー。」

その切つ先は、肩や膝、太腿を突き刺し、次々と戦闘不能にしていく。その槍捌きを見れば、まさに趙雲子龍の名に恥じない者だと確信できた。

他の男たちはそれを見て、敵わないと思ったのか、数人が星の横を通り抜けて、紫電たちの方に向かっていった。

紫電が立ちはだかり、その手に刀を持っていると分かつて、足を止めるが、その刀『黄龍』の刀身が細身だと気づき、力技でならいけると思ったのか、そのまま紫電に襲い掛かった。

そして、最初に紫電に近づいた男が、紫電に向け、剣を勢い良く振り下ろした。

しかし……

キイン！

その音と共に、男の剣は弾かれた。男は、そのこと驚き、手を止めてしまった

そして、紫電は、その男の腹の辺りに『黄竜』を持っている手とは逆の手 左手の平を当てる。すると……

「烈破掌！」
れっぴじょう

キュイイイイイイイ……バアアアアアアン！！

そう紫電が叫んだと同時に、彼の手の平で奇妙な音と共に何かが弾け、男は後ろに吹き飛ばされた。

それを見た、周りの男たちが再び足を止めた。

「ヒツから先は行かせねえよ」

紫電がそう言つと同時に消えたと思つた瞬間、背後から声が聞こえた。

「次からは、心を入れ替えて、こんなことはやめるんだな」

その声が聞こえた瞬間、男たちにものすごい衝撃が襲い、男たちは氣を失った。

「ふう。やれやれ。これで終わりかな？」

紫電がそう言つて、周りを見渡すと、辺りには倒れた男たちで埋め尽くされていた。

紫電と星は、誰一人殺す」となく戦つた。その為、周りからは呻き声が多く聞こえる。

「紫電殿。」おひらも片付いたぞ」

「い」おひらも。怪我は……無む事じだな」

見た田舎に極我は無む事じなので、途中で訂正した。

「「つむ。平氣だ。それより、紫電殿はかなりの腕前だな」

「せりやじうも。星も、流石と言つべきか、大した槍捌きだつたぞ」

そう言つて、お互に先程の戦いを褒める。

そして、ふと倒れている男たちを見渡し、あの男がいないことに気付いた。

「やつこえば、あのねつわんせ？」

「あの男なり、仲間が全員やられたのを見て逃げて行きましたよ」

「一田舎に逃げちやいましたね~」

危険がなくなつたからか、一人が紫電と星に近づいて行つた。

「ところで、紫電殿。さつきのアレは何だったのですか？」

「……アレ？」

稟の質問に少しわからなか疑惑で返す紫電。

「ほら、奇妙な音と共に男を吹き飛ばしたじゃないですか～」

「ああ。アレか」

風に言われ、先程使つた技『烈破掌』のことだと理解したようだ。

「アレは、単に手の平に氣の塊を作つて、それを弾けさせただけだが」

その紫電の言葉に、少し驚く三人。

「ほひ。紫電殿は氣が扱えるのか……」

星は感心したよひに呟く。

「ん？ まあな。それなりに特訓したからな。星だつて、特訓次第では扱うことが出来ると思ひで。お前は、それなりの資質を持つている」

星はその言葉に再度驚くも、すぐに嬉しそうな顔をした。

「それはそれは。では、私ももっと精進せねばな」

「いつまつて、自身の可能性を確認でき、星はとても嬉しそうだった。

「それよりも、どうします、紫電殿？太守に報告しますか？」

「いや、しなくても良いだら……つていうか、しても無駄だ。きっと

「どうですか～？」

稟の質問に、紫電が答えると、その答えが不思議に思つたのか、風が尋ねて来た。

「だつて、考えても見ろよ。俺たちがこんなに暴れても警備兵が一人も来ねえじやねえか」

そう言われて、気付いたのか、三人は辺りを再度見渡した。

「確かに、夜とはいえこれだけのことが起こつてているのに誰も来る気配がないですね」

そつまつて、稟は紫電の言つた事に納得した。

「俺が思うに、ここは太守はあまり仕事熱心ではないな」

「でも、あの男がまた襲つてくるかもですよ～？」

「その心配はないだらつ。仲間を見捨てて自分だけ逃げるような奴に、人が付いてくはずもねえんだから。だから、ほつといても特に害はねえだろ」

「私もそつ思う。そつ言つわけだから。夜ももう遅い時間になつてしまつたし、宿屋に戻ることを、私は提案するが？」

「そうだな。俺も宿屋に戻るわ」

そう言つて、紫電は自分の宿屋のほうに体を向けるが、すぐに星のほうに振り向き、

「それじゃ、三人とも。短い間だつたが、楽しかったぜ」

「我らも、中々良い話を聞かせてもらつた」

「そつですね。紫電殿の考え方などはとても興味深かつたです

「また、機会があれば、色々な話をしまじょうね~」

「ああ。縁があつたら、またな」

「では、紫電殿お元氣で」

そつ言つて、お互に手を振つて、星たちと別れ、紫電は帰路に着いた。

宿屋へ向かっている途中、紫電は空を見上げていた。

「星ほしが綺麗だな。明日は晴れるかな？」

そう呟いて、視線を戻し、宿屋に向かっていった。

第八話（後書き）

以上です。

どうだつたでしょうか？

この時期ならこの三人組とも出会つだらうと思つた結果、いつなりました（笑）

そして、次回はあの老うげふげふん……お姉さま方のお一人と、そのうひの一人の弟子をしている少女との出会いです。

ここまで言つたら分かりますかね？（汗）

とりあえず、楽しみにしていてください。

さて、ここからほ言ひ訳タイムです……。

遅くなつた理由は、教習所に通つていた事にあります。

2月頭に入所手続きをしたのですが……正式に入所したのは20日でした。

そこからは、学科や技能の教習を詰め込めるだけ詰め込み、3月23日に卒業いたしました。

そして、24に一回目の本免許学科試験で2点足らずで落ちてしましましたが、昨日、合格いたしまして、やっと免許を手に入れることができました。

しかし、教習中に詰め込みすぎたのか、書きはしていたものの、疲れのせいで中々話がまとまりませんでした。

そして、今日やっと最後まで書き上げて、追加した次第です。

まあ、こんな感じの理由で、更新が遅れました。

その辺り、どうかご了承ください。

では、また次回で！

第九話（前書き）

やつとできたので更新します。

今回は、巴蜀での話です。

どんな出会いがあるのか？

では、どうぞ……

第九話

蒼華 Side

私は今、洛陽にある宮殿の中庭の東屋で、お茶を飲んでいた。

「…………はあ…………」

そう溜息を吐きながら、私はお茶を啜った。

と、そこには……

「劉宏様…………」元にいらっしゃいましたか

背後から声をかけられたので、振り向くと、赤い髪の女性が立っていた。

「火穂…………もう。一人つきりの時は、真名で良いつて言つてゐるじゃない」

そう言つて、赤い髪の女性　姓を何^か、名を進^{しん}、字を遂高^{すいこう}、真名を火穂に真名を呼ぶよつて言つた。

「いえ、どこで誰が聞いているか分かりませんので」

火穂はそう言つて、真名を呼ぶことを拒否する。

「あら、やつ」

前々から言つてることだが、いつも呼んでくれないので、私は適当に流す。

「なら、お茶を飲むのに付き合つてくれない？一人で暇してたのよねえ」

私はそう言つて、火穂をお茶に誘い、座るよつ促す。

「は。では、お付き合つさせていただきます」

火穂はそう言つて、私の対面に座る。

そして、私は座つた火穂にお茶の入つた器を手渡す。

火穂はそれを手に取り、お茶を啜り始めた。

そうして、しばらく。お茶を啜る音と、風の音しか聞こえなくなつた。

「紫電達を呼び戻すための準備……どれだけ進んでる？」

そう言つて、私は火穂に今現在、彼女が行つていることの進行度を聞く。

その言葉を聞いて、火穂は一度お茶を啜ると、話し始めた。

「一応、紫電様を迎えるための兵の準備は整いつつあります。また、その報を紫電様達に伝える準備も整つております」

「そう。あとは、紫電を呼び戻さなければならぬほどの出来事が

起これば……」

「はい。紫電様を正式に『』の洛陽に呼び戻す』ことが出来ます」

「そうね。それまで、火穂には苦労かけるけど…………」

「そんなこと。紫電様のためならば、どんなことでもやつてみせます」

「ふふ。そう。ありがとう」

「いえ」

そう言つて、お互ひの顔を見て笑いあつ。

何進こと火穂は以前、紫電率いる『天龍』に所属していた武将四人の内の一人である。

彼女は最初、私の夫一人の内の一人の何氏のおこぼれで、將軍となつた。

その頃の彼女は、とても高慢で、いい加減な人物だったが、軍部で紫電に遭い、彼の武や人柄に惹かれ、改心していった。

そして、『天龍』が発足した時、自身から所属を希望し、紫電に認められ、『天龍』に所属することになった。

しかし、六年前の張讓により紫電が謀反の疑いをかけられ、紫電が

洛陽から追放され、『天龍』も解散させられた事件で、彼女だけが洛陽に残され、張譲の策略により、大將軍の地位に就かされた。

そして、現在、外部に能無しという偽の顔と張譲の傀儡という演技をしながら、紫電を呼び戻すための策を、私や、紫電と交流があった私の夫の一人 何進のこと何氏と王美人と協力し、張譲に気取られないように着々と準備を整えていた。

そして、残るは、紫電を呼び戻すに相応しい出来事……漢の危機に関する出来事が起これば、呼び戻すことが出来るところまで、準備は進んでいるのだった。

蒼華 Side Out

紫電 Side

そうやって、劉宏こと蒼華と何進こと火穂が、二人でお茶をする時。

紫電は、益州が巴郡の永安といつ町に来ていた。

「ここが永安か。ここは確か、嚴顔が治めてるって話だつたな」

そう言って、先程手に入れた情報を確認しつつ、町並みを見て回っていた。

「…………嚴顔か…………史実では、結構な歳だった筈だが……この世界ではどうなのがね？」

そつ言つて、これまで出会つたり、見たりした、三国志で有名な武将達を思い出していく。

「馬超の親である馬騰が、あんなに若かつたから、もしかしたら、思つてるよりも若いかもな……」

そう言いながら、色々考えつつ、色々な店を冷やかしながら歩いていた。

すると、前の方に二人の妙齡の女性と一人の少女が困った顔で立っていた。

一人は、青味がかつた銀色の髪に、浴衣の胸元を大きく開き、少し着崩した様な感じの服装で、腰に酒が入つていそうな壺をぶら下げている。

もう一人は、紫色の髪に、大胆なほど大きくスリットが入つていて、胸元の開いた服装を着ており、母性あふれる顔立ちをしている。

最後の一人は、黒い髪に白いメッシュの入つた前髪で、黒を基調とした服に、ホットパンツをはいでいる。

さらに、その三人の特徴に、「胸が大きくて美人」も追加される。

紫電は、そんな三人が困つてている顔をしているのに気付き、なんとなくほおつて置けなくなり、その三人に近づいて行つた。

? ? ? Side

「どうかなさつたんですか？」

不意に掛けられた声に、私は振り返った。

其處にいたのは、私の髪の色より深い紫髪の青年だった。

表情や声音から、軟派ではないことがわかる。

「何だ、貴様は？」

「失礼。俺は旅をしている者で、今は雷霸と言つ。なにせもう困りのよつで……良ければ、お手伝い致しますが？」

そつとこのか高貴な雰囲気を漂わせた感じの声で、私たちの手伝いを申し出してくれた。

「…………ありがとうございます。実は」

私は、少し悩んだ後、この青年 雷霸さんを信じることにし、隣で見ていた友 姓を厳げん、名を顔がん、真名を桔梗ききょうに目線を送り、彼女も異論がないことを確認した後、雷霸さんに事情を話した。

? ? ? Side Out

紫電は、三人に話しかけ事情を聞いた。

三人の名前が、黄忠、嚴顔、魏延と聞き、内心すく驚いた。

以前、馬騰と会つた時も驚いたが、それでも黄忠、嚴顔の一人がこんな妙齢な美女とは思わなかつたからである。

(それにこの時期に、こんなところに黄忠と魏延が居るとはな……)

色々と疑問はあるが、それはさておき、三人の話を聞くと、黄忠の娘さんが少し目を放した隙にどこかに行つてしまつて、三人で探しが見つからないと言つのだ。

ふと見ると、紫髪の女性 黄忠の手に赤紫色のリボンが握られていることに気付いた。

「それは？」

「娘が愛用している髪留めですわ」

愛用していると書つことは、長い間身に着けていたということです。

「愛用していると書つことは、長い間身に着けていたということですかね？」

「やうじやな。それがどうかしたのか？」

不思議そうに問う銀髪の女性 厳顔の言葉に意味深な笑みを向けた後、黄忠に向き直つた。

「それを少し貸していただけないでしょうか?」

「?構いませんが……どうするのです?」

「娘さんが愛用していたところの髪留めに付着している氣を追います」

それを聞いて三人は少し驚いたような顔をしたが、すぐに黄忠は紫電にその髪留めを手渡した。

紫電は、それを受け取ると、己の氣を集中し、その髪留めについている黄忠さんの娘さんの氣を探り出した。

紫電 Side Out

厳顔 Side

儂は自分の目を疑つた。

この田の前の青年が今やつているのは、己の氣で、璃々の微弱な氣を探つてゐると言つのだ。

その証拠に、璃々の髪留めを持っている手に紫色の氣が集まつている。

隣の親友　名を黄忠、字を漢升^{かんしょ}、真名を紫苑も、驚いている。

儂の弟子こと名を魏延、字を文長^{ぶんぢょう}、真名を焰耶は、氣というものが珍しいのか、覗き込むように見てているが、あんまりわかつてはいなにようだ。

しかし、儂にはわかる。

こんなこと、並みの氣の使い手では到底出来ない。

暫し時間がたつた後、彼が閉じていた目を開けた。

「この町には、居なによつです。きっと、あっちの林に居ると思われます（実際、その林から氣が途切れるしな）」

そうこうで、青年　雷霸は、歩き出した。

「お、おーー待てよー。」

驚いて固まっていた儂と紫苑は、その焰耶の声で我に返り、その声につられて、儂らも慌てて付いて行つた。

嚴顔 Side Out

紫電 Side

「なあ、ホントにこんなところに居るのか？」

「（）心配なく、だんだん近づいているから」

魏延の疑問に答えながらも、黄忠の娘さんの氣を追つ紫電。

微弱すぎて、時々見失いそうにもなつたが、何とか追つて行く。

と、その時、

「た、たすけて～！」

そういう子供の叫び声が聞こえた。

四人は、その声が尋常じやないことを悟り、急いでその叫び声が聞こえた方向に向かった。

そして、しばらく走つた紫電たちの田に入ってきたのは、今にも虎に襲われそうな少女の姿だつた。

「璃々^{りり}！」

黄忠がそんな様子の自分の娘を見て悲痛な声を上げた。

「くわつー。いうなれば、ワタシが……なー？」

「「ー？」」「

魏延がそう言つた瞬間、三人の横から紫の風が飛び出して行つた。良く見るとものすごい速度で走つて行く紫電の姿だつた。

そして、三人は見逃さなかつた。

彼の通つて行つた場所に紫色の雷が残つていたことに。

そして、紫電は、

（あの虎は、それなりに大きい。と、言つことはそれなりの重さがあるか……なら、アレが良いか）

走りながら、そう考へ、少女と虎の元に急いだ。

そして、虎が少女に飛びかかるつとした瞬間、

「獅子戦吼！」

「ドガアアアアン！！」

紫電の突き出した両手の平から獅子の顔の形をしたものすごい氣が飛び出し、虎を吹き飛ばした。

「大丈夫か？」

そう言つて、少女に近寄つた。

「……え？」「うん……」

少女は、田の前で起じつた出来事に驚き、しばりくせりうとしていたが、紫電に話しかけられ、我に返つた。

そして、紫電の走つてきた方から黄忠、嚴顥、魏延が走つてきた。

「璃々……」

「お母さん……」

そして、黄忠は自分の娘に近寄り、抱きつき、無事なことを確認した。

「璃々……璃々……ああ、良かった……」

「ひっく……おかあさん……『ごめん……なさい……ふええええん！怖かったのぉ……』」

そうして、一人が抱き合っている間にも、虎は起き上がり、警戒しながらひびきを伺っていた。

「まだ、やるか？」

紫電がそう言った瞬間、彼からものすごい殺氣と霸気が噴出した。

そして、それを感じ取った虎と紫電以外の四人は、彼の背に龍の幻を見た。

「まだ、やるってんなら……」

そう言つて、紫電はしばらぐ間を置き、

「！」の俺が相手になる……

「ウー！」

彼がそう叫んだ瞬間、更なる氣の圧力が加わり、虎は一寸散にそこから逃げさつて行った。

そうして、しばらく沈黙が続いたが、紫電が溜息を吐き、黄忠たちの方に向き直った。

「娘さんは大丈夫ですか？」

紫電にそう聞かれ、その声で黄忠たちは我に返り、紫電に答えた。

「はい。あなたのおかげで、無事ですわ」

「そうですか。それは良かつた。……それじゃ、俺はこれで

そつと置いて、紫電はその場から立ち去ろうとしたが、

「どこに行かれる？ 雷霸……いや」

「……『紫電の龍』殿」

と言つて、嚴顔と黄忠の声に足を止めた。

魏延は、『紫電の龍』という名を知らないので、頭に疑問符を浮かべ、頭を傾けていた。

「あらり。気付かれてましたか

そう言つて、苦笑いのまま黄忠たちの方に向き直る。

「どうあえず、戻りましょうか。また、いつあの虎が来るか分から
ないので」

そう言つて、再び歩き出した紫電。

その後うご、黄忠たちも続く。

そして、その途中、紫電は彼女たちに問つた。

「なぜ、俺が『紫電の龍』だと？」

「まず、「彼の者が通つた後には、紫電が残る」……これが一つじ
やな。先程、虎に襲われていた璃々の方に走つて行つた時、その後
にはまさに言葉の通り、紫色の電が残つておつた」

紫電の質問に、まず、嚴顔が走つて行く時の状況を説明した。

「そして、次に虎に向き合つた時、少なくとも私は、あなたの背に
龍を見ました」

黄忠がそう言つて、嚴顔と魏延の顔を見ると、二人ともその言葉に
頷いた。

「それに貴殿の名は、大陸全土に響き渡つていたからの

「だから、少なくともこの場では、私と桔梗 嚴顔の耳には届いて
おりましたわ」

二人の言葉に紫電はなるほどと思つ。

そして、思つた。自分の名には、自分が思つてはいる以上の重さがまだ残つていたのだと。

「そこまで、分かつてはいるのなら、隠してはいる必要はないですね。そうです。俺の本名は、以前『紫電の龍』と呼ばれていた、姓を雷、名を魔、字を霸龍と言います」

そう言つて、四人に本当の名前を打ち明ける紫電。

「そんな仰々しいしゃべり方をせんでも良い。実際、御主は儂よりも地位は上……というか、義理とはいえ、皇帝陛下の弟君じやかの」

「それはそうですけど……」

厳顔の言葉に紫電は、黄忠の方を見るが、黄忠も厳顔の言葉には賛成のようで、笑顔でこちらを見ていた。

「わかった。これでいいか?」

そうして、諦めたのか、紫電は、そう言葉の調子を変えた。

「つむ。それで良い」

「ええ。何か自然な感じになりましたわ」

そう言つて、二人は笑顔で答えた。

と、ここで、魏延は先程から疑問に思っていたことを口にした。

「あ、あの、桔梗様。『紫雷の龍』とは一体何なのですか？」

その言葉に、嚴顔は魏延の方を向き、少し考えて「ああ」と一つ手を叩いた。

「やう言えば、焰耶は、まだその頃は小さかったの。なら、話したほうが良いの？」

そうして、嚴顔が魏延に、昔、『紫雷の龍』がどのよつなことをしたのか、話し始めた。

紫電は、それを聞いている間、昔のことを思い出していた。

しばらくして、嚴顔の魏延に対する『紫雷の龍』の話が終わり、一行も町に着いた。

そして、話を聞いた魏延は、ふと疑問に思つたことを口にした。

「桔梗様。そうなると、ここには漢の大犯罪者になるのでは？」

魏延がやつて言つと、嚴顔と黄忠は、少し難しい顔になつた。

「形式上ではそつだが、実際はどうなのか？のう、雷魔よ」

そつとつて、紫電に話をふる。

紫電は、しばらく考えた後、

「……とりあえず、俺は、その時、張譲に嵌められたと思った。なぜなら、その事件の以前から、張譲は、俺を洛陽から追放しようとして色々やってたからな」

その言葉を、始まりとし、その時に何があったのかを厳顔たちに話し始めた。

そして、その紫電の話が終わった時、話が分かっていない璃々と紫電を除いた三人は難しい顔をしていた。

「まさか、洛陽でそのようなことが起つていたとはのう」

「ええ。流石の私も驚きましたわ」

「…………雷魔殿。そんなこととも知らず、先程は失礼な発言をした。すまん」

そう言つて、魏延は頭を下げた。

「いひつて。実際、形式上だが、俺はある意味大犯罪者になつてゐしな」

紫電は、その謝罪を軽く流し、微笑みながらそう言った。

「雷魔殿よ……洛陽には、戻らないのか？」ここで言つのもなんじゃが。今の漢は廃れておる。そろそろ貴殿の力が必要になるのじゃあるまいか？」

「……俺は、今はまだ戻る時期ではないと思つてゐる」

紫電のその言葉に、厳顔と黄忠は「え？」と言ひ顔をする。

「だが、いづれ絶対戻る。その為にも、今こゝして各地を回つて、色々な情報を手に入れなければならない。だから、諸国を旅して、色々な情報を手に入れ、洛陽に戻つたときに、それが役に立つようにする。それが今の俺の旅の目的だ。そして、時が来たとき。『紫電の龍』は再び天へと舞い上がる」

「「一.?」」

「つ……！」

一瞬、最後のその力強い言葉と共に発せられた霸氣に黄忠と厳顔の二人は見惚れ、魏延は、圧倒された。

特に黄忠と厳顔は、まるで女として強い雄に魅せられる、と言ひ様な本能的なモノが働いた感じであつた。

そして、紫電はそれを言い終わると三人に振り向き、微笑んだ。

「ま、そんな気難しい話は、ここまでにしておけり。さて、それも

る陽も傾いてきたから、俺は宿に行くことにするよ。また、縁があれば会おう

そう言って、踵を返す紫電に、黄忠と厳顔の一人が待つたを掛けた。

「まだ、娘を助けていただいたお礼をしておりませんわ。ありがとうございます」といいました。そして、次から私のことは紫苑しづおんとお呼び下さい

「御主ほどに、立派な御仁おとねは中々おらん。それに儂の親友の娘を救うてくれたし、今度会つたら儂のことも桔梗ききょうと呼ぶが良い」

「……雷魔殿。先程の無礼の侘びわびといつては何だが、ワタシのこととも、今度会つたら焰耶えんやと呼んでくれ」

三人のその言葉に少々驚きながらも、紫電は微笑みこう言った。

「わかつた。三人の真名預からせてもらひ。んじや、俺のことも紫電と呼んでくれ。それじゃ、また会おう。紫苑、桔梗、焰耶」

「はい。また、会いましょう。紫電さん」

「つむ。その時は、一緒に酒でも飲もう」

「次に会つた時は、ワタシと手合させ願いたい」

「バイバイ！お兄ちゃんー！」

そう言って、四人は自分の帰る場所へ。

そして、紫電は宿に向かって歩き出した。

焰耶 Side

去り行く紫電殿の背中を見送った後、ワタシは先程から震えて止まない自身の手を見つめた。

「あら？..どうしたの、焰耶ちゃん？」

「ん？..どうしたんじや、焰耶」

その桔梗様と紫苑様の言葉にハツと我に返り、ワタシは一人に思っていたことを口にした。

「…………桔梗様。ワタシは、自分の武は接近戦に持ち込めば、桔梗様ともいい勝負が出来ると思っていました。少なくとも力だけなら上回っていると思っていました。自分の武は、ある程度上位に入つていると自負していました」

そう言つて、私は目を瞑り、先程の紫電殿の言葉を聞いた場面を思い出す。

『そして、時が来たとき。『紫雷の龍』は再び天へと舞い上がる』

その時の紫電殿の、姿が、言葉が、霸気が、ワタシの脳裏に焼きついて離れなかつた。

「初めてでした。霸気だけで、言葉だけで、姿だけで、こんなにも

「気圧されたのは、自分との実力の差を思い知られたのは……」

「それで？」

「…………」

その言葉に、ワタシは少し考え、心の奥底から「自分はどうしたいのか？」を引き出した。

「今のワタシでは、足元にも及ばない。それどころか、目の前にすら立てない。だから、ワタシはもつと上を目指すために、もつと強くなりたいと思います。いつか、紫電殿を超えるぐらいに強く！」

そう言つて、ワタシは拳を握り、顔を上げた。

焰耶 Side Out

Another Side

(ほひー！)

(まあ！)

桔梗と紫苑は、顔を上げた焰耶の目を見て、嬉しくなった。

最近の焰耶は、天狗になっているといつも、自分の武に過信しきっている節がちらほら見受けられた。

桔梗は、自分では治りそうに無さそうだつたため、紫苑あたりにしづき倒してもらおうかと思つていていたくらいだ。

だが、今回、紫電を見ただけで、こんなにも良い方向になつてしまつとね思つてもみなかつた。

「（まつたく、紫電殿には感謝してもしきれんのう） そつか」

「はーー。」

「良い顔になつたわね。焰耶ちゃん」

焰耶の変化に、紫苑と桔梗の二人はとても嬉しかつた。

「とにかく、焰耶よ。やつと言えば先程、儂に接近戦ならば勝てる等とせざつておつたな？」

「…………え？」

少しうるさい利いた声の桔梗に、焰耶はそんな恐れ多いことを言つたかと思つて、先程自分の言つた言葉を思い出す。

『「ワタシは、自分の武は接近戦に持ち込めば、桔梗様ともいゝ勝負が出来ると思つていました。少なくとも力だけなら上回つていてと思つていました。』

「（…………しまつた…………勢い余つて、言つてしまつていた…………しかも、かなりはつきりと……）あ、のですね、桔梗様。あれは、なんと言つか、言葉の綾と言つやつとして……」

冷や汗をかき、じぶんもじぶんになりながら、焰耶はその場を取り繕おうとしている。

しかし……

「ふふふ。そんな謙遜するな。帰つたらしつかり、みつちりと儂が接近戦なぐりあいを教えてやるからの」

（い、今、桔梗様が言つた「接近戦」が、「殴り合い」に聞こえたのは氣のせいだろうか？）

焰耶の努力むなしく、桔梗は目が笑つていらない笑顔で、焰耶の言葉をバツサリと切り捨てた。

考えてみて欲しい。自分の武器『鈍碎骨じんさいこつ』並みの重さの武器を持ち、自分より軽やかに動き回り、武器に備え付けられている杭を打ち出し、それから生まれる反動に、連射しても耐えられる、握力、腕力、それに脚力もあり、長年培つてきた戦の勘もある桔梗と、最近まで、ほとんど戦に出たことがなかつた、ひよつこの焰耶が戦つて勝てるのかと。

答えは、断じて否だ。

「い、いえ。しばらくは自分なりの鍛え方をしてから教わろうつかなあ、と……」

だから、大量の汗をかきつつも、表面上は遠慮がちに、内心では必死になつて断つうとした。

「遠慮するな。そちら辺も踏まえて、儂と殴り合おうではないか」

だが、やはり容赦なくバッサリと切り捨てられた。

しかも、焰耶には、副音声で全く違う次の言葉に聞こえていた。

「ひるやご。つべこべ言わずに殴らせろ」と。

「あ、あはははは…………はい…………（ワタシは、明日の陽を持めるだ
らつか……）」

「ねえ、おかあさん。焰耶お姉ちゃん。真っ白になつておつ。」

「あらあら。焰耶ちゃんも大変ね」

「ふふん。楽しみじゃのう」

桔梗の言葉を聞いた焰耶は真っ白になつておつ。

そんな焰耶を見て、璃々は不思議そうな目をむけ、紫苑は何か楽し
そうであった。

このしばらく後、城に戻つてすぐに、焰耶は桔梗に、まるでボロ雑
巾の様になるまで、しばき倒されていたのを、偶々、近くを通つた
兵に目撃されていた。

紫電は、紫苑、桔梗、焰耶の三人と別れた後、宿に入り、今後の道筋を決めていた。

（次は……ここからだと、成都と荊州という道があるが、成都はこの町の人の話によると、予想通りみたいだから……なら、荊州の方へ行くか）

そう考へ、しばらく悩んだ後、納得がいったのか一つ頷き、地図を丸め、荷物の中に入れた。

そして、寝台に入り、目を閉じ、夢の中へと旅立つていった。

翌日、陽も高くなつた頃、紫電は、永安の町から出て、指笛で白竜を呼び、乗つた後、そのまま荊州への道のりを進んでいった。

第九話（後書き）

どうだったでしょうか？

今回は、熟（トーストス）（汗）……み、妙齡な一人である紫苑、桔梗とブラックジャック娘（？）（笑）と言われている焰耶との出会いでした。

また、洛陽でも少し動き始めました。

これからどうなっていくのかは、これから話の中で……。

さて、次回は南陽での話になります。

どうなるのか？次回もお楽しみに。

オリキャラ紹介（前書き）

続いて、オリキャラの紹介です。

今回は、何進こと火穂と劉宏こと蒼華の紹介です。

では、どうぞ。

オリキヤラ紹介一

姓 : 何進
字 : 高
真名 : 火穗

性別 : 女

年齢 : 26歳

身長 : 169cm

体重 : 52kg

武器 : 鷹翼（長剣）

能力値：武力5、統率力4、知力2、政治2、魅力5

天龍隊が発足する少し前に、弟の可氏のお零れで軍に入り、將軍となつた女性。その後、官位を上げていくが、その軍部で、紫電と出会い、彼の人柄と実力を目の当たりにし、彼の下に付き、『天龍』に所属することになった。

しかし、その二年後に起きた事件で、『天龍』が解散した後、十常侍の策略により、大將軍の地位に就く。『天龍』では、主に前衛を担当していた。

現在は、劉宏こと蒼華の助けの下、色々手をまわして、紫電を帰還させる準備を行つてゐる。

容姿

ある人物には劣るもの、それでも相当な美人で、黙つていれば相当モテる。しかし、強気で勝気な性格が災いして、言い寄る男はそうそういない。あえて言うなら、彼女の本質を見抜いている紫電ぐらいである。髪は、黒みがかつた赤色で、ウェーブがかかってい

る。長さは肩にかかるぐらいの長さである。目は黒い。

体型は、グラマラスな体型である。

性格

周りには、傲慢で我慢という風に思われているが。これは、紫電が復帰するまでの偽りの顔として使っている。本来は、強気で勝気だが、心優しく、律儀で、何事にも一生懸命取り掛かることのできる性格である。

服装・装備

赤を基調とした物を着、下は現代で言うスカートの下にスパッツをはいたような格好をしている。

戦闘では、その服装の上から胴当てと籠手、それに足甲を装備して、長剣『鷹翼』を使って戦う。また、かなりの武を持ち、一人で何百人の敵を相手にするほどの実力を持っている。その時の姿から『炎鬼^{えんき}』と呼ばれる。武だけでは、『天龍』では一番の強さである。

・陣形

蜂矢陣、偃月陣、横陣

・奥義

LEVEL 1・何進の偽顔

計略、敵士氣 -

敵が認知せし自身の顔は、全てにおいて偽計なり。

LEVEL 2・豪炎烈焦斬

突撃、火刑、味方攻撃 +

彼の一撃は、全ての敵を根絶やしにするほどの威力を持つ。

LEVEL 3・炎鬼の突撃

突撃、火刑、味方士氣 +、味方攻撃 +、敵士氣 -

炎鬼による『天龍』火の隊の突撃。この突撃は、火の如く全て飲み込む。

姓：劉りゅう
名：宏こう

字：なし

真名：蒼華そうか

性別：女

年齢：33歳

身長：149cm

体重：45kg

能力値：武力3、統率力4、知力3、政治3、魅力4

漢王朝第十二代皇帝。

紫電が家族共々、巨熊に襲われたときに出会った女性。恋姫の世界で、一番初めに出会った、史実での有名人物。紫電達が巨熊に襲われた日に、熊退治に近くの村に来ていた。そして、そこで熊と戦い、逃してしまい、紫電の両親が亡くなつてしまふ事になった。そのことに負い目を感じ、まだ、幼かつた紫電を義姉弟として迎え入れ、一緒に生活することにした。その時の年齢は、十五歳。

その後、紫電に本当の姉弟のように接し、彼が部隊を持つとき等に、自身が手助けをしたりしている。

しかし、六年前の事件の時、張譲に丸め込まれたが、一応、反論

し、紫電の計を軽くした。しかし、結局、紫電を洛陽から追い出すことになってしまふ。この時に自身の力不足を痛感し、色々後悔をした。

だが現在、何進こと火穂と、二人の夫と共に、紫電を洛陽に帰還させるための計画を実行している。

容姿

綺麗な部類の顔立ちをしており、その中に、少し子供っぽさもある。髪は長髪でストレート、色は濃い桃色である。

体型は、スレンダーな感じ。

性格

明るく、上品だが無邪気さも備えており、動くことが大好きである。実際、皇帝になる前は、色んなところに遊びに来つたりしていた。

服装

昔、皇帝になる前は、動きやすい服装だったが、現在は、煌びやかな服を着て、皇帝の服装になつてゐる。

オリキャラ紹介（後書き）

以上です。

天龍の仲間の四人の武将の内の一人は、何進でした。

これからも仲間のオリキャラを紹介していきます。

楽しみにしていてください。

では、また次回。

第十話（誕生日）

でれもしたので、投稿いたします。

今回な、南陽でのお話です。

いいじめ、いんな状況があるのか？

では、どう。

第十話

けいしゅなんよう
荊州南陽。

「これは、現在袁術が治めている領土である。

そして、紫電は現在、この南陽の町に着き、宿屋を取つて、町並みを見て回っていた。

例により、白竜は町の外で待機している。

「ここが、袁術の治めている南陽か……暴政とまではいかないが、ちゃんととした政治を行つていそうには見えないな……モグモグ」

そう言いながら、あまり賑わっているとは言い難い町並みを見ながら、先程出店で買った肉まんを頬張つていた。

そして、しばらくの間、旅人として町の人から袁術の評判などを聞きまわつた。

「やはり、袁術の評判は高くないな。しかし、やはり外史だからなのか、もつすでに、孫堅そんけんが死亡しほうしていて、孫策そんさくが袁術の密将になつているとはな」

そう言つて、先程町の人々から得た情報を整理していた。

「しかし、美羽みうのやつ、麗羽れいは共々、あれだけ学問を教えてやつたの

に全然活かせてないじゃないか

そつまつて、昔のことを思ひ出しつつ、文句言つ紫電。

彼は、昔、両袁家の親に頼まれ、袁術こと美羽と袁紹こと麗羽に、一時的だが、『天龍』の仲間と一緒に、学問を教えた時期があった。その時に、美羽と麗羽の両方から、真名を許してもらつていたりしていた。

「やはり、教えた期間が短すぎたか？」

そつして、教え子のだらしなさに、色々考へつつ、町を回つている
と……

「…………ななの～…………」

震える声と共に、金髪の少女が前の方から歩いてくるのが見えた。

「あれは…………美羽じゃないか。なんで、町に出てきたんだ？」

その少女は美羽だった。

町の民によると、美羽は、あまり街に出でこないらしい。なので、その情報のこともあり、不思議に思い、紫電は美羽に近づいていった。

た。

「ななのお～…………ビービーじゃあ～…………？」

その間にも、誰か 多分側近 の名前を呼びながら、右往左往して、
美羽は泣きそうになつていた。

「おい。どうしたんだ？」

「ひいっ！？」

突然話しかけられたことに驚いたのか、変な声を上げてちらを見上げてくる。

「な、何じゃお前はー？お主の様なものが……わら……わ……に……」

そう最初は強がった風に言う美羽だったが、紫電だと気付いたのか、最後の方は言葉がなくなっていた。

「よう。美羽。元気だつたか？」

「…………先生…………？」

紫電は、片手を挙げ、軽い挨拶をした。美羽の方は、まだ驚いているのか、未だに呆然としている。

「どうしたんだ、美羽？町の人の話だと、余り城外には出てこないつて話だった……」

「ドン！」

「…………」

紫電が言い終わる前に、美羽が紫電にぶつかって来た。

「先生！先生！…ホントに先生じゃなー？幻ではないのじゃなー？」

そう言って、泣き叫ぶ美羽を少し驚いた顔で見下ろす紫電。

それを聞いて、周りの人たちが「なんだ？なんだ？」と集まり始めた。

「ああ。そうだよ。といあえず、落ち着けるところで話さうか」

そう言って、美羽の頭を撫でつつ、移動することを促す紫電。美羽は、その言葉に一度頷き、紫電に手を引かれ、落ち着いて話の出来る場所へ移動した。

それから、少しづつ、ちょうど良い茶店があつたので、そこに入つてお茶を飲み、落ち着いたところで話をすることにした。

「……で、あそこで何やつてたんだ？」

「そ、それは……」

紫電は、美羽がなぜあんなところで泣きそうになっていたのか気になり、彼女に聞いたが、彼女の返事は、ハッキリしたものではなかった。

ついでに言えば、田がものすく泳いでいる。

「……側近の誰かと出かけたは良いが、美羽自身が何かに惹かれ、その人から離れてしまい、余り城外に出したことのない美羽は、道に迷ってしまい、そして、そのことに気付き、側近の人を呼んだが、誰も来ないので、泣きそうになったところに俺が声をかけた……そんな感じか？」

「…？」

紫電のその推理に、「なんでわかった！？」と言つた様な顔を向ける美羽。

「まあ、お前と麗羽は行動が読みやすいからな」

紫電は、美羽のその顔にわかつた理由を教えた。

「わ、妾わらわと麗羽姉さまは、読みやすいのか……」

そつ言つて、少し落ち込む美羽。

「まあ、俺は、そんな素直なお前らは、嫌いではないがな」

紫電は、そつ言つて、美羽の頭を撫でた。

美羽は、少し揺つたそうにしていたが、それを受け入れた。

それから、少しの間、穏やかな雰囲気が流れた。

「ところで、先生。なぜこの南陽に？確か、洛陽を追い出されてから、行方不明じやと聞いたのじやが？」

そう言つて、紫電に疑問の眼差しを向ける美羽。

「ああ。それはな…………」

そこから、紫電は美羽に、これまでの経緯を話し始めた。

それから、じぱりとして、紫電の話が終わると、美羽は少し難しい顔をしていた。

「そんなことが洛陽であったのか…………しかも、六年前とは、妾は何も知らんかったのじゃな…………」

そう言つて、少し俯く美羽。

「良いんだよ。お前はまだ小さかつたんだから。知らなくても」

そう言しながら、再び美羽の頭を撫でる。

「それよりもだ。この南陽を見て思つたんだが…………美羽。なんで、昔教えたことが反映されてない？」

美羽は、その言葉を聞いて、暗い顔をする。

「や、それはじゃな…………」

そう言つて、今度は美羽がこれまでの経緯を話し出す。

「……………そうか。袁逢殿が五年前に亡くなり。それから、美羽はその後を継いだが。お前の周りの老人たちが好き勝手している…………と」

美羽の話を聞き、その情報を整理している紫電。

「しかも、河北では、袁成殿も亡くなっているとは。これは、麗羽の方も、見に行かなきやな」

そう言つて、じばりじばり考えていた紫電は顔を上げた。

「……………といひで、美羽。孫策を密将にしてるつて話だが？」

「ああ。それはのう……」

そして、今度は孫策を密将にした経緯を聞いた。

美羽の話によると、袁逢と孫堅は昔から交流を持つており、それに仲が良かつた。しかし、袁逢が亡くなつてからは、その交流も途絶えてしまつたそうだ。

そして、孫堅が、劉表との戦いで、亡くなつた時、美羽は、世話になつた孫堅の娘、孫策を助けるために同盟を組もうと言つ書簡を自ら書き、送ろうとした。だが、その書簡を、袁逢が亡くなつてから、好き勝手していた文官のかんいん一人の韓胤により破り捨てられ、全く違つ「傘下に入れ」と言つ文に差し替えられ、それが韓胤の部下

により届けられたらしい。

最初、それを美羽は韓胤に問い合わせたが、韓胤は、「これまでの経験を活かし、のらりくらりと言い逃れてしまったそうだ。」

それからと書うもの、美羽と韓胤との仲は、険悪な雰囲気になってしまい。実質、美羽は、政治などには手を付けさせてもらつていないと書うことだった

だが、謁見などは美羽がやつてているため、美羽は阿呆の子を演じているといつ。

その話をしていた時、美羽は目に涙を溜めていた。

「なるほどな。だから、美羽は町にも出てこなかつたと言つわけだな」

紫電のその言葉に、美羽は、俯きながら「クリと頷いた。

（……袁逢殿と袁成殿、それに孫堅の死は……何か裏がありそうだな……この三人は、漢の中でも力のある三人だ……しかも、袁逢殿が死んだのは、俺が追放された翌年か……ということは、誰かに謀殺されたか？そして、他の一人も……）

そつやつて、紫電は思考の海に入り、しばらく沈黙が続いた。

すると、茶店の外から美羽を呼ぶ、声が聞こえた。

「美羽様～？ 美羽お嬢様～？ どこですか～？」

その声を聞き、美羽と紫電は外に目を向けた。其処には、現代でいうバスガイドのような格好をした女性が辺りをキヨロキヨロ見ながら、美羽を探していた。

「七乃！」

美羽は、その女性を見て、そう叫んだ。そして、そのまま店の中から飛び出していった。

紫電は、その様子を見て少し微笑み。机の上に勘定の金を置いて、美羽の後から外に出た。

「七乃！…」

「…お嬢様！」

そう言って、美羽は女性に抱きついた。女性は、急に抱きつかれて一瞬驚いたが、それが美羽だとわかり、抱きしめた。

「ああ、よかつた。お嬢様が急にどこかに言つてしまわれて。七乃是心配したんですよ～？」

美羽は女性にそう言われて、少しバツが悪そうな顔をした。

「そ、それは、七乃が悪いのじゃ」

そう言って、見栄を張る美羽。

それを見ていた紫電は、少し苦笑いをした。

そして、女性は美羽が走ってきた方を向いて、やつと紫電に気が付いた。

「あ、あの。もしかして、あなたがお嬢様を……？」

女性にそう聞かれ、紫電は、居住まいを正して、自己紹介を始めた。
「はい。私は、雷覇と申します。先程、その子が迷子になつているのを発見して、一緒にあなたを探していました」

「そうですか。それは、どうもありがとうございました。私は張勲と申します」

紫電の言葉に、深々と頭を下げ間延びした感じの声でお礼を言う女性
張勲。

「美羽様を助けてもらつたお礼がしたいので、どうかお城に来てください」

張勲にそう言われたが、紫電は断りつとした。

のだが……

「そうじやな。先生は妾を助けてくれたのじや。じやから、城まで来て欲しいのじや」

美羽が言つたその言葉に、張勲が驚いていた。そして、紫電は退路を断たれた気分になつた。

「……先生？」

「そうじゃ。先生は、以前洛陽に行つたときに、妾に学問を教えてくれたのじゃ」

続く言葉に張勲は何かを考え、笑顔で紫電にこいつ言った。

「それなら、尚更城に来てください」

そつ言われ、紫電は逃げ道がなくなり、観念した。

「はあ……わかりました」

そうして、紫電は美羽と張勲に引つ張られるよつこにして、城に連れて行かれた。

それから、城に入った三人は現在、庭園の東屋でお茶をしていた。

「なるほど。あなたが六年前に行方不明になつた『紫電の龍』さんで、昔、お嬢様に学問を教えてくださいた方だつたんですね」

そつ言つて、張勲 真名を七乃（話をしている時に許してもらつた）は今聞いた話を整理していた。

「まあ、短い期間だつたけどな」

そつ言つて、肩を竦める紫電。

「しかし、今の南陽は袁逢殿が治めていた時より、廢れているな」

その紫電の言葉に、先程まで笑っていた七乃の顔に影が差す。

「はい。全てはあの男、韓胤のせいです」

そう呟つて、俯く七乃。

「あの男は、前々からそのような気がありました。そして、袁逢さまが亡くなられた直後に」

「好き勝手し始めたと」

紫電の言葉に「ククリと頷く七乃。

「それが本当なら、孫策は美羽のことを恨んでいるかもな」

その言葉に、これまで黙つて聞いていた美羽の顔が曇つた。

紫電はその美羽の顔を見て、少し考えた後、

「ふむ。そうだな。しばらくの間、俺がここに残り、これから美羽たちがどうすれば良いのか検討しよう」

紫電のその言葉に、七乃と美羽二人は驚いていた。

「と云つても、そんな長くいるつもりはない。そうだな……一週間。この期間の間、色々な情報を手に入れて整理しておく」

紫電は一人にそう言った。

その後、その提案を一人は快く受け、紫電は一週間の間、美羽の城で過ごすことになった。

第十話（後書き）

以上です！

どうだつたでしょ？

この話では、袁術こと美羽は、余りお馬鹿ではありません。
天然ではありますけど（笑）

なぜ、こいつ扱いにしたのか……？

単に美羽が好きだからです（笑）

「ホン。それはさておき。

期間限定ではあります、美羽の許に居座る事になった紫電。

次回は、どんな事になるのか？

お楽しみに～

第十ー話（前書き）

ふう……やつと出来上がりました！

いや～……課題は溜め込むものではないですね（苦笑）

それなりにねえ、今回は美羽の城に滞在中に起きた出来事です。

それは何か？

でせ、ビハ～…！

第十一話

紫電が美羽の城に、一時的にだが、居座るよつになつてから四日目の事。

「ふむ……」Jの区域では「つか……」Jは……韓胤の息がかかりすぎる……」

そうつぶやきながら、紫電は手に入れた情報を確認していた。

「……孫策の方は……やはり有力な情報は手に入れられないか……」

そう言つて、大きく溜息を吐いた。

その時。

「ん?……でかい氣が玉座の間に向かっているな……誰だ?」

そう言つて、氣を感じた方を見ながら、目を閉じる。

「……感じたことのない氣だな……行つて確かめるか?……内密にこの城にいたせて貰つていいからな。玉座の間の天井裏から確認するか」

そう言つて、紫電は玉座の間に向かい、その前に来た瞬間に、天井裏へと入つた。

? ? ? Side

私は今、袁術に呼び出されて、南陽の城の玉座の間へとさへいた。

「で？ 呼び出した理由は何？」

「そいつて、私 姓を孫、名を策、字を伯符、真名を雪蓮 は 目の前に居る袁術を睨みながら呼び出された理由を聞く。」

「いむ。それはの……」

袁術は、そいつて、呼び出した理由について答え始めた。

要約するといつだ。

賊が現れたので、討伐してきて欲しいとのこと。

「ふ～ん……まあいいけど……賊ぐらい袁術ちゃんの軍でもじつに かなるんじやない？」

私はそいつが、袁術は……

「ふむ。そつなんじやが、何が起ころるかわからんのでな。精銳な孫 策の軍ならあつといつ間にかたづけてくれるじやろ、と思つたのじ ゃ」

そついつて、袁術は私たちに賊討伐を押し付けるよつた感じにして きた。

「やつですよ～。孫策さんの軍なり、賊ぐらこ簡単にやつつけられますよ～」

そう袁術の言葉に合ひの手を加えてくる張勲。

ホント、この主従は救えないくらい馬鹿よね。

「分かったわ。引き受けましょ。このお礼は、いつかたっぷりさせてもらひから」

そういつて、私は目を細めて、わずかに殺氣を滲ませながら袁術に笑顔を向ける。

するとその瞬間

ゾクッ！！

いきなり私の背筋に寒気が走る。強烈な殺気が放たれた時のような寒気が。

「！？」

私は、反射的に『南海霸王』の柄に手をかけた。

「へビうしたのじゃ、孫策？」

そう言つて、何も感じていないうちに袁術が私に問いかけてきた。

私は、ハツとなつて、袁術や張勲、そして、周りの袁術の配下共の様子を伺う。

周りの者達は、何も感じてないよつと思つ。

そこで氣がつく。この殺氣は、私のみに向けられていく」と。

そして、すぐにその殺氣はなくなつた。

「……なんでもないわ。じゃあ、準備があるから私はここで失礼させてもらひわね」

私は、そう言つて、早々に玉座の間から立ち去つた。

(あの殺氣はなんだつたのかしら? 感じ的には、私や^{さい}祭以上の殺氣だつたけど。あの場には、私と袁術とその側近達以外誰も居なかつた。なら、私の殺氣に気付いて誰かが? いえ、そんな様子、袁術や張勲、それに周りの者達から感じなかつた。じゃあ、誰が?)

そう先ほどの殺氣の正体を考えながら、自分の屋敷へと向かう。

(これは、袁術の周りを調べさせるしかないよつね……)

そつ思い、急いで自分の屋敷へと戻つた。

孫策 Side Out

紫電 Side

(ふむ。あれが孫策か……)

紫電は、天井裏からその謁見の様子を伺っていた。

そこには、薄桃色髪で、褐色の女性が美羽に対して、呼び出された理由を聞いている姿が見られた。

話の内容だと、その女性が孫策だということが分かった。

(なるほど。名に恥じぬいの霸氣を持っているな)

そう思い、続けて観察していると、何か不服な事があつたのだろう、賊討伐の件を了承し、顔は笑顔だが体から殺氣が滲み出していた。

(……ちょっとした殺氣でこの重圧か……さすがに美羽や七乃、それに周りの者達は気付いてないようだが……ちょっといたずらしてみるか)

そう言いながら、紫電はその顔をにやけさせながら、霸氣を少しだけ混ぜた殺氣を放った。

すると下に居た孫策は、その殺氣を感じ取ったのか、反射的にといった感じに、腰に佩いている剣の柄に手をかけた。

その様子に、不思議に思つたのか、美羽が孫策に問いかけている。

(ふむ。やはり王でもあり、一流の武人。動作に無駄がないな)

そう思いながら、紫電は殺氣を引っ込める。

そうすると、孫策は何もなかつたかのように振る舞い。適当に言つ

て、玉座の間を後にした。

紫電は、それを見送ると、自分の部屋に戻り、玉座の間での出来事について考え始めた。

その後、美羽が紫電の許に来て、一緒に遊ぶようにねだり、紫電はそれを快く承して、美羽と七乃と一緒にお茶をしたりした。

美羽が賊討伐のために孫策を呼び出してから三日後。

紫電、美羽、七乃の三人は南陽の城門まで来ていた。

「わざわざ見送りまでしてくれなくて良かつたのに」

そう言って、美羽と七乃を見る。

「いえいえ。お世話になつたんですから、これくらいはしておかないと」

そう言って、笑顔で答える七乃。

「そうじや。先生にはまた世話になつたからの」

美羽も笑顔でそう言つた。

「そつかい。さて、そろそろ行くつもりなんだが、その前に……」

そう言つて、真剣な顔になる紫電。その紫電を見て、一人も真剣な顔になる。

「俺が検討したことは、あくまでも予想だ。」これからどうなるか、正直分からん」

そして、少し間を置く紫電。

「だから、もし、ビルジョウもなくなつたら。俺のところに来い。お前達なら歓迎するよ」

やつぱり、紫電は少し笑顔になる。

「…………わかつたのじゅ。ビルジョウもなくなつたら、先生を頼るのじゅ」

「うふ。 むろしぬ」

そつ言いながら、紫電は美羽の頭を撫でる。

「さて、 じゅ、 やつぱり行くわ」

「つむ。 また、 会おうぜ」

「はい。 また、 いつか」

その一人の言葉を聞き、紫電は踵を返す。

その後、笛笛で白龍を呼び、その上に跨つて、走らせた。そして、地平線へと消えていった。

そして、美羽たちは、城へと戻つていった。

それから、しばらくして、紫電は次の町への道を地図で確認していった。

「さて、次は……と。」つからだと劉表が治めている襄陽じょりょうが近いか。
孫策はあるの時見たしな。それに美羽のところがあれだと、麗羽の方
も気になるな。これは北荊州から許昌、濮陽、そつから南皮に向か
つたほうが良いかもな」

そうして、紫電はしばらく考え、

「よし。その道順で行くか。なら、まずは襄陽だな。白竜。次は襄
陽だ」

白竜にそう伝え。紫電は襄陽へと進んでいった。

そこで、私塾を開いているかつての仲間のことを探いながら。

第十一話（後書き）

以上です！！

美羽の城にいるならばこいつことも起りますよね。

まあ、今回は隠れて見ていただけですけど（笑）

わい、これで報告です。

10万アクセス……突破いたしました————（ドンドンパフ
パフ）

……「ホン。

さて、10万アクセスを突破したという事で、何か特別編を書きた
いと思つのですが……一いつのことで迷つています……（汗）

その一つのひとつを書くのが、一応アンケートをとりたいのですが
……感想書いてくれてる人少ないんよなあ（溜息）

なので、こいつが見たいという人はできれば答えてください。

では、アンケート内容はこいつです。

Q・どっちが見たい？

1・他の原作とのコラボ

2 · 雷魔の過去話

この一つでお願いします。

さて次回の本編は襄陽にある一つの町でのお話です。

そこで「天龍」時代の仲間の一人と再会します。

それは誰か？

次回をお楽しみに！

第十一話（前書き）

やつと出来上がつました！

今回は、襄陽近くの町での話です。

そして、そこにある人物と再会します。

それは誰か？

では、どうやつ！？

第十一話

? ? ? S.i.d.e

その日、私はいつものように、私塾の生徒たちの授業をし、それが終わった後、教室の清掃などをして、買い物に出かけました。

天気が良くて好々（よこよこ）です。

そして、じばいばいの間、出店などを見て回っていました。（ちなみに、彼女の隣を通った男性は全員振り返ってあります）

「最近は、治安が悪くなつて、品物も少なくなつて来てますね……」

そして、色んな店の品物の状況などを確認してました。

そして、最近のこの町の治安のことも考えました。

「やはり、劉表は前に、紫電様の言つた通り、あまり良い君主ではなこようですね」

そうして、この町を含めた、襄陽を治めている劉表の評価を呴きながら色々な店を見ながら町を歩きました。

子供達が近寄ってきたので、一緒に遊んだりもしました。

「それにして、紫電様は今どいで何をしていらっしゃるんでしょうか?」

そう言つて、あのの方のことを想い、私は昔のことを思い出します。

私 姓を司馬、名を徽、字を德操、真名を静音 が、あの方に出会つたのは、私がまだ十七歳の頃です。その頃は、王朝が安定していたこともあり、賊が出る」とは、余りありませんでした。

そして、そんな考えもあり、その時は、賊は出ないと高をくくつて、隣町まで買い物に出かけました。

行きは、私の予想通りなんともなかくて好々だつたのですが、帰りに賊に襲われてしましました。

そして、捕まりやつになるも、何とか逃げ出して、賊から離れようとした。

でも、賊は馬を使い追つて来ました。

流石に、あの時は、もう終わったと思いました。

そんな時に、あのお方が部隊を引き連れやつてきたのです。

そして、私に、近づいてきて、私の状態を確かめた後、引き連れてきた部隊の兵とともに、私を庇いつつ、賊を全滅に追いやつてしましました。

いました。

そして、再び私のところに来て、状態を確認した後、自己紹介を始めました。そして、私もそのお方 紫電様に名を名乗り、助けていただいたお礼をしました。

その後、いくつか話した後、紫電様が「付いて来ないか」と言されました。なぜと聞くと、紫電様は、勘だと言って、微笑みま

した。多分その時です。その方を好きになってしまったのは。

一日惚れでした。その笑顔を見たとたん顔が熱くなるのが分かりました。

その為、若干勢いで「付いて行きます」と言つてしまつたのですが、自分にも家族がいることを思い出し、少し待つて欲しいと頼みました。

そして、その後、紫電様たちに護衛されつつ、村に戻ったあと、父や母に事の経緯を話しました。

私は、反対されるかと思いましたが、両親は、私の非凡な能力に気付いており、快く旅立ちを許可してくださいました。

その後、五年間紫電様の下に付き、彼を支え続けました。彼との関係もそれから身体を許すところまで一気に進んでしまいました。

そして、『天龍』が発足したときに私は彼の副官となり、学問などを鍛えていたため、その隊直属の軍師となりました。その時は、まさに天にも昇る気分でした。ですが、その他にも、紫電様を慕う人たちが増え、少し彼との関係も心配していましたが、彼は、そんな私達全員を相手してくれました。そして、仲間の人たちとも仲良くなり、私は順風満帆な人生を謳歌してました。

しかし、六年前のあの事件で、我等が主、紫電様が洛陽を追放処分になってしまい、私は、足元の地面が崩れた様な感じになりました。

そして、それが原因で、『天龍』を解散させられ、私は、色々からの誘いを全て断り、荊州に移り住み、今に至ります。

そんな昔のことを思い出しつつ、しばらく町を見回り、必要な物を買い、私塾でもある私の家に戻ろうとしました。

その時、

「た、大変だ――――――！」

町人の一人がそう叫びながら走つてくるのが見えました。

「ど、どうしたんだ？」

近くにいた町の人々が、その走つてきた人に聞きました。

「……はあ……はあ……ぞ、賊が攻めてきた……」

その走つてきた人が言つた言葉で、周りが騒然となりました。

「と、とにかく太守様に報告しないと！」

そう言つて、何人かの町人が城の方へと駆けていきました。

「……ここ最近、賊が多くなってきましたね。しかし、何でしょう。この嫌な感じは？」

私は、そう何か嫌な予感がし、急いで自分の家に戻り、昔使っていた自分の武器の双鉄扇『蝶舞扇』ちょうぶせんを持つて、町の中に戻りました。

私が戻つた時、町の中は、大変なことになっていました。

何故かもつすでに、賊が入り込み、町の人たちを襲っていたのです。

「……先程の嫌な予感はこれだったのですね」

私は、目の前の現実が少し信じられませんでしたが、それでも、町人たちを助けるため、走り出しました。

そして、町人を助けているうちに、戦っていた兵などからこんなことを聞きました。

「IJの町の太守が、街を捨てて逃げた」

それを聞いた時、私は愕然としました。

なぜ、民を守るべき人が、誰も守らず、自身の保身のために、逃げるのかと思いました。

そして、そのせいで隙が出来たのか、近くによつて来ていた賊に気付かず、その賊に、突き飛ばされました。

「くつくつく。良い女じやねえか。なあ、今から俺と良いことじよ
うぜ」

そう言つて、私を突き飛ばした賊は、嫌な笑みを浮かべながら、私に近づいてきました。

「……つーーー」

私は手に持つていた『蝶舞扇』を思いつきり、横に振りぬきました。

ドガー！……ドサアアアアアア！！

賊は、油断していたのか、私の一撃がモロに顔の側面に当たり、そのまま吹き飛んでいきました。

それを見ていた、何人かの賊が、私の周りを囲み始めました。

「……これ以上、やると仰るのなら。今から私、司馬徳操がお相手します！」

そう言って、私は『蝶舞扇』を開き、構えを取り、賊達を睨みつけました。

「讐めんな女！野郎共やつちまえ！」

一人の男がそう言った瞬間、囲んでいた賊が一斉に襲い掛かつきました。

私は、その賊相手に、舞つよしに戦いました。

時には激しく、時には静かに、時には早く、そして、時には遅く。

そうやって、半刻近く戦っていると、相手の数も減り、いよいよ終わりが近づき、好々と思った時、

「お、女！このガキがどうなっても良いのかー？」

そう言われ、声のほうに振り向くと、この町の子供が人質に取られていきました。

「なー? くつー!」

それ見て私は、色々考えましたか、周りを見ても賊しかいなくて、唇をかみました。

打つ手がない」と悟り、私は、『蝶舞扇』を地面に置きました。

「へ、へへへ。そ、そうだ。おとなしくしてりや、このガキも無事で済むぜ」

人質を取った賊は、そう笑いながら、私に近づいてきます。

このまま大人しくして、子供を無事に帰すまで、抵抗しないようにしておこうと思つた時、

「子供を人質に取るなんて、やっぱ賊はカス以下だな.....」

そんな懐かしく、愛しいあのお方の声が聞こえました。

静音 Side Out

紫電 Side

紫電が、『天龍』の仲間だつた者の一人、名を司馬徽、字を徳操、真名を静音が私塾を開いていると言つ町にやつてきた時、その町は、賊に襲われていた。

「ちつ…… 最近賊が多くなってきやがったと思つてたら、こんなことになつてゐるとはな」

そう言つて、紫電は白竜を、その町に急がせた。

そして、町に入り、白竜から降り、襲つてゐる賊を腰に下げていた一本の刀を抜いて、賊達を切り倒していった。

右手には、以前も使つた日本刀に酷似した刀『黄竜』を握り、左手には、鍔が無い直刀『飛竜』^{ひりゅう}を握っていた。

そして、しばらく賊と戦いつつ、町の中央の方へ向かつてゐる時、この町を訪れる理由であった、水色髪の女性 静音の姿があつた。

彼女は、自分の武器である『蝶舞扇』を地面に置き、じつとしていた。

よく見ると、賊が子供を人質に取り、静音を脅しているようだ。

「ちい…… 静音がなんで攻撃しないのかと思つたらそれいつことかよ！」

そう言つて、紫電は目にも留まらぬ速さで駆け抜け、その場に向かつた。

そして、その場に着き、賊の背後に回りこいつ言つた。

「子供を人質に取るなんて、やっぱ賊はカス以下だな……」

そして、賊がそれを聞いた瞬間、賊に強い衝撃が与えられ、吹き飛

ばされた。

「大丈夫か？」

助けた子供はそれを聞いて、コクリと頷き、紫電はそれを見て、少し安心した。

そして、静音のほうに振り向き、

「よう。静音。なんかやばい状況だつたようだな」

やつぱり、再会の挨拶をした。

「し……でん……わ……ま？」

静音は、田の前の「」とが信じられないのか、まだ少し呆けている。

「何だよ？俺じゃないって言いたいのか？」

紫電はやつぱり、悪戯をする子供のよつたな笑みを浮かべた。

「ああ……紫電様ーー！」

静音はやつぱり、紫電に抱きついてきた。

「久しぶりだな。静音」

やつぱり、抱きついてきた彼女に何の動搖もせずに、彼女の頭を撫でる。

「はい。お久しうついでこまゆ」

そう言いながら、彼女は顔を上げる。

その目には、涙が光っていた。

「さてと、そんな感動の再会もここまでにして、そろそろこの状況を何とかしようぜ」

「御意に」

そう言って、二人は離れ、紫電は一つの刀『黄竜』と『飛竜』を、静音は下に置いていた『蝶舞扇』を手に取り、残った賊を倒しに回った。

そして、半刻後、町の中にいた賊は、紫電と静音の一人により、全滅した。

「ふう……腕落ちてなかつたんだな。これじゃ、あの時助けたのはなんだつたんだろうって思うな」

「ふふ。あの時は、流石の私も動搖しておりましたので、子供を如何に無傷で解放させるかと言つことしか、考えていませんでした」

そう言って、二人とも自分の汗を拭う。

「へえ。静音も動搖すんだな」

そつ言いながら、一ヤコと笑う紫電。

「もう。私のことを嶺みたいな、鉄の女だと思つていたんですか？」

「あ、それ、嶺に会つた時、言つてやうつかな？」

「う……流石にそれはやめてください……」

昔のことを思つ出したのか、少し顔が青くなる静音。

そうやって、戦の後なのに、場違このよつて笑つ紫電と静音だつた。

「とにかく、紫電様。なぜこのよつたじふるは？」

静音は、先程から氣になつていたことを紫電に聞いた。

「ああ。それはな……」

そして、紫電はこれまでの経緯を静音に話し始めた。

「なるほど。それで、この襄陽に」

「ああ。まあ、襄陽ではなく。お前に会つたくて来たつてのもある

がな

そつ言つて、紫電は悪戯つ子の様な笑みを浮かべる。

「も、もつ。紫電様つたら……」

その紫電の言葉に顔を赤くする静音。

端から見ると、「なんだ?」のバカップル」とシシ「ミミたぐるような光景である。

「それにしても、なんで兵とか少なかつたんだ?」

紫電のその質問に、静音は唇をかんだ。

「…………」の太守が敵前逃亡を図つたよつなのです……

それを聞いて、紫電も苦い顔をする。

「やはり、朝廷は腐つてきてるな

「そうですね……劉宏様や火穂も頑張つてはいるんでしょうが……地方の太守となると……」

「これはいよいよ。あの時期が近づいているのか……」

そつ駄く紫電の言葉を静音は聞いた。

「あの時期?」

気になつたので、聞くと……

「ああ。俺の予測だが、このまま行くと、民の一斉蜂起が起ころるかもしけん」

その言葉を聞いて、少し驚く静音。

「そうですか……いえ、そうですね。紫電様は、以前も大体のことを見知してましたしね」

そう言って、二人は顔を暗くする。

紫電は、前の世界の記憶がまだ残っているのか、ある程度のことが分かつっていた。

『天龍』にいた時も、ある程度のことがわかつっていた。それを仲間たちや蒼華は、紫電はある程度未来がわかると認識していた。

「だから、俺は、その為にも、各地を回ってるんだよ」

「なるほど。そういうことでしたか」

「それよりも……だ。この町を何とかしないとな」

「そうですね」

そう言って、一人は後始末をしている町の人達のところへ歩みを進めた。

後始末も終わり、夜の帳がおりた頃、紫電と静音は、静音の家へと来ていた。

「はい。お茶が入りました」

「おひ。ありがとうございます」

一人は家中で、お茶を飲んでいた。

「静音。私塾をやつてるんだってな」

「はい。色々な生徒がいてそれなりに楽しいです。そのあたりは好々です」

「そうか。んじゃさ、その生徒の中に、名を諸葛亮しょかつりょう、字を公明じゆめいと、名を鳳統ほうとう、字を士元しだいん、それに、名を徐庶げんちよく、字を元直げんじゆくという子はいいかい？」

それを聞いた瞬間、静音は心底驚いた表情を、その綺麗な顔に浮かべた。

「な、なぜ、朱里しゅりに雛里ひなり、それに麗里れいりのことを知ってるんですか！」

「なにこれも、ちょっとした予知だよ。つてか、その名は二人の真名か？」

「あ、は、はい。そうですね。……なるほど。紫電様の予知でしたか……」

そうして、静音は、紫電が三人のことを見ていた理由を納得した。

「やうか。真名を預ける仲なのか。つてことは、それなりにいい子達なんだな」

「はー。とても良い子達です。ですが、麗里 元直はまだこの私塾にいますが、公明と十元は、大分前に自分の主君を探す旅に出てしましました」

そう言って、少しあびしそうな顔をする静音。

「そうか。まあ、それは仕方ない」

それから、しばらく沈黙が近づいた。

「ところで、紫電様？」

「ん？」

「今日は、この後、どうなるんですか？」

その言葉を聞き、紫電は少し考えた後、

「やうだな。もう今日も遅いし、宿にでも止まって、明日、ここを出るわ

「やうですか。……で、でしたら、ここに泊まつてこさせんか?」

紫電はその言葉に少し驚き、 静音の顔を見た。

その静音の顔は、ほんのり頬が染まっていた。

「…………それは、誘つてるのか？」

「…………言わなきや…………黙田ですか？」

そうして、しばらくお互いを見詰め合っていた。

その後、二人は遅めの夕餉を取り、一人で一緒に寝た。

この時、何があつたかは…………読者の皆様の想像に任せます。

その翌日、紫電は、静音に見送られながら、白龍に乗り、次の目的地である許昌に向かっていった。

そこで次に彼を待ち受けているものとは？

それは誰にも分からぬ。

第十一話（後書き）

あとがきは、次のオリキャラ紹介に書いてあります。

オリキャラ紹介一（前書き）

今回は、司馬徽こと真名を静音の紹介です。

オリキャラ紹介一

姓：司馬
字：徽操
真名：静音
性別：女
年齢：27歳
身長：162cm
体重：48kg
武器：蝶舞扇（双鉄扇）

以上

能力値：武力3、統率力4、知力5以上、政治5、魅力5

『天龍』の仲間の中で、紫電が一番初めに出会った女性。紫電が軍に所属し始めてしばらくたった時に、賊に襲われているところを紫電に助けてもらい、名を名乗りあつた後、紫電についてこないかと言われ、助けてもらつた恩返しをするため、付いていくことになる。その時、紫電の笑顔に惚れた様である。その為、『天龍』の仲間の中でも一番紫電に心酔している。

その後、『天龍』が発足した時、紫電の副官兼軍師になる。『天龍』が解散させられた後、能力を買われいろんな所から誘いが来たが、全て断つて、私塾『水鏡塾』を荊州にて開いた。
『天龍』では、主に後方支援に回っていた。

容姿

絶世の美女と言われるほどで、スタイルも出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる。なので、多くの男性から告白され

まくつているが、紫電一筋なため、全て断つている。髪は長くストレート、色は水色。目は翡翠色である。

作者的には、顔は、「テイルズオブファンタジア」の「ミント」をイメージしている。

性格

お淑やかで、優しくお母さんのような雰囲気を持っている。なので、水鏡塾がある町の子供に懐かれている（歩いていると町中の子供達が近寄つて来るほど）。また、口癖は史実どおり「好々」である。

服装・装備

着物を中華風にしたようなものを着ている。これは、紫電から贈られた服でもあるので、好んで着ている。色は青紫。

戦闘では、着物上から紫色の胴当てを付け、手には同色の手袋のよつた手甲を付け、蝶の羽のような模様が描かれた一对の鉄扇『蝶舞扇』を使い舞うように戦う。その美しい姿から『美妖蝶』と言われている。

また、紫電から柔術も習い、それもよく活用している。また、後の『臥龍』諸葛孔明と『鳳離』鳳士元を育て上げることからわかるように、かなり高い知力を持ち、その『臥龍鳳離』でも足元に及ぶか否かの知を有している。ただし、その知を使うことができるのほ、紫電のみである。

・陣形

鶴翼陣、横陣、方円陣、魚鱗陣、雁行陣、偃月陣、衡範陣

・奥義

LEVEL1・水鏡の教え

味方兵力+、味方士氣+、奥義ゲージ+

水鏡といつ名は、全ての知識の基である。

LEVEL 2 · 美妖蝶

味方兵力 +、味方士氣 +、敵士氣 -

行う舞は兵への鼓舞となり、士氣上昇もかなりのものである。

LEVEL 3 · 龍の右腕

計略、敵士氣 -、火刑、敵攻撃 -

紫雷の龍のためにいかなる計略をも成功させ、敵の士氣を削ぐ。

オリキャラ紹介一（後書き）

以上です。

如何だったでしょうか？

「天龍」の武将、二人目は司馬徽」と静音という方でした。

このキャラは紫電の次に出来たキャラなので、結構気に入っていたりします（笑）

さて、10万アクセス記念のアンケートの結果なのですが……0票でした。orz（泣）

ということで、10万アクセスの内容は自分自身で決めたいと思います。

なので、次回は10アクセス突破記念の話となります。

どういう内容になるかお楽しみに！

では、また次回！――

P・S・

静音の口癖 「好み」を追加しました。

まあ、口癖といつほど多く使わないかもしけませんが……（汗）

10万アクセス記念（前書き）

やっと出来上がったので投稿します。

今回は、紫電が率いる『天龍』ができて、余りたっていらないこの話です。

そして、あるオリキャラも登場させます。

本編での登場はまだ先なので、今回は名前だけです。

では、どうぞ。

これは、紫電が『天龍』を率い始めてから、それほどの日時がたつていないうちの話。

現在、紫電が率いる『天龍』五千の部隊は、長安の視察に訪れていた。

そこで、太守と面会し、長安の情勢を聞き、これからの中をどうしていくか議論していた。

そして、それも数刻程度で終わりを告げたので、ちょっとした休暇を楽しむことになった。

「ふむ。もつと時間がかかるかと思つて、多田の滞在日数にしたんだが、ここ長安の太守が物分りが良くて、結局大幅に時間が余ってしまったな」

そつ長安の城にある中庭の東屋でつぶやくのは、禁軍特殊警護部隊『天龍』隊長、そして我等が主人公の名を雷魔、字を霸龍こと真名を紫電だった。

「せうですね。でも、その分せうべつする時間が出来て好きじゃないですか」

そつ湯のみにお茶を注ぎながら言つのは、『天龍』副隊長兼軍師であるがを司馬徽、字を徳操こと静音である。

「せうだな。最近は、色々とせしがつたからな」

そう言いながら、紫電は静音からお茶の入った湯のみを貰つて。

「といひで、紫電様。これから何か予定でもありますか？」

自分の湯のみにお茶を入れ、静音は紫電にせう聞こかけた。

「ん？ああ。ちよつと長安郊外にあるとある村にて、二日ほど行ってみよつと思つてゐるんだが」

「村……ですか？それは、この近くにあるのですか？」

紫電の答えに、せう聞きながら静音は少し首を傾げた。

「うーん……少し遠いが、白竜だと今日中には着くだらう

「そですか。あの……なら、私も付いてこてしまふでしょ
うか？」

静音はそつ言いながら、紫電に子犬のような田線を向ける。

そして、紫電はその視線に少したじろぎながらも、

「あ、ああ。別にいいが……」

と言つて、静音の同行を許可した。

その瞬間、静音の顔が嬉しそうに輝いた。

「ありがとうございます！では、今から準備をして参りますね！」

静音は、そう言いながら、手早くお茶のセットをなおすと、足早にその場から立ち去りうとして、ふと思つたことを紫電に聞く。

「ところで、紫電様はその村とどのよつたな関わりが？」

それを聞いて、紫電は遠くを見るよつたな視線で、いつ答えた。

「俺が……幼少時代、五歳頃まで住んでいた村だ」

それからしばらくして、紫電と静音は、馬に乗つて紫電の故郷の村へと向かっていた。

ただし、そこにはもう一人同行者がいた。

「俺の実力を考へると護衛なんて必要ないだろ？」「…………」

そう溜息を吐きながら、紫電はもう一人の同行者　名を何進、字

を遂高こと真名を火穂に視線を向けた。

「いえ、どんな強者でも、油断すれば命を落とします。例え紫電様でもです。それに、紫電様に怪我でもされたら劉宏様に顔向かが出来ません」

だが、火穂は頑なに付いていくと言つ。

ところで、何故火穂が付いてきているかと言つと、静音が上機嫌に自分の前を横切つていったのを見て、呼び止めて何か嬉しい事があつたのかと問いただしたところ、静音は嬉しそうに、そして自慢するように東屋での内容を話した。

それを聞いて、火穂は少し苛立つたのか、強めの口調で自分も付いていくと言い出した。

流石に、静音は一人きりの遠乗りを期待していたので、拒否しようとしたが、そこに残りの『天龍』の武将二人が現れ、自分達も付いていくと言い出したが、流石に長安の守りを薄くすることはよろしくないので、ジャンケンすることになり、拒否できぬまま、女の戦いへと発展した。

まあ、結局は静音と火穂が勝つて、同行の権利を得たのだが。

そんな事もあり、火穂も同行することになった。護衛として。

閑話休題。

「まあ、火穂の言葉も一理あるか」

そう言つて、紫電は半ば無理矢理自分を納得させた。

「そうですよ。火穂の意見は好々です。それに、紫電様は帰つた後のことを心配したほうがよろしいかと」

そんな少し笑いを含んだ静音の言葉に、紫電は「そつだな」と小さい溜息を吐く。

実は、長安を出るとき、留守を任せられた一人に帰つてきてからの残りの時間を一人と過ぐすことを約束させられたのだ。

紫電も流石に残される二人の事を不憫に思つてしまつたのか、二つ返事でその事を了承してしまつたのだ。

「とりあえず、約束は守らないとな。気落ちしても仕方ないな」

紫電がそう言つと、静音も火穂も少し苦笑いになつた。

そして、三人は村への道を急ぐ事にした。

陽が沈もうかといつゝ。紫電一行は、紫電の故郷の村の前へ来ていた。

そこは、かなり栄えているのか、もう村ではなく、一つの町になつていた。

「へえ。あの村が、ここまで成長していたとはな」

そう言って、昔の村の風景と違つ感じに紫電は感嘆の溜息を吐いた。

「ここが……かつて紫電様が住んでいた村」

「村とこよりは、本当に町のようになつてゐるな」

そう静音と火穂はそれぞれの感想を言つ。

そして、三人は村　いや、町の中に入ひつとした。

だが、

「そこの者たち止まれ！」

そつ見張りを担当している男に言われたので、足を止めた。

「貴様ら、何者だ？」

そつ言つて、見張りの男は警戒しながら聞いてきた。

流石に隠していても仕方ないので、素直に自分の正体を明かした。

「俺は、禁軍特殊警護部隊『天龍』の隊長の雷霸龍だ。そして、こ
っちは仲間の……」

「司馬徳操です」

「何遂高だ」

そう紹介すると、見張りの男はそれを聞いて、若干顔を青くする。

「し、失礼しました！」

そう言つて、膝を突いて礼をする。

そして、体は若干震えていた。

「いいよ。実際、君は見張りとしての仕事をしたに過ぎないんだから

」

そう言つて、紫電は見張りの男を立たせる。

「あ、ありがとうございます。あ、あのところでの町に何の御用で？」

若干緊張しつつも、そう言つ見張りの男はそう紫電たちに問いかける。

「ああ。俺が元々この町の出身でな。久々に顔を出しに来たんだ。つてことで、中に入つても良いか？」

紫電がそう言つと、見張りの男は「長老に確認してきまー」と言って町の中へと消えていった。

半刻後、先程の見張りの男が戻ってきて、

「長老がお会いするとのことで、長老の宅へと案内します」

と言つたので、その男について長老の家へと向かつた。

そして、長老の家に着くと、結構年のいった老人が家の前で頭を下げていた。

「これはこれは雷霸龍様。」んな田舎こよひそ御越しくだせりま
した」

「いや、故郷だからな。それと、長老。前みたいに紫電つて呼んで
くれ」

紫電はそう言つて、長老の顔を上げさせた。

すると、長老は紫電の顔を見た瞬間涙を浮かべていつひつた。

「久しづつじやのひ、紫電。元氣で、無事で何よりじや」

「なるほどのひ。お主らが村を出た後、そんな事になつたのか」

あの後、長老の家に入り、広めの部屋で、これまでの経緯を長老に話していた。

「とても苦しい思いをしたじやのひ、紫電。だが、こじまでも育つた
のだ。雷鳳も雷麗も満足していると思つだ」

「ああ。俺もそう思つ。父さんと母さんに誇りを持つて、ありがとう」

「うつて前に墓参つしたときに言つてきてきたよ」

紫電は、そう言つて、遠くを見つめる。

「ところで、今田は何で泊まつてこのか？」

「ああ。田も落ちたしな。それに、一、二日は滞在するつもりだ」

「そつか。なら、ワシの家に泊まつてじつてくれ」

「そつ長老の問いかに答えたたら、長老にそつ勧められたので、お言葉に甘えて泊まる事になつた。」

翌日、紫電は一人で町の中を歩いていた。
「あの村がここまで発展したとはな」

やつ言つて、紫電は町を眺める。

そこには、多くの人が笑顔で暮らしていた。

(「の笑顔が賊とかで消えないよこしないとな」)

そう改めて色々決意した紫電は、じばりく街中を歩いて、長老の家へと戻った。

匂。

昼餉も終わり、紫電は静音と火穂と一緒に中庭でお茶をしていた。

するとそこには、一人の少女が歩いてきた。

「おや？君どうしたのかな？迷子？」

紫電がそう聞くが、少女は頭を横に振り、

「爺様を探してたの」

そう言って、若干不機嫌に答えた。

どうやら、長老に関係した少女のようで、相当な時間屋敷の中で長老を探したが見つからず、少しすねている様だ。

「そりか。なら、一緒に探そつか？」

紫電がそう言うと、少女は顔を上げ、「いいの？」とでも言つよつに首をかしげた。

「ああ。こいよ」

紫電がいつ言つと、少女は笑顔になり、紫電の手を引つ張つた。

紫電は、静音と火穂にその顔を伝えると、少女に引つ張られながらその場を後にした。

その後、四半刻程探したが長老は見つからず、ちよつと近くにいた侍女に聞くと、長老は今出かけており、しづらへ帰つてこないとのこと。

ただ、夕餉には帰つてくるらしい。

だが、少女はそれを聞くと、頬を膨らませ、

「爺様の嘘吐き。遊んでくれるつて言つたのに……」

そう呟いた。

「君は、長老と遊ぶ約束をしていたのか?」

紫電がそつ聞くと、少女は頷いた。

そして、しづらへ紫電は考え事をしたかと思つと、

「じゃあ、お兄ちゃんと遊ぼつか?」

田線を少女と同じにした後、そう言った。

少女はそれを聞くと、少し驚いた顔になつた後、輝くような笑顔になり、勢い良く頷いた。

それを見た紫電は笑顔になり、しばらくの間少女と遊んだのだった。途中から、静音や火穂もそれに加わり、屋敷の中は笑い声でいっぱいになつた。

ちなみに、後で聞いた話だが、その少女は、長老の孫だったとのこと。

それから、一日後。

紫電一行が帰る日となり、長老と少女、それに少女の両親が見送りに町の門まで来ていた。

「見送りなんていいのに

紫電がそつと、長老は首を横に振り、

「いや、流石に劉宏様の弟君を見送らんわけにもいかん。それに孫の世話をまでして貰つたしの」

そう言った。

その答えに、紫電は苦笑いになつた。

すると、少女が紫電の傍にやつてきた。

「どうしたの？」

紫電は、少女と同じ田線になり、問いかけた。

「また、遊びに来てくれる？」

少女はそつ寂びそつに聞いてきた。

「ああ。また、遊びに来るよ」

紫電はそつ微笑み、頭をなでてあげながら少女に言つた。

「本当？約束だからね！」

それを聞くと、少女は笑顔になりそつ言つた。

そして、少しもじもじしたと思つと、

「これは、一緒に遊んでくれたお礼！」

チユ。

そんな効果音が聞こえてきそつな感じに紫電の頬にキスをした。

少女は流石に恥ずかしかつたのか、顔を赤くしながら足早に両親の

許へと戻つていつた。

紫電たちは突然の事に少々呆然としたが、微笑ましい展開だつたので、自然と笑顔になつた。

「ふおつふおつふお。孫にあれだけのことをさせたんじや。必ず来てあげるんじやぞ」

長老はせつ言つて、紫電たち（主に紫電だが）に念を押した。

それを聞いて、紫電達の顔は苦笑いになつた。

その後、紫電、静音、火穂の三人は長安に帰つていつた。

紫電が帰つた後の長老のこと。

「紫電のこと、深く気に入つたようじやな？」

「うんー私、大きくなつたらお兄ちゃんのお嫁さんになりたい！」

「そつかそつか！」

そんな会話が成り立つていたそつな。

「お前には才もあるしの。是非とも娶つてももらわなければな。のう

文姫よ！

10万アクセス記念（後書き）

以上です。

どうだったでしょうか？

今回ば、『天龍』ができてすぐの頃の話を書いてみました。

「ラボ方はいいものが思いつかなかつたもので、今日はこんな感じにしました。

そして、出しましたー出してしまつたー新しいオリキャラー！

その名も、蔡文姫！（本名は、名が蔡？で、字が文姫）

しかも、史実とは違つて長安に住んでるしー！

とりあえず、今後出す予定のオリキャラとの話でした。

楽しんでもらえたなら幸いです。

わたくし、次回からは本編に戻ります。

次回は、許昌での話です。

どんな内容になるのか？

お楽しみにー

第十一話（前書き）

やつと出来上がつましたので、投稿いたします。

今回は、一一回同時投稿です。

といつても、片方はロリボ作品です。

まずは、十三話から投稿いたします。

今回は、許可での話です。

どんな出会いがあるのか？

では、どうぞ。

第十一話

襄陽を出て、数日後。紫電は、豫州の許昌を訪れていた。

「ほひ。コレが許昌ね。それなりに賑やかだな。まあ、漢でも有数の都市だから当たり前か」

やつ言いながら、町の中を見回る紫電。

「さて、食料や薬品が少なくなってきたから、買い足さないとな
そつこに訪れたのは、旅に必要な物が少なくなってきたから
である。

それから、紫電はしばらぐの間、食料や薬品を買って回った。

一刻後、買った物を先にとつていた宿屋の自分の部屋に置き、再度許昌の町並みを見て回った。

そして、今は、たまたま田に入つた本屋の中にいた。

「ふむ。それなりに品揃えは良いな。まあ、洛陽が近いからな

やつ置いて、棚に並んでいる本を順に手にとつて読んでいた。

すると、ある本が目に入った。

「お~これは……やつてれば、静音が新しい本を出したつて書つて
たな」

その本には、「著・水鏡」と書いていた。

そして、その本を取りうつと手を伸ばすと……

「ん？」

「あら？」

誰かの手とぶつかった。

紫電は、すぐにその手を引っ込め、ぶつけた相手の方を見た。

そこには、小柄で金髪を両側にまとめてクルクルに巻いた少女がいた。

だが、その者が醸し出す雰囲気は、およそ凡人では出せないような感じがした。

それは、気高いと言つか、近寄り難いと言つか……とにかく、相当の身分の者であることは予想がついた。

そして、少女の後ろには、護衛なのだろう、一人の女性が立っていた。

「あなたもこの本を買いに来たの？」

少女は手に取った本をかざした。

「いや、えつと……」

紫電は、「買う気はない」と呟くとしたが、それを囁く前に、後ろに控えていた一人の護衛の内、短い水色髪の女性が少女に話しかけた。

「華琳様。^{かりん}どうやらその本は、それ一冊しかないようですね」

「そう困つたわね…………」

「いや、だから……」

再度「買う気はない」と言おうとしたが、それを今度は、長い黒髪の女性が口を挟んで遮った。

「残念だつたな。その本は、華琳さまがお買いになられるのだ。だから、諦めて他をあたると良い」

その言葉に、紫電は少しむつとなつたが、顔には出さなかつた。

「おやめなさい、春蘭。^{しゅるん}どちらかと言えば、この者の方が私より先に手を出していたのだから、彼に買う権利があるわ」

「だから、俺は……」

「流石です、華琳様！^{かりん}その寛大なお心遣い、この夏侯元讓、感服いたしました――」

三度「違う」と言いたかつた紫電だが、また黒髪の女性に遮られ、少しいらつとしたが、その女性の言葉に自分の知っている名が出てきたので、抑えることが出来た。

(夏侯元讓……つて」とは、あの黒髪の女は、夏侯惇か。なら、もう一人の水色髪の女は、夏侯淵か? そうなると、田の前の金髪の少女は……)

そう紫電が考えていると、華琳と呼ばれた少女が話しかけてきた。

「それにしても、この本を選ぶなんて、あなた男にしては珍々見る目があるわね」

そう言つて、挑戦的な視線を紫電に向けてくる少女。

「ん? ああ。いや、それは知り合いの本だからな」

「知り合い? あなた、水鏡と知り合いなの?」

「ああ。だから、興味本位で手にしようとしただけだ。買いつもりはない」

「ふうん……あなた、名は?」

「……雷霸だ」

紫電は、名を聞かれたとこに少し疑問を持ちながらも、その少女に名乗つた。

覚えている方もいらっしゃるとは思うが、紫電は、自身の名を知っている者に正体がばれないよう、偽名である「雷霸」を名乗つている。

「セツ。雷覇。あなた、私に仕えないかしら~。」

「…………は？」

「なー? 華琳様! ? そんな男を引き入れるのですかー? 」

少女の言葉に、紫電は一瞬呆け、黒髪の女性 夏侯惇が驚いた声を上げる。

「水鏡と友と言ひ」とは、男と言えどもそれなりの才があつても可笑しくないもの。なら、それを私の元で役に立ててみないかと聞いているの」

そう言ひて、紫電にそう提案してくれる。

「どう? 才ある者なら、男でも歓迎するわ」

再度、少女は紫電に問いかけた。

だが、紫電の心はもう決まっていた。

「せつかくの申し出だが、お断りをせんまい」

紫電は、そうきつぱりと断つた。

「貴様! せつかくの華琳様の申し入れを断ると嘆ひのかー! 」

「落ち着け、姉者。理由も聞かずにしてきつ立つのよくなない」

夏侯惇が声を荒げて怒りを表すと、水色髪の女性が諫めた。

(姉者……とこい」とは、やはり夏侯淵か……演戲でだが、夏侯惇の弟として登場していたしな。と書ひ「とは、やはり」の少女は、

（うそつ
曹操か）

紫電は、そう自分で結論を出した。

「そうね。理由を聞かせてもられないかしら？」

少女 おれいへは曹操 はそり言つて、断られた理由を聞いてきた。

「理由は一つある。まず一つ。俺はあなたのことを知らない。一応予想は立てているが、それでも確信じゃない。だから、名も素性も知らない奴についていくなんて子供でもしない」

「そり言えば名乗つてなかつたわね。でも、予想は立てているのでしよう？一応、言つてみなさいな」

そう言つて、試すよくな顔を向けてくる曹操。

「んじゃ、失礼して。あなたの名は曹操、字は孟徳。へいとくそして、後ろの一人。黒髪の女は、先程も名乗つていたが、名は夏侯惇、字は元讓。そして、二人目の水色髪の女は、さつき夏侯惇のことを姉者と呼んでいた。なら、その妹の夏侯淵、字は妙才。みょうさいちなみに、曹操。あんたのことが分かつたのは、この一人が分かつてからだ」

そり言つて、三人の名だけでなく、字まで言い当てた紫電。

これには、三人とも心底驚いた顔をしていた。

「今まで言い当てるなんて。それにその推理力。やはり惜しいわね。
それは良いとして、一つの理由は？」

そう言つて、曹操は、驚いた顔をすぐに戻し、一つの理由を促した。

「一つの理由は、もう仕える主がいるからだ。まあ、それでも見聞を広げるために旅をしてるんだがな」

そう言つて、肩をすくめる紫電。

「やつ……その者から乗り換える気は？」

「ないな」

「放浪しているあなたを呼び戻しもしないの？」

「まあ、それは自分から戻るつて言つてるからな」

そう言つて、遠い目をする紫電。

すると……

「貴様！華琳様がそいつよりも劣つていて言いたいのか…？」

「だから、落ち着けといつてこるだろ？、姉者」

夏侯惇が怒り、それを夏侯淵が止めていた。

「しかし、秋蘭！」この男は、華琳様を侮辱したのだぞ！？」

そう言つて憤る夏侯惇。

「落ち着きなさい、春蘭。この男の言つていることは本気よ。決して私をけなすために言つたわけではないわ」

「はあ……華琳様がそう仰るなら……」

曹操にも諫められて、夏侯惇は不承不承といった感じに引き下がつた。

「ところで、俺からも一つ良いか？」

そう言つて、先程から気になつていたことを聞いてみた。

「何かしら？ 答えられることなら良いわよ

「なんであんたがここ、許昌にいるんだ？ 今のあんたは、陳留の刺史だったはずだが？」

そう、曹操は陳留の刺史なのだ。なので、この許昌の町にいることは確かにおかしかつた。

唯一考えられるのは、こここの太守と知り合いで、その人に会いに来たとかだが、それでも、護衛の一人だけを連れてここにいることはないだろ？

紫電の言つたことがわかつたのか、曹操は不敵な笑みを浮かべた。

「ああ。そのことね。別に大したことではないわ。ただ、視察に来ているだけよ」

「ただの視察……ね」

「そうただの視察。でも、確かにここは私の領土ではないわ。「今は」……ね」

そつ言つて、不敵な笑みを深める。

「ふーん。なるほどね」

「関心が少ないわね。でも、やはり頭は回るよしね。惜しいわ。その才が手に入らないなんて」

そつ言つて、曹操は紫電に先程の本を差し出した。

「ん?なんだ?」

「ここの本に興味あつたのでしよう?」

「いや?単に、知り合この本だから手に取らうとしただけだよ。それはあんたに譲るよ」

「手に取らうとしただけでも、興味あるでしょう?。良いわ。譲つてもらうわ」

そつ言つて、曹操は会計をしに入り口の方へと歩き出す。

だが、少し止まり。

「雷覇。気が向いたならいつでも来なさい。そうすれば、あなたに天下と言つて物を見せてあげるわ」

そう言つて、再び歩き出す。

その背が見えなくなり、紫電は少し息を吐き出した。

「天下……ね」

そう言つて、紫電は少し笑つた。

曹操 Side

私は今、少し上機嫌だった。

原因は、先程本屋で遭つた男だろう。

最初は、欲しい本に手を伸ばした時、あの男の手に当たり、少し嫌な気持ちでその男のほうを向いた。

しかし、その男の顔を見た瞬間、そんな気持ちは消えうせた。

なぜなら、その男の纏う雰囲気は只者ではなかつたからである。

少し興味を持つた私は、彼に話しかけた。

すると、私が手に取つとした本　表紙に「著・水鏡」と書かれ

ていた を取らうとした理由を聞くと、水鏡と知り合いだというのだ。

これは、非凡な才能がその男 雷霸の中に眠っていると思い、その才がほしくなった私は、彼を誘つた。

だが、彼はきつぱりとそれを断つた。

「なぜ？」と聞くと、二つの理由を言つてきた。

一つ曰は、私の名を知らないこと。これは、私が名乗つてなかつたことが悪い。なので、名乗らうとしたが、彼の言葉の中に「一応予想は立てている」と言つ言葉があり、それを試してやううと思い、興味本位で聞いてみた。

すると、雷霸は私の名どいろか、字ど、それに護衛でついていた二人 春蘭と秋蘭の名と字も言い当てた。

これには、流石の私も驚きを隠せなかつた。しかも、分かつた理由が、最初に春蘭をいさめたとき、春蘭が姓と字を言つたところから推測したのだと言つ。

その後、私は、彼の才がどうしても欲しくなつたが、二つの理由を言つようになに促した。

すると、二つ目の理由は、「自分にはもう仕える主がいる」というのだ。

こんな才ある者を野放しにする主なんて、どうしてことないと思い、乗り換える気はないかと聞いたたら、即答で「ない」と言われた。

自身をほりついていることも引き合いで出したが、「自分から戻ると言つた」と言われた。

これは、彼がどれだけその主を信頼しているかがわかつた。

これが原因で、春蘭は私が侮辱されたと思い、憤つたが、むしろ、彼の目は綺麗だつたので、私は、彼が私のことを侮辱するつもりで言つたのではないといふことも分かつてゐた。なので、今回は春蘭を諫めた。

その後、今度は雷霸から「なぜこの許昌にいるのか?」と問われた。

その質問は、至極当然だ。なぜなら、私は陳留の刺史だからである。ここの大守に招かれたのならまだしも、招かれてもない私がこの町にいることはおかしいと思つたのだろう。

だから、私は彼に挑戦的な眼差しで、ここに来ている理由を教えてあげた。

するとそれを聞いた、彼は不敵な笑みを浮かべた。

そして、その後、私は彼が先に手を出していた先程の本を差し出そうとしたが、彼は欲しくて手を出したわけではないと言い、その本を私に譲つてくれた。

私は、それを受け取り、最後に彼をまだ諦めていない顔を告げ、本の勘定をした後、その店を出た。

「ふふふ」

其処まで、思い出し、私は後のことが楽しくなり、笑ってしまった。

「」機嫌良いですね。華琳様」

それに気付いたのか、秋蘭が声をかけてきた。

「ええ。とても気分が良いわ」

「やはり、あの男の事ですか？」

「ええ。あのオは、」のままずっと眠っている」とはないでしょう。この先、いつかそのオが花開き、どこかで名を上げると思つわ。それが私のところだったら、とても嬉しいんだけじね」

そう言って、秋蘭の方を向いた。

「やうですか。それは、楽しみですね」

「ええ」

そう言って、いつかあの雷霸といつ男が」の世に名を上げる」とが待ちどきになつた。

曹操 Side Out

紫電は、あの後、宿屋に戻り、地図を確認していた。

「さてと、この先は、濮陽^{ばくよう}を通つて、南皮^{なんぴ}に向かうか

そうつ置いて、紫電は、地図の上を指でなぞりながら、次の目的地への道順を決めた。

「しかし、あれが曹操か……なんといつか、まさに未来の霸王だな。あれは」

そつ言いながら、紫電は先程であった少女のことを思い出していった。

その後、寝台の中に入り、明田に向け眠つた。

翌日、紫電は許昌を出て、白竜を呼び、濮陽経由南皮への道を進んでいった。

この先に彼を待つているのは何なのか？

それは、誰にも分からぬ。

第十二話（後書き）

あとがきは、コラボの後に書いております。

「ラボ作品 ～白き鍊装士との出合～（前編）

「あらは、ラボ作品です。

ラボのお相手は、フォウルさんが投稿しておられる『白き鍊装士、恋姫世界に旅立つ』です。

なので、それらを読んでからお読みになる方が良いくと思われます。

時系列は、『あらの世界』『紫雷の龍』側は、雷魔」と紫電が洛陽を追放されて、すぐの時です。

そして、あらの世界『白き鍊装士』側は、「トスランティの日記」といふ話の直後あたりのようですね。

初のラボで、少々苦戦しましたが、フォウルさんと力を合わせて作つたので、楽しんでいくください。

では、どうぞ！

「ラボ作品」～白き鍊装士との出会い～

月や星の明かりが痛く感じられるほどに降りそそぐ、そんな夜。

すっかり冷たくなった風が、何の遮蔽物もない荒野に佇む人物に容赦無く吹き付け、唸りをあげる。

全身を風に弄ばれているのを気にもとめず、その人物　頭からスッポリと被つている外套から、旅人と察せられる　夜天を仰いでいた。

旅人自身はそう珍しいものではないが、一人きりといつのは考えものだった。

このご時世に一人旅をするような者は、よほど世間を知らない愚者か、腕に自信のある強者かのどちらかなのだ。

しかし、その点でいえば、この人物は後者に当たるようである。

体格の良さや何気ない一つ一つの挙動が洗練されたものである」とから察するに、只者ではないことは明らか。

夜の闇と月明かりで彩られた蒼色の視界に混じり合つかのように、フードの端から覗いている髪。

そして、月明かりを反射するたびに黒光りする色眼鏡。
サングラス

どこか不気味でいて厳か。

一種の幻想世界の住人のような雰囲気を放つ旅人の口がゆっくりと開かれしていく。

「世界^{ほし}が……動き出そうとしている。もう一つの大きな世界^{ほし}に向かつて……いや、これは引き寄せられているのか……」

空には十六夜が輝き、他の光を打ち消してしまいそうなほど光度を誇っているにもかかわらず、澄んだ空には星の海が漂っていた。

これだけでも十分綺麗な光景なのだが、旅人には何か別のモノが見えているようだ。

「そうか、お前にはまだ往くべき道が……交わりし運命が待つているのだな」

そう言って、旅人は微笑を浮かべたようだった。

目元と口元の力を抜いただけの、あまり人間らしくはない笑み。

しかし、そこに万感めいた想いを乗せて旅人は詠う。

託宣を告げる預言者のごとき静謐さをもつて。

「行くがいい、天の御遣い。

一億の原初を連れて、一億の終焉を連れて、一億の邂逅を遂げるために！」

旅人の声に呼応したかのように、星は輝きを更に強め、流れ星となつて過ぎ去つていった。

* * * * *

「……流れ星か、随分大きかったな」

遙か遠い夜空　　世界は違えども同じ時間に　　を、ひとすじの流れ星が翔けていく。

その様子をしばらく見つめ続ける少年たちの心は、徐々に重なり始めていこうとしていた。

* * * * *

「　　どこだよ、ここは……？」

百田の旅団長であり、天の御遣いと認知されつつある少年　　ハセヲは、気がついたら森の中にいた。

鬱蒼うつそうと生い茂る木々の隙間から、若干茜色が混じった木漏れ日が差し込んでいる。

太陽の位置をハツキリとは確認できないが、どうやら夕刻が近づいているようだ。

ひとまず周囲の状況を把握し、直前までの経緯を振り返るハセヲ。

一連の行動が手慣れているのは、（悲しいことに）こういった事態

に慣れつつあるからだろう。

目が覚めたら、全く知らない場所にいたという経験はこれまでにもあつたし、ただでさえ、いま自分が置かれている状況 180 年前の異世界にいる が状況なのだ。

何が起きても不思議ではないのだから。

事実、普通なら取り乱すのが当たり前の状況であつても、ハセヲは比較的落ち着けていると直観していた。

(カイトのせいでお開きになつた、アイテムのお披露目会を始めようとしたところで……)

ギルド倉庫へと繋がる穴を「テス ランティ」に開いてもらい、そこに手を突っ込んだ途端、”逆に引きずり込まれてしまつた”のだ。

いくら力を込めて抗おうとも、徐々に飲みこまれていく身体。

朱里や離里が大慌てで叫びたてていることと、まさかの事態に驚くタイミングを逸してしまつたハセヲはどこか呆然としながら、すっかり飲みこまれてしまつた右半身を見つめていた。

「これは……ギルド倉庫に繋がつてゐる穴じゃないブヒ！？ なんだってこんな……とにかくいいブヒか、ハセヲ！ 必ず助けてやるブヒから、出口となつた場所からあまり離れずに待つてのブヒよー！」

珍しいデス ランティの心配そうなセリフを聞きながら、ハセヲの身体は完全に飲み込まれ、意識も落ちてしまった というわけなのである。

「助けを待つひつひつても、どれだけ時間がかかるんだか。とりあえず、飲み水は大丈夫そうみてーだが……」

木々のそよぐ音に混じつて聞こえる水のせせらぎさき音にハセヲは気付いていた。

少しばかり草をかき分けながら進んでみれば、予想通り川を発見。山魚も泳いでいるのを確認したハセヲは、気持ち的に大分楽になつた。

風たちから教えてもらつた食べられる山菜などを見繕えば、数日程度なら何とかなるだろ?と見立てたところで……

「ん? 煙が立つてんな……こんな山奥に誰かいんのか?」

多少景色が開けたことで覗いている橙色に染まつた空に、ひとすじの煙が立ち昇つているのを見つけた。

俗世から身を離した隠者が住んでいふと言われても信じられそうな場所に、誰がいるというのか。

まさか、本当に隠遁者がいるとは思えないが、狩猟で生計を立てている者でも、こんな場所に住んでいふのかは疑問である。

「……よし」

外界から切り離されたような世界。

歓迎も拒絶もない、ただそこに広がる森

その中を、煙の方へと向かう決心をしたハセヲは、やつくつと歩き出した。

目算でも見当がついていた通り、ほどなくハセヲは田地に辿り着いた。

どうやら河原のスペースを利用して、生活をしている者たちがいるらしい。

近づくにつれて強くなつていった香ばしい匂いから予想はできていたが、焚火の周りに川で採つたのであらう山魚が突き刺されている。

二十本はあることから、四、五人はいるのだろうと推測された。

大木の裏に身を隠して息を潜めつつ、続いてハセヲは人の気配を探り始める。

(静かだよな……この近くには誰もいねーのか?)

時折、火が爆ぜる音や野鳥の鳴き声が聞こえる以外には、気配らしい気配は感じられない。

なので、誰かが戻つてくるまでのまま待機し、様子を見るかと判断した。

神経を研ぎ澄まし、わざこな変化にも反応できるよう、五感を周囲に溶け込ませていく。

(さあ、鬼が出るか蛇が出るか……)

とはいって、長時間これを持続できるほどの鍛度は持ち合わせていないハセヲ。

しかし、魚の焼け具合を見るに、間もなく誰かは戻ってくるだろ？ という希望的観測を抱いての判断だった。

そしてそれは 最悪の形で、現実のものとなる。

「 動くな」

「…？」

突如、背後に生まれた声。

直前まで全く感じ取れなかつた強大な気配を受け、ハセヲの目が大きく見開かれる。

次いで、声にならない悲鳴 実際はのどが震えただけ をあげて硬直した。

胸を剣で貫かれたかのような衝撃。

体中の毛穴という毛穴が開き、そこから冷たい汗が噴き出していく。

相手は感情さえも殺しきつたかのような冷たい声で静止を促してきてが、それ以前に全身が訴える寒氣でほんの少し動けそうにもない。

(嘘だろ……?)

呻くことしかできない。

訳が分からなかつたが、どうやら、自分は鬼や蛇どころか『龍』にでも出くわしてしまつたかのような、軽く泣きだしたいような心境に陥つていた。

無論、諦めているわけではないが……やすやすと背後を取られた事実に愕然としながらも、必死で次の行動を考え始める。

「お前は何者だ？ 僕を消すために送られてきた刺客にしては穩行がなつてないが……とはいえ、かなりの実力はあるようだな。警戒はしても殺氣は出していないあたり、『本物』ならかなりの曲者だが……」

「……」

ハセヲが必死に心を落ち着かせつつ、状況を開けるための方策を考えていたところで、相手から声がかかる。

少しだけ露わになつた声音は、若い男のものだと察せられた。

男も若干迷つているのか、先ほどまで叩きつけられていた霸気が和らいでいる。

しかしながら、依然として予断は許されない。

刺客に狙われていると零しているあたり、男にも相応以上の事情があるようだ。

まあ、こんなところに住んでいる時点で『訳あり』なのは確定だが。

「俺は怪しい者じゃない。それを証明する手立てはねーが、信じてもらえると助かる。ああ、それとな……」

「……？」

男がこちらを刺客の類だと思って処断を迷っているのなら、その意氣を挫く必要があった。

「わりと腹が減つててよ、よかつたら分けでもらえねーか?」

「……」

上手い手どるーか、正直ビリバ な気の逸らし方ではあったが。

ハセヲの発言 まんざら嘘と言う訳でもない により、張り詰めていた空気は弛緩しはじめていた。

目論見通りの結果を得られたものの、何かを喪失した感が否めないハセヲであった。

とにかく、二人は出会いを果たす。

「それで? 」「は? なんだ、雷魔? 」

軽く自己紹介をしてくるついで、完全に夜の闇に覆われてしまった森。

そこで結局、御相伴に預かれることになったハセヲは、一息ついたところで問い合わせた。

視線の先で、姓を雷、名を魔、字を霸龍と名乗った。しかも同年齢らしい。少年が、どこにそんなに入るんだと思えるほどに魚を平らげている。

背は高い。

筋肉質ではあるが、締りの良い肉つきをしているおかげか、細い印象さえ受ける。

顔は目つきが少しキツイが、端正なもの。

髪の色は紫。瞳も濃い目の紫色をしている。

また、初めて正面から向き合つた際に違和感を感じたハセヲは、ほどなくその正体に気が付くことができた。

彼の瞳孔が、龍の目のように縦に割れていたのだ。

どこか浮世離れした風貌の持ち主ではあるが、圧倒的な存在感を放っている少年。

彼は手にしていた魚を平らげると、答えを返してくれた。

「（）は泰山のふもとに広がっている森だ。少し前からここで修行を始めててな、今夜の晩飯を調達してたところにハセヲの気配を感じ

じて、様子を窺つてたんだ」

一人で山籠りをしているという雷魔。

初めこそ、他にも誰かいるのではと思っていたハセヲであったが、ほぼ全ての魚を平らげてしまつた様子を見て納得させられた。

何でも冤罪をかけられて追放処分を受けた末に、ここに落ち着いたらしい。

洛陽でそれなりの身分に就いていたようだが、本人はそんなことを気にかけるでもなく、気楽に接してくれることに、ハセヲは好感を覚えた。

「泰山つてのがどの辺にあるのかよく分かんねーんだが、幽州からだと遠いのか?」

「そりや遠いに決まつてんだる。幽州からみりや、ずっと東方にあたるんだ。なんだつて用があるわけでもないのに、こんなとこまでやつて來たんだよ、ハセヲ?」

「いや、それは俺の方が聞きたいことでな。……つて、そんな視線向けんな! 僕にだつて意味分かんねーことなんだよーー!」

ジトーっという音が聞こえてきそうな半眼でこちらを見据える雷魔の視線がちくちくと突き刺される。

ハセヲとしても、同じようなことを言われれば同様の反応を返すであらうから気持ちは分かるのだが、それでも事実なのだからと開き直るしかなかつた。

「それでも助けが来るアテはあるから、じょじょにで待機するつもりなんだが……」

「な、な、な、ならよ、俺の修行に付き合つ氣はないか？」

「……ふーん」

何をしようと考えていた訳でもなかつたハセヲの意識に、その誘いは大変魅力的　　後のハセヲは、この時の自分を殴り倒しても止めたであらう　　に聞こえた。

氣のないような空返事を返しつつも、表情に興味を滲ませつつ口を開く。

「臼にする修行つてーと、滝に打たれたりとか瞑想したりとか崖登りとかか？」

「やうだな、そういうこともする。肉体的強化はともかく、精神的強化を行うなら、ここみたいな場所は最適なんだ。

具体的にどんなものだかは……体感する方が分かりやすいな。ちよつと立つてくれ、ハセヲ」

言われた通りに立ちあがり、5mほどの距離をとつて対峙する。

そのまま雷魔は何でもないよう言つてきた。

「よし、いつでもいいから打ち込んでこいよ。全力で構わないぜ」

特に構えらしい構えもとらず、精々一つでも動けるよう踵を浮かし

てこる程度。

舐めているわけではない 雷魔の真剣な顔からそう判断したハセヲは、拳を固く握りこんだ。

(いいぜ、そこまで自信があるならやつてやろひじやねえか!)

好戦的な思考とは裏腹に、ハセヲは火照り始めていた身体を落ちつけようと呼吸を整える。

新鮮な空気を肺に満たし、動悸が正常近くに戻つたことを、雷魔に向けていた大部分の意識の片隅で把握した瞬間、

(いけ!)

雷魔が変わらず静止しているのを目につく。

全身の力を弾けさせ、渾身の踏み込みからの正拳を繰り出したが、

「……え?」

次の瞬間には、雷魔がハセヲの懷に潜り込んでいた。

同時に優しく触れるようにみぞおちにあてがわれた拳。

それは、これまでのどんな武器よりも恐ろしい凶器に感じられる。

身体の勢いは止められないために、回避も防御も不可。

未だ相手に届いていないハセヲの拳と、いかにもみぞおちに触れている雷魔の拳。

どちらが先手をとれるなど考へるまでもない。

覚悟を決める」としかできないハセヲに、その一撃は放たれた。

「つだあああ―――!？」

派手に後ろに吹き飛ばされ、大地に口づけする」ことになってしまったハセヲだった。

「戦闘を行うに当たつて効果的な方法の一つとして、さつきみたいな相手の意識の外 瞬きした瞬間とか、息を呑んだ瞬間などを突くつて技術がある。先手の意氣を潰して、結果として先に攻撃するってわけだ。

どんな相手だって、初動の際には僅かなりに意識に空白ができるもんだ。そこを突ければ勝ちの可能性はかなり高まるぜ」

思いのほか、ダメージが少なかつたハセヲはほどなくして立ちあがり、雷魔から先ほどの講釈を受けていた。

踏み込んだ足をそのままに軽く拳を押しこんだだけの一撃（ようするに自分の突撃の威力で自滅しただけ）ですませたので、雷魔としては十分に配慮していたのである

といつても、雷魔が言つ技術は理論上有効な手だということとは分かっているが、実践するとすれば難易度は激高なものだ。

そう考えていた心境が顔に出ていたのか、雷魔は一ヤリと笑みを深めながら、人差し指をたててのたまつた。

「誰かが言つてただる。こーいうのは、考えるんじゃなくて感じるもんだ。考えてからじゃ間にあわないからな」

(その元ネタは、「こんなに昔からあつたのか……）

ハセヲが場違いな感銘を受けていとはつゆ知らず、雷魔は説明を続ける。

「相手の呼吸、重心の移動、筋肉の収縮。これらを意識しなくても自然と把握できるようになれば完璧だな。向き不向きもあるから、完全習得できるかどうかは別としても、やってみて損はない。」

そもそも、本気で強くなりたいんなら無理だらうが無謀だらうがやるしかないだろ？ 死ぬほど頑張つてみて、それでも駄目だつたらそこで諦めりやいい。

別にそこまでをハセヲに求めているわけじゃないが……それでも、一緒に修行すれば今よりは確実に強くなれることは保障するぞ！」

自分でも今日初めてあつた男に執着しそぎでは、という意識が雷魔にはあつた。

嘘はついていないよつはあるが、それでも隠し「どがあるのは明らかにハセヲ。

しかし、それは自分も同じことだと雷魔は分かつていたし、詮索するつもりもなかつた。

それでも、ハセヲの瞳に宿る意志ちからを目にした雷魔は、ハセヲに対し

て興味を持ち始めていたのだ。

己の利益を何よりも優先する役人たちの浅ましさを嫌といつほび見せられた雷魔。

沈みゆく漢王朝の舵取り争奪戦の犠牲者といえる雷魔にとつて、ハセヲという存在は暗闇の中で道標を示す灯火のように思えた。

未だ、荒削りの原石のような獲物ハセヲを前にして、同じ『武』を抱ぐ者としての心が躍る。

自分もどれだけの力を身につけられたかは実戦を通してみないと分からぬ点もあり、雷魔から見ればハセヲへの勧誘は自然なことであつたのだ。

「そりだな、確かに他にすることも思いつかねーし……世話になる、雷魔。それとも師匠つて呼んだ方がいいのか？」

「やめとけ。そんな殊勝なタマかよ、お前は。まだ全然お前のことは知らねえが、それくらいは想像つくぞ」

「ああ、そりゃあ助かるぜ。じゃあ雷魔、よろしく頼む」

「おう、じゅうじゅだ、ハセヲ」

二人は拳を挨拶代わりとばかりに打ち付け、どちらともなく微笑をこぼす。

「ここきて、ようやく穏やかな夜が始まりを迎えたようだつた。

しかし、ハセヲは気が付いていなかつた。

雷魔の『龍』を彷彿とさせる厳かな瞳孔が、この瞬間に限つて『猫』のような悪戯めいた光を宿していたことだ。

そんな事もあり、雷魔とハセヲは、雷魔の提案通り一緒に修行を始めた。

その内容は、手合わせや崖登り、それに滝修行などを行つていた。

しかし、その様子は雷魔がハセヲを弄つて楽しんでいるように思えた。

例えば

崖修行にて、

「ほれほれ。早く登つて来ないと切つちまつぞっ。」

「うむせー。少し黙つて……。」

「……ほつ、そんな口利くか。じゃあ、この綱を……

「ま、待て！ 今登るから、切らないでください……」

そんな風に、崖修行ではなくてはならない（というか命に関わる）命綱を先に登った雷魔が手に「短刀」を持って、切ろうとしたりして、ハセヲの焦る姿を見たりして楽しんでいたり。

滝修行にて、

「どうしたどうした、足が震えてるや？ もう限界か？」

「震えてねえ！ もだいけるーー！」

「…………」

「うおー？ ひょー？ やめ……おわあー？」

ドパアアアアアアンー！

岩の上に立つて滝に打たれるのだが、少し限界が近づいてきたハセヲの足を蹴つたり、払つたりしてハセヲを滝壺に落としたり。

手合わせでは、

「秘奥義・重装甲破！」

ドガアアアアアアアアアンー！

「おい！ 今のは受けても喰らつてもヤバかったんじゃねーか！？」

「ちゃんと避けてんだから気にすんな。それよか次いくぞ、次」

「ハセヲ……、少し現実を知つてもらおうか」

「うつせー！ 見た目のわりに大人気ね 奴だな」

「大人気ないも何も、俺らはタメだらうがつー！」

「嘘だつ！！！ 絶対サバ読んでるだろ、お前！ どう考へても、十代の雰囲気じやねーんだよ！」

「ハセヲ……お前の負けだ。お前は 倭を怒らせた。敗因はただそれだけだ」

ヒュン……

「なー？」

「ドガー！ ドサアアアアアー！」

「ぐはー？」

「よしよし、これで通算97勝無敗。100勝まであと3つだな」

「つか、く……しよう……」

「さあ、ハセヲ。敗者は勝者に従うのが道理だ。では、手始めに……」

…「めんなさいは？」

ハセヲの無茶な攻撃と、年齢に対する暴言にキレて一撃でのすと、倒れているハセヲの頭を踏みながら、ハセヲに謝罪を求めたり。

そんな事をしながら、彼らの修行は恙無く（？）進んでいった。

そして、彼らが出会つて数週間後。

今日も今日とて修行に励んでいた。

「天下無双飯綱舞い！…！」

ハセヲはバク転の勢いを借りての蹴りで雷魔を空中に打ち上げた後、地に足をつけるやいなや追撃を仕掛け、『虚空ノ双牙』で怒涛の六連撃を無防備な雷魔に叩き込もうとした。

しかし、雷魔はハセヲが追撃しに来た瞬間「空中で」体勢を立て直し、技を放つ。

「閃空裂破！…！」

横回転で上昇しながら雷魔は、ハセヲを切りつける。

ガキン！

「ウニ」

ハセヲは咄嗟ではあるが何とか防ぐものの、空中であるため踏ん張ることは出来ず、そのまま吹き飛ばされてしまつ。

だがそれでも、なんとか受身を取り雷魔の方を向くと、目の前に雷魔の剣先が向かってきており、慌てて横に転がって回避する。

雷魔はそれを見て、剣先を戻し、着地した後すぐにハセヲの方に向く。

するとハセヲは遠めに距離を開け、武器を『シラード』に変えていた。

「ウチの娘がお母さんを殺すつもりだ。」

ハセヲはそう叫びながら突っ込んできた。

そして、突っ込んだ勢いのまま『シラード』を振り下ろす。

だが、次の瞬間

ガアアアン！！

何か光つたと思つたら、そんな音と共に『シード』諸共思いつき
り吹き飛ばされるハセヲ。

その顔には驚きの表情が張り付いていた。

なぜなら、雷魔が使っている一本の剣では、防がれるならまだしも

吹き飛ばされるとは思わなかつたからだ。

実際、雷魔が現在使つてゐる武器は、片方は日本刀のような剣である『黄龍』で、もう片方は鐔のない片刃の直刀である『飛龍』を使つてゐる。

この一つでは、大剣である『シラード』を弾いて、自身をも吹き飛ばすことは難しいだらう。

では、どうやつて？

答えの出でこない事を考へていると、いつの間にか自分は倒れてしまひ、その首には雷魔の『黄龍』が突きつけられていた。

「これで99戦99勝だな。100勝まであと1勝つと」

「…………ハア…………ハア…………ち…………ちくしょ…………」

雷魔はそう言いながら、顔をにやけさせ、ハセヲは悔しそうに顔をしかめる。

「さて、ハセヲ。俺が勝つたから…………わかつてるよな」

「はあ…………わかつてるよ…………」

雷魔の言葉に溜息を吐きながらも、ハセヲは起き上がり大き目の桶を一つ持つて歩き始めた。

「んじや、水汲みようしへー

」

その後姿に雷魔は機嫌良く声をかけた。

ハセヲの姿が見えなくなると雷魔は焚き火の準備を始めた。

「……せつときは少し危なかつたな」

そうつづぶやきながら手じりの石を拾つ。

（まさか、アレを使って防ぐ事になるとは……ハセヲが成長している証拠かね？）

そんなことを考えながらも、囲いを作り、次は薪となつた。

「さて、薪を拾いにいかないとな」

そう言つて、近くの茂みに入ろうとする雷魔。

すると……

ガサガサ……

いきなり向かおうとした茂みが揺れた。

「なんだ？」

雷魔は若干警戒しつつ、『黄竜』の柄に手をかけながら近づく。

その瞬間

「アアアアアアアアアアアアアアアア！」

そんな叫び声と共に橙色の何かが飛び出し、雷魔に襲い掛かつてき
た。

「なー？」

いきなりの事で驚きつつも、相手の攻撃を横に回転しながら避け、
相手の腕を掴み、回避の勢いと相手の勢いを利用して、投げ飛ばす。

襲撃者は、投げ飛ばされても空中で受身を取り、着地したと同時に
雷魔に突っ込んできた。

「ちつー！」

そつ^{サトシ}打ちしつつも、『黄竜』と『飛竜』を抜き応戦する。

ギイン！……ギン！ ガン！ ガガガガガガ！ ガアン！…

それから、しばらくの間金属のぶつかり合^{ハリ}音だけがあたりに響く。
だが、流石に襲撃者の猛攻に焦ってきたのか、雷魔は相手の攻撃を
弾いた後、自身の技を使う。

「一^ヒ吹^スつ^フ飛^ベ！ 獅吼^{シロウ}翔^{マハ}破陣^{ハジン}！！」

雷魔は隙の出来た相手の身体に肩から突っ込み、そこから腕を振り

ぬくと同時に獅子の形をした氣をぶつけ、少し相手を浮き上がりさせた後、空中に飛び上がりそこから地面を叩きつけ、その中心から衝撃波を発し相手を吹き飛ばした。

これには、先程まで猛攻を仕掛けてきた襲撃者もそのまま地面に叩きつけられた。

襲撃者は、しばらく倒れていたが、すぐに立ち上がり、構えを取る。だが、今は先程のようにすぐに襲い掛かって来ず、様子を見ているように感じる。

雷魔はそうなつて初めて相手の容姿や武器を確認できひみになつた。

そして、相手の姿を見て驚く雷魔。

その姿は、人の形をしているが、異形な感じがした。

その理由は、全身が継ぎ接ぎだけで、また目に生氣があるのか分からぬ。

だが、もっと驚くべき物が襲撃者の手に握られていた。

（あれは……ハセヲが使っている双剣に似てい……いや、それ以上だ。まさに瓜二つ……）

そう襲撃者の武器が、ハセヲの使っている双剣『虚空ノ双牙』と瓜二つだったのだ。

(となると、ハセヲの世界の関係者か?)

そつ考える雷魔。

ハセヲには言つてないが、雷魔はハセヲが異世界人かもと思つていた。

今まで追及しなかったのは、確信がなかつたのと、詮索する気はなかつたからだ。

「お前は何者だ？」

雷魔は無駄だと思いつながらも襲撃者にそつ質問する。

無反応とまではいかないが、相手の反応は質問に対してではないことわかった。

「……だんまりか」

予想はしていたが、流石に少し気落ちする雷魔。

すると、襲撃者は足に力を入れ、突撃の構えを取る。

「来るか……」

それを見て雷魔も応戦の構えを取る。

それを見て、突っ込んでくる襲撃者。

その瞬間

「やめろー。カイーーー！」

そんな雷魔にとつてここ最近聞きまくつてこる声が響き渡った。

すると、襲撃者の動きがその場で突っ込んだままの体勢で止まり。

しばらくして、ゆっくりと直立になつていった。

そして、雷魔はそれを確認した後、ハセヲに振り向いた。

「お前の仲間か、ハセヲ？」

両手に水の入った桶を持ちながら、こちらに向かつてくるハセヲに
そう聞く雷魔。

「ああ、そうだ」

ハセヲは水汲みか、それとも先程の事でなのか若干疲れたような返
事をする。

「なるほど。ハセヲと同じく、この世界の人間ではないんだな

ハセヲはその雷魔の言葉に「そうだ」と答えそつくなるが、彼の言
葉の中に聞き逃せない言葉があつたのですぐに聞き返す。

「雷魔。今、『この世界の人間』って言ったか？」

そのハセヲの質問に雷魔はしまつたといった顔をする。

だが、すぐに顔を元に戻し、ハセヲに面と向かつて言い放った。

「……ああ」

ハセヲはその雷魔の返事に少し混乱するが、気を落ち着かせ、さらには質問をした。

「どうから氣付いてたんだ？」

「ほぼ最初から。この世界の地名を使ってはいるが、明らかにこの世界のものではない服装。それに、武器を隠し持つかのような技術。そして、氣ではない何か特別な技の発動。これらのことがあつて疑わない方がおかしい」

雷魔の分析力に少々驚くハセヲ。

それでも、納得のいく内容だった。

「雷魔。あんた……本当に何者だ？」

ハセヲはここであえてそういう質問をした。

「……そうだな。ハセヲの正体も少しあわかつてきたりし、俺自身についても話しておくれか」

そう言って、雷魔は真剣な顔をする。

その様子にハセヲの背筋もなぜか伸びる。

「俺は」の世界では、最強部隊として名高い禁軍特殊警護部隊『天龍』^{りゆう}の元隊長であり、現皇帝である、漢王朝第十二代皇帝劉宏の義弟だ

雷魔の言葉に心底驚いた顔をするハセヲ。

それから、雷魔は自身の過去の経歴を話し始めた。

半刻後。

雷魔の話が終わり、ハセヲは少々難しい顔をしていた。

「じゃあ、次はハセヲの番だな

「…………は？」

その雷魔の言葉に少し氣の抜けた返事をするハセヲ。

「だから、俺が話したんだから、次はお前つことだよ」

「はい？　え？　……はい？」

少々混乱しているのか、雷魔の言葉に返事をするハセヲの言葉は变成了っていた。

だが、すぐに落ち着き、覚悟を決めたのか顔を真剣な表情に変えた。

「……わかったよ

そつとつて今度は、ハセヲのこれまでの経緯についての話が始まつた。

さうして、半刻後。

雷魔は何か納得したように頷いていた。

「なるほどな。そんなことがあったのか……しかも、リリとは違う外史があるとはな……」

そうつぶやいた後、何かを考えるそぶりを見せ、何か思いついたかのような感じに顔を上げた。

この時、ハセヲの中では嫌な予感がしていた。

「んじゃ、あいつ カイトだけ？ あいつが来たつてことは
帰るつてことか？」

「まあ、そういうな

雷魔の質問に素直に答えるハセヲ。

ちなみに、カイトは現在ハセヲの傍で直立不動で立っている。

「んじゃ、帰る記念に100戦目をこれからするかー。」

「は？…………はああああー！？」

突然の雷魔の発言にハセヲの叫び声が周辺に木霊した。

雷魔の突然の発言から、四半刻後。

二人は距離を開けて立っていた。

あの後ハセヲは、色々反論して断ろうとしていたが、雷魔に氣による回復術で体力を回復させられ、初めて出会った時並みの圧力を受け、頭を縦に振ってしまい、今に至るわけである。

閑話休題

すると、雷魔がある提案をしてきた。

「1Jの1戦はお互^い隠し玉とかをすべて出して、全力で、本氣で^や闘^わうぜ！」

「…………は？」

そう言つた瞬間、雷魔の周りに紫色の雷が走つたかと思うと、彼らのすごい圧力がハセヲに襲い掛かり、若干下がつてしまつ。

(なんつー圧力だよ！？ これがこいつ 雷魔の本氣かよ！？)

ハセヲはいきなりの圧力に内心震え上がつてたが、雷魔はそんなことに気付かずに次の行動に移つっていた。

それは、右掌をハセヲに向けていたのだ。

「さつき手合わせで最後の方にお前を大剣」と吹き飛ばしただろ？
あれはな……この武器を使つたからなんだよ」

バシュウウン！

雷魔がそう言つた瞬間、右掌が一瞬光り、その手には今までどこにもなかつた大鎌が握られていた。

「これが俺の隠し玉。 大鎌『天竜』だ

このことには流石に心底驚いたハセヲ。

だが、雷魔の次の言葉で現実に戻される。

「さあ、ハセヲ。お前の隠し玉。出せよ」

そう言われ、ハセヲも自身の隠し玉 大鎌『万死ヲ刻ム影』を換装し、『武獣覚醒』を行使して朱金のオーラを身に纏つた。

「なるほど。それがお前の隠し玉か」

「ああ。『万死ヲ刻ム影』だ」

「なるほど……だから、俺の中になつたこいつがざわついていたのか

ハセヲの答えに何か納得した様子の雷魔

すなど、そのま構えを取る。

さあ、構えろハセヲ。これが最後の手合わせだ！」

ハセヲもそれに合わせ、構えを取る。

しばらくの間、両者とも動かないで居たが、木から葉が落ち、それが地面についた瞬間

両者とも相手に対して突っ込んだ

數刻後。

初めは、お互いの手の内が分からなかつたためか、拮抗した戦いになつていた。

しかし、段々と雷魔が押し始め。最終的には、ハセヲの悪いところを指摘しながら、手合させをしていた。

そして現在、日が沈み、一人は焚き火を囲み、夕食を食べていた。

「なあ、話があるんだろ?」

そいつのはハセヲ。

雷魔は、ハセヲがバテバテになつて倒れた後、手合させを終了し、最近はハセヲばかりに行かせていた水汲みを済ませた後、ハセヲを起こし、話があると言つて、現在に至るわけである。

「ああ」

一方雷魔は、真剣な表情でハセヲを真っ直ぐ見た。

「お前に……真名を預けようと思つてな」

その言葉に、驚きの表情をするハセヲ。

「なんだつていきなり?」

「理由は三つ。俺の予想以上の成長を見させてくれたお礼と、カイトを止めてくれたお礼。そして、前から思つていたことだが、お前の目が澄んでいるからだ」

ハセヲの質問に対しての雷魔の回答に、一瞬目が点になるハセヲだが、次の瞬間には吹き出し大笑いしていた。

「ふふ！？」
クククク…………八八八八八八八八八八八八八八！！」

「なんだよ？なんかおかしなことでも言つたか？」

そのハセヲの大笑いに心外のような表情をする雷魔。

「い、いや……ククク……現実にそんな事をいう奴が居るとは思つていなかつたからな……クククク」

また、笑いが収まらないのが、少し笑いながらも意見を言うハセヲ。

「俺にはわかるんだよ。これまで色んな奴の目を見てきたからな。本当に善行を積んでいる者はお前のように目が澄んでいる。逆に、悪行ばかりしている者は、本当に暗く濁っていて見るに耐えない」

そう自身の体験談を話す雷魔。

その真剣な言葉を聞き、流石にまじめな顔になるハセヲ。

「だからこそ分かる。お前の目はとても澄んでいて、表では色々反発していても根はいい奴だってことがな」

それを聞いて、ハセヲはなんだか恥ずかしくなった。

たが止 預ける」の世界では命よりも大切な真名を上

「……わかった。受け取る」

雷魔の真剣な発言を受け、受け取る決心をしたハセヲ。

何より、ここで断れば雷魔の先の発言をないがしろにしたことになる。

それだけは、ハセヲは許せなかつた。

「ありがと。俺の姓は雷、名は魔、字は霸龍、そして、真名は紫電でんだ」

「確かに受け取つた。……これまで色々ありがとな。い、一応お礼は言つとくぞ……紫電」

翌日。

いよいよハセヲが別の外史へと帰ることになり、カイトの案内での外史へと繋がつてゐる場所に向かつ一行。

「あ～あ、弄れる奴が居なくなるつてのはある意味寂しいな

「やっぱ俺のこと弄つてたのかよお前はー?」

「ハハハ……冗談冗談」

「ハア……なんか星がここにいるよつだ」

そんな会話をしつつ向かっていふと。

前方に異様な裂け目と、誰かが立っていた。

その者の姿がはつきり見えるといつまでも来ると、ハセヲの顔が引きつる。

「ハセヲわや～ん。迎えに来たわよ～」

そこには、筋骨隆々で、禿げていてるのか剃つていてるのか分からぬ頭部と、両端に一本ずつ三つ編をして、オネエ言葉でしゃべるおつさんが居た。

「なあ、アレも知り合いか？」

「……ああ。知り合いたくもなかつた知り合いだ」

紫電の質問に溜息を吐きながらしつつハセヲ。

「だ～れが、知り合つたその日から夢にでも出てきやうなバケモノですつて～！」

「誰もそこまで言つてねえ！」

ハセヲの言葉が聞こえていたのか、ハセヲの言葉よりも悪化したことをつおつせんにシツコミを入れるハセヲ。

そんな様子に若干苦笑いをする紫電。

「それで？」こつは誰なんだ？」

苦笑いしつつも、おっさんの事について聞く紫電。

「ああ。」
「……」

「んまあ、カツコイイ男の子ねえ。あなたがハセヲちゃんを助けてくれたの? だったら、お礼のチップスを……」

紫電の質問に対してもうとしたハセヲの言葉を遮り、いきなり近づいてくるおっさん。

「うふー! やめひ! 僕にはそんな趣味はない!」

これには流石の紫電も慌てる。

「そんなこと言わはず!」
「ンムチュウウ!」

紫電の言葉を無視して、尚も近づいてくるおっさん。

「やめぬつてんだらうが!」

「ドガアアアアア!」

「ふるううううああああああ!」

流石に、自身の身の危険が最大限に入ったのか、強烈な右フックをおっさん……もとい、化け物の顎にヒットさせ、化け物は数十メートル吹き飛んだ。

「ハア……ハア……で? あの化け物は誰なんだ?」

まだ、動搖しているのか言葉が乱暴になつていてる紫電。

「ああ……あこひはな……驚くなよ?」

「なんだよ? 早く言えよ」

もつたこぶつてこると呟いたのか、まだ荒い口調で急かす紫電。

「あこひの名はな……貂蝉つて言つんだ」

「…………は?」

ハセヲの言葉が相当予想外だったのか、少し思考停止する紫電。

「え? あ? ……はあー?」

前世の記憶があるため、その名に対しても心底驚く紫電。

「いや、嘘だ……絶対嘘だ……そんなの誰が信じるか……」

紫電はやつぶつぶつとつぶやきだした。

まあ、所謂現実逃避だ。

その後、なんとか紫電を現実に戻し、貂蝉が戻ったといひで、本題に入る。

「……とこうわけで、管理者である私が来る事になつて、ハセヲちゃんになにかあったときのためにカイトちゃんを連れてきたわけ

他にも来たい奴が居たそつだが、流石に幹部クラスだったのでその辺は説得したらしい。

「さて、ハセヲちゃん。そろそろ帰らないといけないんだけど。なにかこの子　雷魔ちゃんに言いたいことはないの？」

その言葉を聞いて、少し考えた後、ハセヲは紫電の方へ向く。

「紫電。短い間だったが色々楽しかったぜ。紫電に色々と教わったこと、向こうでも生かせるように頑張ってみるな」

その言葉に紫電は笑顔になる。

「ねつ。じつも色々楽しかったぜ。もう会つ事はないだろうが、もし次にあつたときは俺の仲間も紹介する。その時もまた一緒に修行とかしようつな」

紫電がそつとハセヲはなんだか照れくさそうな顔をしつつも笑顔になる。

そして、お互いに静かに手を握り合つた後、

「「じゃあ、元氣で」」

そう同時に言つて、ハセヲは帰るために裂け目の中へ、紫電はその場から少し後ろに足を向けた。

その様子を見て、若干紹介していたが、紫電に蹴られ裂け目の中に入つていった。

そして、二人は裂け目が閉じられるまで、手を上げ続けていた。

おまけ（白き鍊装士側の世界）

裂け目に入りしばらく歩くと明かりが見え、それが段々と大きくなり、次の瞬間には光に包まれた。

そして、光りが収まったと思うと、目の前には見知った連中が立ち並んでいた。

「あ～…え～と……」

いきなりの事で、何を言つていいのか分からなくなつたハセヲ。

その様子を見て、目の前の三人は明らかにあきれた表情をして、溜息を吐いた。

「な、なんだよ？」

その三人の様子に若干戸惑うハセヲ。

その質問に頭に人形？を乗せた金髪の少女が答える。

「お兄さん。帰ってきたのなら、まあ面倒な事がありますよね～？」

その少女の発言にハセヲとなり、苦笑いをするハセヲ。

(そうだな。「帰ってきた」んだからこれを言わないとな)

そう思い、三人の顔を確り見て、

「ただいま。星、風、稟」

「　「　「おかえり（なむこ）主（ハセヲ殿）（お兄さん）」」

田の前のこの世界に来て初めて出会い、自分のことを主と認めてくれていて大事な大事な仲間にハセヲは確りと帰還の報告をした。

その体毛は、白といつよりも白銀に近く、目や鬚、それに尻尾は青い。それにその身体は通常の馬よりも一回りも大きかった。

その馬は、紫電にとつて掛け替えのない戦友ともであり、大事な仲間とも

「『白竜』……お前、俺を追いかけてきたのか？」

紫電に『白竜』と呼ばれたその馬は、彼に近づき、鼻をこすりつける。

「そうか……ありがとう」

白銀の鍊装士が帰った後、紫電は掛け替えのない友と再会を果たした。

「ラボ作品 ～白毛鍛錬装士との出合～」（後編）

以上です。

如何だったでしょうか？

初めての「ラボ」だったので、どういった感想を頂くのかドキドキします。

とつあえず、楽しんでいただけたら、万々歳です。

さて、本編のほうですが。

今回は許黙で霸王・曹孟徳」と華琳との出合いでした。

紫電ほどの能力があれば、華琳にも手を付けるのではないかと思いつつ、この内容にいたしました。

まあ、色々おかしかつたら」意見をください。

次回は、南皮でのお話になります。

では、次回もお楽しみに！

第十四話（前書き）

出来上がりましたので、投稿いたします。

今回は、南皮での話です。

どんな出会いがあるのか？

では、どうぞ……。

許昌を出て、一週間後。紫電は、袁紹^{ヒト}と麗羽の治めてる冀州^{さきしゅう}・南皮^{なんび}の近くまで来ていた。

「ふう……やつと南皮が見えてきたか。しかし、ここまでの道中、黄色の布を巻いた賊[。] 黄巾党が町や村を襲っていたな。ってことは、黄巾の乱が活性化してきてるってことか」

そう言つて、これまでの道のりを振り返つていた。

ここに来るまでに、紫電は何度か黄色い布を巻いた賊に襲われていた村や町に出くわした。

その度、紫電がその村や町を守り、少なくないお礼をもらつていたりする。

「こよいよ洛陽に戻らないといけない次期が近づいているようだな。そうなると、南皮には長居出来ないな。なんとかして、朝廷から黄巾党討伐令が出るまでに、幽州^{ゆうしゅう}まで行きたいしな」

そう言いながら、黄巾党討伐令が出されるまでの計画を頭の中で作る。

「しかたない。南皮では、情報収集だけして、その後、幽州の公孫^{こうそん}贊^{さん}が治めている北平に向かつか

そつ言つて、白竜に南皮に向かつて云ふえた後、再度考え込む。

「しかし、昨日見たあの流星……南の方に落ちて行つたな。あの方角は荊州か揚州の辺りだな。それに最近、巷で噂されているあの占い……確か『黒天を切り裂いて、天より飛来する一筋の流星。その流星は天の御使いを乗せ、乱世を沈静す』だったか？これは偶然か？いや、それにしては出来すぎている……」

そう言つて、思考の海へと入る。

しばらくして、考えがまとまつたのか、顔を上げる。

「しかし、『天の御使い』……それに『乱世を沈静』、ね。本当にその『天の御使い』とやらが落ちてきたのなら、何か起ころるかもな」

そう言いながら、紫電はその整つた顔に笑みを浮かべる。

「つと、とりあえず。まずは、南皮へ急がないとな」

そつ言つと、紫電は白竜を南皮へ走らせた。

それから、半刻後、紫電は南皮に入つていた。今回は情報収集のみなので、町の人達に南皮の様子などを聞いて回つていた。

「やはり予想通り。麗羽のところもあまり良いとはいえない治安のようだな」

そう言って、今まで集めた情報を整理する。

「麗羽自身もなんか前にも増して我慢らしいしな。これは、城に行つても話しを聞き入れるかどうか」

以前、洛陽で期間限定で学問を教えていたときも、麗羽は文句を言つたりしていた。美羽は、素直な性格なので、紫電の言つことは聞いていたが、麗羽は、真っ向から紫電に食いかかつてきていた。

「しかたない。情報収集だけにしようかと思ったが、一応教え子なんだし、城に出向いてみるか」

そう言って、紫電は麗羽がいる城へ足を向けた。

一刻後、紫電は町の茶屋でなぜかお茶を飲んでいた。

「…………まさか、門前払いとは」

そう言って、先程の出来事を思い出す。

とりあえず、紫電は城へと着き、城門の警備の兵に、「袁紹に先生が来たと言つてくれ」と頼んだ。

兵は少し訝しげな表情でしたが、すぐに取り次ぐと言つて、中に入つて行つた。

そして、四半刻後、兵が戻ってきた時、驚きの返答があつた。

「私には、先生なんて知り合はない」と麗羽が言つたらしく。
「そんなことはない」とい、再度取り次いでもらおうと思つたが、聞く耳を持たれなかつた。

これでは、仕方ないと想い、諦めて現在に至るわけである。

「さて、これじゃ、ここに来た意味がないと言つかなんと言つか。
時間がないし、今回は諦めるか。今度、また来ることにしてようかね」

そう言つて、湯のみに残つていたお茶を飲み干し、勘定を机の上において、宿屋に向かつて歩いて歩いていつた。

麗羽 Side

今日、庭の東屋でお茶をしてますと、驚きの情報、といふか報告が城門を守る兵からもたらされました。

「城の前に、袁紹さまの「先生」を名乗る男が来ている」と言つのです。

これには、流石の私も驚きましたわ。なぜなら、洛陽から追放され、行方不明になつてゐるはずの「先生」が今、この城の前に来ていると言つんすも。

最初は、丁重に招きいれようと思いました。ですが、今の私を見て「先生」はどう思つだらうか?と思つと、怖くなり、咄嗟に、「私は」「先生」なんて知り合ひはいません。その者を追い返しなさい」とこゝでしまいました。

兵は、それを聞に受け、そのまま報告に行つてしましました。

流石に、これは後悔しました。もし、あの「先生」だつたらどうしまじょづら~と悩んだりもしました。

ですが、また来てくれたら、今度はちゃんとお招きしようと思つました。

ですが、それ以降、「先生」を名乗る物が来た、といつ情報は私に上がつて来ませんでした。

翌日も、その報を待ちましたが、それでも上がつてくれないとはありませんでした。

その時、私は思つました。

昨日現れた「先生」が本物なら、自分は見捨てられたのではないか?と。

そして、その日は後悔だけが心を埋め尽くし、何もやる気が起きませんでした。

その時、ふと思つたのです。見捨てられてしまつたのなら、今度は、見直されることをすればまた遭いに来てくれるのでは?と。

なので、私は、その日から、一生懸命頑張ることになりました。

「先生」に見直してもいいやるよ!ひし。

麗羽 Side Out

紫電 Side

袁紹」と麗羽がそんなこと思つていいとも、紫電は、既に南皮から出て、幽州への道のりに乗つていた。

「さて、もう時間がない。急いで幽州に行つて、最後の英雄、劉備りゅうび、そして、幽州の太守、公孫贊を見ないとな」

そう言つて、紫電は、幽州への道のりを急いでいった。

すれ違つ思つて、ある決意をする袁紹」と麗羽。

だが、この決意が今後、更なる悲劇を起こす原因となるとは、誰にも分からなかつた。

第十四話（後書き）

以上です。

如何だつたでしょうか？

今回ば、南皮とこつことど、こつこつ感ひにしてしまった。

変なところがあれば言つてください。

そして、あの占い（予言）と流星が出来ましたー。

その正体とはー？……まあ、バレバレでしょ？が……（苦笑）

さて、次回は幽州にこきます。

そこで、何があるのか？

お楽しみに！

第十五話（前書き）

お待たせしました！

やつとりを更新です！

大学が始まって少し忙しかったので遅れました！！

さて、今回は幽州の?県にある村へと訪れます。

そこでどんな出会いが待ってるのか？

では、どうだ……

第十五話

南皮を出て、数日後。紫電は、幽州？県にある、とある村を訪れていた。

「さてと、ここに嶺れいが居るはずなんだが」

そう言つて、辺りを見回す。

「しかし、のどかな所だな。やはり結構北の方だから、黄巾党も少ないのかね」

そうこの村は、世間が黄巾党で騒がれ始めているのに、とてものどかだった。

「うーん……どの家が嶺の家かわからんねえな。……仕方ない。村人にでも聞いてみるか」

そう言つて、紫電は、今回、この村を訪れた目的の人の家を探すため、村人に聞いて回つた。

半刻後、紫電は、村人に聞いて回り、目的の家を見つけて、その家の前に居た。

「ここか……」

そこは、この村でもそれなりに大きい家だった。

「さういや、嶺も私塾を開いていたんだつたな

その目的の人も静音と同じく、私塾を開いている人物だった。

「さて、お邪魔しますかね」

紫電は、そう言って、目的の人物 姓を慮る、名を植しょく、字を子幹しがん、
真名を嶺が居るという家に入つていった。

嶺 Side

私は、今、書斎で書を書いていたところであった。

だが、あるお方のことが頭を過ぎり、集中できなくななり筆を置いた。

「はあ～……」

そのお方のことを考えると、自然とため息が出てしまう。

「…………紫電様」

私は、そう呟いて、そのお方 紫電様との出合いなどと思い出した。

私は、紫電様に会つ前は、洛陽で軍部に所属していた。

日々、民のためにと思い、鍛錬などを怠りずこやっていた。

しかし、軍部の自分の上司が、賄賂を受け取っているところを叩撃してしまい。少しこの軍部に疑問を抱くようになってしまった。

それからとおもふもの、度々そう言つた出来事叩撃してしまった。上司たちが腐っていることに気が付き、その現実に、とてもない絶望感を感じてしまったのだ。

そして、最終的には、この軍部を辞めてしまおうかと思つたりもした。実際、私は、学問にも精通しており、文官のよつな仕事も少しばかりはできていた。

そんな時、同じ軍部に所属していた、顔馴染みの者から、その当時、発足したての特殊部隊『天龍』への誘いを受けた。なんでも、その隊の指揮官に私の話をしたら是非とも連れてきてくれと言われたようだ。

私は、最初は断ろうと思っていた。しかし、その者の後ろから現れた少年を見たことにより、少し考えてみようと思つた。

その者が言つには、その少年が『天龍』を率いている方だというのだ。

その少年は、とても綺麗な目をしており、自分の上司たちとは違つて、誠実な雰囲気を醸し出していた。

しかし、どう見ても齡が十八にもいって無さそうな少年だったため、一部隊を率いる事に疑問が出てきました。

さらには、話を聞くと、その少年は、あの劉宏様の義弟であられると聞き、少し驚きを隠せなかつた。

そして、その後、劉宏様の義弟の誘いなら、断ることは出来ないと言つて、その少年 紫電様が率いる『天龍』への移籍を承つた。

その時は、単に「劉宏様の義弟だから」という理由で、所属を決めてしまつたが、それでも、その少年が率いることには疑問を持つていた。

しかし、度重なる修練や賊などの討伐、それに会話などを通して、紫電様の実力や、その性格に次第に心が惹かれていた。

そして、最終的には、紫電様に対しての恋心が芽生えるほどであった。

しかし、彼は劉宏様の義弟。なので、手を出すのは無礼だと自分に言い聞かせ、ずっと自分の気持ちを押し殺していた。

しかし、とある日、仲間の策略により、紫電様と一人きりの時間が出来てしまい、その日は紫電様と町に出かけたり、そこでお茶を飲んだりして、まるで逢引のようなことをした。

そして、その日の晩、意を決して、紫電様に自分の気持ちを打ち明けたところ、紫電様は、快く受け止めてくださつた。そして、その後、私と紫電様は……。

その翌日からは、とても輝いた日々を過ごした。恋敵はたくさん居たが、それでも、互いに応援しあつたりして、毎日が楽しい日々だつた。

しかし、『天龍』が発足してからわずか一年後。その事件は起つた。

紫電様が、謀反と言づ濡れ衣を着せられ、洛陽を追放されてしまつたのだ。流石の私も、その時は怒りにとらわれ、猛抗議をした。だが、私の意見は却下され、さらには、私も官位などを剥奪され、この?県へと追いやられた。

そして、それから六年。紫電様のことを思いつつも現在に至るわけである。

そうして、昔のことを思い出し、再度溜息を吐いた。

「はあー……」

その時、

「なんだ? 溜息なんて吐いて。幸せが逃げて行つちまつぞ?」

そう言つた、懐かしいお方の声を聞いたと同時に、誰かが抱きついってきた。

紫電 Side

紫電は、家中に入り、嶺の姿を探していた。

「おーい。れーい?…………いなか?」

そう呼びかけても出てこないので、色々と部屋などを探し回っていた。

すると、書斎らしき部屋の扉が開いてるのが田に入った。

「…………」

そのままひたすら、紫電はその部屋の中を覗き込んだ。

「はあ~…………」

すると其處には、何か書物を開きながらも筆を置いて、窓から遠くを見ながら溜息を吐ぐ、短髪で茶色の髪の女の女性 嶺が居た。

それを見て、少し悪戯心が芽生えた紫電は、そつとその背中に近づき、抱きついてこう言つた。

「なんだ?溜息なんて吐いて。幸せが逃げて行つまうぞ~?」

その瞬間、嶺の体がびくっと反応し、その端整な顔が驚いた表情を

つけながら、じりじりを向いた。

「し、紫電…… され？」

「なんだ？お前も静音と同じで、俺じゃないって言いたいのか？」

紫電は、さう言って、嶺の質問に答えながらも、少し顔をにやけさせた。

「い、いえー さう言つつもりではーーー。」

そんな慌てた様子の嶺を見ながら、さらに笑みを深める紫電。

「冗談だよ…… 久しぶりだな、嶺」

そう言って、紫電は、今度はとても優しい笑みを浮かべた。

「え？…… あ、はい。お久しぶりです」

嶺はそう言って、紫電のほうに向き直り、彼に抱き付いた。

紫電は、抱き付いてきた嶺の頭を撫でた。

それから、しばらく和やかな雰囲気が流れた後、嶺はふと疑問に思つたことを紫電に聞いた。

「ところで、紫電様。なぜじりじり？。」

「ん？ ああ。ちゅうび、北平に向かう途中に、県を通るから、ついでに寄ったんだよ。」ここで、嶺が私塾を開いているつて、襄陽を訪れた時に静音に聞いたからな

「そうなんですか」

そう紫電の「」に来た理由を普通に受け止めた。

「…………それに、嶺に会いたかったしな」

紫電がそう言つたとたん、嶺の顔が少し赤くなつた。

「や、そうですか…………」

嶺は、その赤くなつた顔を隠そつとそっぽを向いた。

「もうこえぱ、この六年間、紫電様は何をしてらしたのですか？」

そう言つて、紫電に追放されてからの出来事を聞いた。

「ああ。あれから、俺はな…………」

そうして、紫電は、嶺にこれまでのことを話した。

一刻後、紫電の話が終わつた。

「そうですか。麗羽が……」

「ああ。だが、また今度訪ねてみよつと思つてゐる」

「ええ。そうしたほうが良いと思ひます」

そう言ひて、これまでの出来事のこと振り返つた。

嶺は以前、紫電と共に麗羽や美羽に学問を教えた先生の一人でもある。なので、南皮での出来事は、それなりに意外だった。

「しかし、最近は、賊が増えてきたよつですね」

「ああ。洛陽を中心に、黄色の布を身に着けた賊 黄巾党が徘徊し始めている。近々、一気に勢力を拡大して、この大陸に危機が迫るだろつ」

「そうですか。そうなると、もしかしたら私や静音、それに風璃ふうりと、さらには紫電様にも上洛令が来るかもしませんね」

そう言ひて、嶺は、今後のことについて予測を立てた。

「何でそう思つ?..」

紫電は、嶺が言つたことに対しても質問を投げかける。

「考へても見てください。それが起これば、中央が腐敗している漢王朝では、その亂を止めるのは難しいと思います。そうなると、各地の諸侯が討伐を行つことになり、漢王朝の衰退が世に知られてしまうことになります」

紫電は、その嶺の言葉を黙つて聞いていた。

「そう考へると、そういう事態を引き起さないために、『天龍』の力が必要になつてしまひます。流石に、最初は張譲たちが渋るでしょうが、そこに現皇帝の劉宏様が、一声入れれば、正式に呼び戻すことが出来ます。これらを踏まえて、我々『天龍』が再結集することになると考えたのです」

そう言つて、少し疲れたのか溜息を吐く嶺。

「なるほどな。確かにそつしないと、朝廷の力は戻らんだろうな。しかし、俺たちにその報を届けるのはどうするんだろうか？」

「そこは、火穂や劉宏様のことですから、もつその辺は、査定なさつていいのでは？」

「そりかもな」

そう言つて、お互に微笑み合つ。

「……さてと、そろそろ北平の方へ向かつことにしますかね」

そう言つて、椅子に座っていた紫電は、立ち上がり伸びをする。

「もう行つてしまわれるのですか？」

「ん？ああ。黄巾の乱が近づいてゐた事は、もうすぐ呼び戻されるつて事だしな」

「わ、……ですか」

そう言つて、少し恥じらいそうな顔をする嶺。

「お、……んじゃ、嶺。また、洛陽でな」

そう言つて、紫電はその場から出て行つとした。

しかし、何かに後ろに引っ張られる感じがした。

後ろを振り返れば、赤くした顔を下に向けながら、服の裾を握つて
いる嶺の姿が目に入った。

「…………これじゃ、出て行けないんだけど?」

そう言つて、少し笑みを浮かべる紫電。

「あ、あの…………もう暗くなりまし、その…………よかつたら、いこ
に泊まつていきませんか?」

そう言しながら、赤くした顔を上げた。

そこには、瞳を揺らすあどけない女性の顔をした嶺がいた。

「…………いいのか?」

「はい」

紫電がそう聞くと、嶺はきつぱりと答えた。

「……わかつた」

紫電がそう言つたとたん、嶺の顔が少し明るくなつた。

その後、一人は夕餉を取り、これまでの話や、昔の話をして、盛り上がつた。

その時に、北平の太守、公孫贊は嶺の教え子だから、紹介状を書こうかと嶺が行つてきたので、一応、お願ひした。

そして、その夜。

「……紫電様」

「……嶺」

其処には、寝台の上でお互いを見詰め合つて一人の姿があつた。

その後、何があつたかは…………読者の皆様の想像にお任せします。

翌朝、紫電は、嶺と別れの挨拶をした後、白龍を呼び、北平へと向かつていつた。

そこには、まだ見ぬ英雄たちのことを思いながら。

第十五話（後書き）

以上です。

如何だったでしょうか？

いよいよ元『天龍』四武将の三人目登場です。

その名は、盧植。

そう。彼の公孫賛や劉備を育て上げた人です。

まあ、詳しい紹介はこの次に載せてあるので、そちらをご覧ください。

そして、次回はいよいよ最終目的地。幽州・北平。

そこではどのような出会いがあるのか？

次回もお楽しみに！

オリキャラ紹介三（前書き）

今回登場した慮植こと嶺です。

色々、史実とは違つかもしれませんが、それは外史といつことでも願いします。

オリキヤラ紹介三

姓 : 慮 しょく
名 : 植 しょく
字 : 子幹 しがん
真名 : 嶺 れい
性別 : 女
年齢 : 27歳
身長 : 159cm
体重 : 49kg
武器 : 不動(盾弓)

能力値 : 武力4、統率力3、知力4、政治4、魅力3

『天龍』が発足してすぐの時に、その時期に『天龍』に入隊したある人物が推挙した女性。

その者と共に、軍に所属しており、その者とは顔馴染み。腐敗している軍の内情を知り、辞めようかなどと考えていたとき、その者の誘いで『天龍』に来る。

最初は、若輩な紫電に率いることができるのかと疑っていた。しかし、話したり、一緒に訓練したりして、その人柄や実力に徐々に惹かれていく。

『天龍』解散後は、幽州啄郡で私塾を開き、劉備や公孫賛などを育てる。

『天龍』では、主に防衛を得意としていた。

容姿

綺麗の部類に入る顔立ちをしている。少し目つきがキツ目。髪は、茶髪で、ショートヘア。目も茶色である。

体型は、胸は大き目だが、スレンダーな体つきをしている。作者的に顔のイメージは「エヴァンゲリオン」の「綾波レイ」。

性格

冷静で、感情が顔に出ないタイプ。どんなことがあっても動搖しない屈強な精神の持ち主だが、『天龍』の解散の原因となつた事件のことに関しては、さすがの彼女でも怒りを抑えられなかつた。

しかし、そんな彼女も可愛い物（者）には目がない。

服装・装備

魏の楽進と同じような服装。違いがあるとすれば、下はホットパンツではなく完全なスカートである。色は、黄と茶の一色を基調としている。

戦闘では、その服の上から、胴当てをし、右手に籠手を付け、左手に盾『不動』を持って戦う。その『腕は、『曲張比肩』の黄忠に勝るとも劣らない実力を持つている。

また、戦闘時、何事にも動じず、また防御も硬いことから、『不動亀』と呼ばれる。さらに、防御戦では、『天龍』一の実力を持っている。

・陣形

方円陣、魚鱗陣、鶴翼陣、雁行陣、偃月陣

・奥義

LEVEL1・不動の精神

味方士気+、奥義+、敵士気-

彼の者に動搖という言葉は無い。

LEVEL2・不動亀

射撃、味方士気+、味方攻撃+、敵士気-、敵攻撃-

不動亀が率いる弓兵隊は、どのような部隊でも崩すことは出

来ない。

LEVEL 3 . 剛破裂弓

射撃、味方士気+、味方攻撃+、奥義+、敵士気-

彼女の弓技は、多くの者を貫く威力を持つ。

第十六話（前書き）

お待たせしました！

やつといた更新です。

大学が忙しかったので、遅くなりました。

それはさておき。

今回は、北平近郊での話です。

何が彼、紫電を待っているのか？

では、どうぞ。

第十六話

?県を出て、数日後。紫電は、北平への道のりの途中の、三の中居た。

なんかこの辺は平和だねえ

そう言いながら、空を見上げる紫電。

江戸に現れ、世話をした賊の襲撃などは無しんでなかつた。

「この辺の統治がうまくいっている証拠かな？」

そこで視線を前に戻した

その時、

ワード

۱۰۷

その視線の先、若干開けた場所の方から、多くの人の雄叫びが聞こえた。

「なんだ？」

そう言って、白竜をその場所に急がせた。

その開けた場所の先は、崖になっていた。

「「」の下の方からか？」

そう言って、紫電は白竜から降りて、崖の上から下を覗き込んだ。すると、目に入ったのは、黄色い軍団が円を描き、その中心で、何か戦っているような光景だった。

「あの中心で、黄色い軍団……黄巾党か？……と、誰かが戦つてゐみたいだな」

やつ言いながら、中心のほうに集中する。

すると、そこには、刃先が一股になつている槍を振り回して、黄巾党と戦つている、白い服を着た、見知った人物を発見した。

「あれは……星じゃねえか」

そう、今、その中心で戦つているのは、趙子龍」と星であった。

「あの戦い方は……結構まずいんじゃねえか？……それにまだ相当数の黄巾党が居るし」

紫電は冷静にその戦況を見る。よく見ると、彼女の足元には多数の死体が転がつており、どれだけの時間戦つていたかが分かる。

そして、その死体が足場をなくしつつあるのか、彼女の動きも少し鈍くなつていつているように見えた。

「……仕方ない。助けないわけにはいかねえな」

そう言って、紫電は、再び白竜に乗り、目の前の崖から飛び降りた。

星 Side

ブン！ズバ！！

「おめでたす！」

私は、そう叫びながら、目の前に居た賊を一閃した。

しかし、これはマズイな。

弱腰に策の実行を優先する伯珪殿との問答の末、単騎敵陣へと乗り込んだまではよかつた。

やはり武人はこうでなくては！

そう思いつつ、稲穂を刈るが如く敵を蹴散らし、屠ってきたのだが、ここに至つて状況が変わつてしまつた。

なぜなら、私が殺した賊徒共の骸が折り重なり、足場を埋め始め、

動きを阻害し始めたからだ。

「えええい！！」

ブンーザシユー！！

「ぐはあーー！」

苛立ちの声を上げ、脱出を試みるが、敵も私の動きが鈍つてきている原因に気が付いてきたのか、脱出せやせじといつ様に垣を作つて行く手を遮る。

それでも、私は脱出のために群がる賊徒共を殺していくが、その骸が無常にも、さらば私の足場をつぶしていく。

そんな悪循環にとらわれてしまつていた。

「ちいっーー！」

そんな、殺しても殺しても活路を見出すことのできない状況に、私は高らかに舌打ちをした。

そんな私の心に焦りと苛立ちが浮かび上がつてくる。

今までにない、限りなく近い死の予感。

「だが、そんな道理、我が武で捻じ伏させてくれるわーー！」

脳裏に走った、そんな死の予感を振り払つように私は吼えた。

しかし、気付けば骸の沼は腰の高さまで迫りついていた。

だが、そんなものなど何する物ぞと思い、私は田の前に迫る賊徒に必殺の一閃を放とうとした。

その時、

ズル

「！？ しまった！！」

不覚にも血塗られた地に足を取られ、大いに態勢を崩した。

いつもならば足を取られた程度では、どうこうともなかった。

敵の攻撃をあしらい、返す刃で命を刈り取るなど造作もないこと。

しかし、今、私を取り巻くのは、動きを阻害する骸の沼。

「……」一度態勢を崩してしまえば、それは致命傷となってしまう。

そう認識した私の目に、剣を大きく振りかぶった賊徒の姿が映った。

（ああ。これは間に合つまい……）

私の鍛え抜かれた戦闘思考が、そう告げる。

時間にして数秒……その未来に私はあの剣に斬られて死ぬ。

その未来視じみた光景に、笑いが湧き出てくる。

そうして、私は槍を持つ手に力をこめる。

(だが、ただでは私の命をやらん！道連れにしてくれる……)

その気迫を胸に、今まさに私に斬りかかるとしている賊徒に目を
向けた瞬間、

「ぎゃああーー！」

私が居る場所から離れたところから悲鳴が上がった。

「つー？」

いきなりのこと、私を殺そうとした賊徒は剣を振り下ろす手を止
めて、悲鳴が上がったほうを向く。

「な、なんだ！？」

「こうせんさん公孫贊の軍が来たのかー？」

私を取り囲んでいた賊徒共も断続的に聞こえる悲鳴に動搖が走った。

そのお陰か、私を包囲していた垣が、僅かだが緩む。

そして、その好機を逃す私ではない。

足を取られた格好から態勢を立て直した私は、今度はしつかり地に
足を踏みしめる。

「はああああああーー！」

ダンーー。

そして、裂帛の気合と共に上空へと跳躍した。

空へと舞い上がり、骸の沼から逃れた私は、滞空の時間を利用して悲鳴が上がつてこる元へと田を回ける。

すると、やにには

「なーー？あれは……紫電殿！？」

そうやにには、見事な白馬に乗つて、賊徒共を屠る紫電殿の姿があつた。

その姿は、まさに紫色の嵐。

両の手に持つた、一振りの剣を馬上から縦横無尽に振り回す紫電殿。

紫電殿が振るう一つの銀閃に触れた先から賊徒共の命が刈り取られていく。

しかし、何よりも驚いたのは彼の武だ。

以前にも見たことがあるが、それでも、前は手加減をしていたとか言いようがないほどの武を彼は披露している。

あれこそことに、天下無双、絶対無敵、万夫不当、国士無双。

私が、そんな紫電殿を見る中、不意に彼は私が見つめていることに気が付くと、私と視線を交わす。

(合流して蹴散らすぞ。全滅させるつもりだが、ついて来れるか?)

(承知! そちらこそ、遅れることのなきよ)

まるで、長年付き合つた夫婦か主従のように、紫電殿と意を交し合つた私は、落下点に居る賊徒共に向けて愛槍の『龍牙』を大きく振りかぶつた。

「せえええええい!!」

ドガアアアアアアアア!!

氣合一閃。

地面をも揺らす一撃に、そこに立つていた賊徒共をまとめて吹き飛ばして着地すると、その場に残つた賊徒共を一閃に内に屠つた。

紫電殿も、私の作った空間に馬に乗りながら入つてくると、馬から飛び降り、両手に持つた一振りの剣で、次々に賊徒の首を跳ね飛ばしていく。

足場が賊徒共の骸で溢れてくると、私は飛び上がり、別の地点に再度流星じみた突撃を加える。

ドガアアン!!

そこに紫電殿が続き、二人でその地点の賊徒を殲滅する。

そんな戦いを繰り広げているうちに、知らず知らずの間に、私は紫電殿と背中を合わせて戦っていた。

久しぶりに背を預け合つといつに、それを意識しないほどに同調していたのである。

（以前、一緒に戦った時も思つたが、やはり紫電殿とは相性がいいのかもしない）

そんな軽口まで心の中でつけるまでに、余裕を回復した私は、今まで私を殺そうと躍起になつていていた賊徒共が一転して怯みを見せていることに気が付いた。

私と紫電殿から円を描くように取り囲む賊徒共だが、誰一人としてその円の中に入つてこようとはしない。

まるで、その円のこすり側が、現世と冥界を分かつ境界線であるかのようだ。

そんな賊徒共の心変わりの早さに私は笑みを漏らすと同時に、先程見せた自分自身の情けなさに対しても少々腹が立つてくる。

（私は、じとまらない奴らに討ち取られようとしていたのか！……まったく。この様では、伯珪殿に言い訳は出来ないな。ならば、せめて賊徒共を殲滅することで差し引きぬきにしてもりおつ）

そつ思つて、息を一ついた私は、今一度、賊徒共に高らかな名乗りを上げた。

「卑しき賊徒共よ！今一度聞けい！！我が名は趙子龍！そなたらを黄泉路に誘う死の槍だ！卑しき賊徒に身を落としてもなお、男の矜持が残つてゐるならば、かかるて来るが良い！！」

星 Side Out

紫電 Side

(何とか間に合つたようだな)

紫電は、背中合わせに立つ星の氣配を感じながら、一つ安堵の息を吐いた。

紫電が崖の上で見た時は、いつ討ち取られてもおかしくないような、危なげな戦いだったから、間に合つかどうかは微妙だったのだ。

だが、流石は、後世に名を残すほどの武人。

紫電の作った隙からもの見事に離脱。

戦況を振り出しに戻した。

(それは良いとして。なんで、一人で突っ込んだのが後で聞かないとな)

そつ思いつつも、回りの黄巾賊の動きに気を抜かない紫電。

すると……

「卑しき賊徒共よー今一度聞けいー！我が名は趙子龍！そなたらを黄泉路に誘う死の槍だ！卑しき賊徒に身を落としてもなお、男の矜持が残つてゐるならば、かかるて來るが良いーーー！」

紫電の背後に居る星が、そつと高らかに名乗りを上げた。

「今更名乗りつすか……」

紫電は、少し呆れ、短い溜息を吐きながらそつと言つ。

「何を言われる。今じや、名乗りの時ではないか」

そつ星が返す。

「まあ、そつかもしれないけどな……」

「それよりも、紫電殿。貴殿も「」で一つ名乗りを上げてはいかが
か？」

そつ星が、紫電に提案した。

「こや、俺は……」

「なに、遠慮する」とはない。實際、私も紫電殿がどんな名乗り方
をするのか楽しみで仕方ないのだ

紫電は、一瞬遠慮しようと思つたが、星にそつと言われ、考え直した。

「わかつた。んじゃ、こへぞー！」

そつと、息を吸い。

「我が前に立つ賊どもよ、刮目せよ！我が名は……雷霸！……究極にして至高の武の具現なり！！我は龍となりて、汝らを屠り、黄泉路へと送らん！！それでも、臆することがないのなら、かかつて来るが良い！！」

ゾン――！

紫電がそつと乗りを上げたとたん、彼から、途轍もない霸氣と殺氣、それに鬪気が発せられた。

それらは、大気を揺らし、衝撃波となつて賊たちの間を駆け抜ける。そして、それらをまともに受けた賊どもは、徐々に後退りし始めている。

以前とは全く違つその気迫に、星は、目を丸くして、紫電の方を見ている。

「ほつ。まさか、それほどまでの力を隠し持つていたとは……これほど驚いたのは、初めてですぞ。紫電殿！」

そつと、紫電のこと讃める星。

「まあ、隠していたわけじやねえんだけどな。とりあえず、お褒めに預かり光榮……だな」

そう言つて、星の方へ向き、笑みを向ける紫電。

「さて、賊の士氣もそれなりに挫けた。あとは……狩るのみだ。星、ちやんと付いて来いよ?」

「そちらじゃ。あれだけの名乗りをしておきながら、私に遅れるとあつては、末代までの恥じですぞ、紫電殿?」

そう戦場にありながらも、笑顔で軽口を叩き合つた紫電と星は、会わせていた背を離し、黄巾賊の群れへと飛び込んでいった。

第十六話（後書き）

以上です。

如何だったでしょうか？

今回は、久しぶりの趙雲こと星の登場。

そして、彼女との共同戦線の話でした。

おかしなところがあればおっしゃってください。

さて、次回は公孫贊軍と合流します。

そこで何が待っているのか？

次回もお楽しみにー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0210p/>

真・恋姫†無双～紫雷の龍～

2011年10月9日00時50分発行